

五十嵐 一 追悼集編集局 編

五十嵐 一 追悼集 —— 未来への知の連鎖に向けて ——

目次

五十嵐一追悼集の編纂にあたって	2
年譜	5
五十嵐一の言葉	10
人物像	20
Symphonia Hitoshius	71
新潟高校 回想	91
著作目録・筑波大学開講授業科目	99 (xvii)

五十嵐一追悼集の編纂にあたって

あの「悪夢の日」から四半世紀以上の歳月が流れてしまった。ようやく大恩師の五十嵐一先生の追悼集を、不十分なながらも編纂するに至った。今回、時間的な制約もあり、非常に顔の広かった同氏を知る人々のうち、ほんの一部の方々しか連絡することが出来ず、本お声がけをすべきでありながら、それが実現できなかった方々には御詫び申し上げたい。また、お話を伺っておくべきであった人々のうち、鬼籍に入られてしまった方々も少なくない。御寄稿頂いた方の人から「いつか誰かがこのような企画をしないかと思ってきた」との言葉を頂戴した。今にして思えば、私自身もいつか誰かがと期待をしてきたものの、もっと早期に実現出来なかったものか悔やまれる。

正直なところ、五十嵐一氏ほどの才知に富む人間、似たような偉大な人物に出会うことは二度とないだろうと確信してきたものの、これまで、私自身自らが追悼集編纂の企画を進める一人になろうとは、おこがましい以外の何物でもないと思ってきた。因みに、私は氏が奉職した筑波大学で薫陶を受けた大勢の学生の一人であったとはいえず、実のところ、そもそも所属の学類（他大学の学部）に相当しすら異なり

（五十嵐氏は比較文化学類、私は国際関係学類）、氏が指導教官であったわけではない。また、所属先の別を超えて大変可愛がって頂いたものの、私が氏の多彩な学問的業績を百分の一（否、百万分の一以下といた方が適切かもしれない）すら把握しているとは言い難い。一知半解にも満たないであろうことを自省するにつけ、私が何かすることによって、むしろ恩師の業績評価に不要な傷をつけかねないと、心底

懸念してきたというのが自らの率直な弁解である。

今回、五十嵐氏の新潟高校時代の同級生の方から、「生きているうち」に彼の記録を活字化して後世に残したい」との発案を受け、半ば「背中を押される」形で、文字通り誠に僭越ながら、追悼集を編纂することになった。将来いつの日か、五十嵐一という稀有な学者、作家五木寛之の言葉を借りるならば「カブいた思想家」、業績の本格的な再評価や、人物像が研究対象となることもあるだろう。その意味でも、後世に同氏に関する一資料を残しておくことは、私を含め、同人物を知る「生き証人」としての責務と考え、全くの力不足で極めて断片的な証言や資料の収集となろうとも、作業を進めさせていただく運びとなった。

非業の最期が世界を震撼させたほどあまりにも衝撃的であったこともあり、その後、五十嵐一という学者について、およそサルマン・ラシュディ著『悪魔の詩』の翻訳者という部分だけが事実上突出して注目を浴びる展開となつてしまった点は、五十嵐氏を直接知る人間の一人として、非常に悔しく思う。あの翻訳は、氏が残した非常に多彩な業績のうち、ほんの一部でしかなかった。

本追悼集には筑波大学の紀要『言語文化論集』（二九九年）所収の「故五十嵐一助教授著作目録」を一部編集のうえ再掲載しているが、同日録の冒頭に記された「はじめに」から一部引用したい。

氏は、昭和二年六月一〇日、新潟市に生をうけた。県立新潟高校を卒業後、東京大学理学部数学科に進学し、四五年に卒業した。ついで大学院で文系に転じ、人文科学研究科美学芸術学専修課程に進んで、美学を専攻して五一年に博士課程を修了したことからも分かる通り、文理の二六性の枠を突破した自由な生き方

こそ最初から氏独自の学風であった。その年、イラン王立哲学アカデミー研究員——のち会員——として招聘され、昭和五四年九月まで三年間にわたって貴重な現地研鑽をつんでいる。帰国後、さまざまの大学で非常勤講師を兼任しながら果敢に執筆活動を展開して名を成し、六二年四月筑波大学に助教授として奉職するにいたった。

研究範囲は、イスラム思想を初めとして、数学、医学、ギリシア哲学、美学、科学哲学、比較文化、記号論、舞踊論、ミュージコロジーと、行くとして可ならざるなき七面八臂ぶりで、加えて作詞・作曲・脚色をかねたオペラ作者として舞台でも脚光を浴びた。語学は、英・独・仏は言うに及ばず、ギリシア・ラテンの古典語をこなし、さらには本当の専門はアラビア語とペルシア語であるというふうで、周囲の同僚たる語学エキスパートたちの心胆を寒からしめるのに十分であった。しかも、これだけの幅をこなしながら、大学教育にあたっては、余裕しやくしやく、英語の講座だけでも四コマもこなし、しかも、つねづね「自分の学問を本当に理解してくれたのは筑波大学である」と称して感謝を忘れず、どんな役割も進んで引き受け、学生の教育にも熱血をもって当たるといふふうで、その気概と誠意には教員・学生の双方ともに感銘させられぬ者はなかった。

殊にも、さながら最期を予期していたかのごとく、人生最晩年の本学での三年間は天分が一時に開花したかのような仕事ぶりで、『摩擦に立つ文明』『神秘主義のエクリチュール』『イスラーム・ラディカリズム』『中東ハンパが日本を滅ぼす』など、名著、問題書を続々と刊行し、なおその間に世上騒然の論議を巻きおこし

た『悪魔の詩』上下二巻をも翻訳上梓しているのであるから、その獅子奮迅ぶりにはただ脱帽のほかはない。」

五十嵐氏が非業の死を遂げた背景に、『悪魔の詩』の翻訳があったというのが、世の所謂「通説」であるが、厳密を期すれば、二〇〇六年七月に公訴時効が成立した後も今日に至るまで未解決だ。つまり「迷宮入り」したままであるが、非常に不可解なことに、この四半世紀余の間、犯人像について一部報道が僅かながらあったものの、あれだけ世界を震撼させた事件でありながら、未解決事件の真相追及を求める大きな声が湧き上ってこなかった。昨今、世界各地で国際テロが頻発しており、日本にも波及する可能性に警鐘が鳴らされている中、足元で既に発生した未解決の事件の存在が顧みられず、放置されたままであるのは理解し難い。その意味では、真相追及が使命という、職業上の原点に立ち返る、気骨ある真なるジャーナリストが今からでも登場することを願ってやまない。

五十嵐一氏の学問的業績の広さ・深さに関し、生前の氏を知らない人々の間では、未だに知られていない部分が多い点は非常に残念なことである。その背景には、二つの理由があると思われる。一つは、繰り返しとなるが、『悪魔の詩』の翻訳者という側面のみが「局部肥大化」されて世間一般に知られていること。二つに、非常に広範・多様な学問分野を縦横無尽にカバーした人物であったために、氏の業績を知れば知るほど、哲学、文学、宗教学、その他種々の学問、デシプリンを一つ、二つ押さえた程度では太刀打ちできない、と半ば怯んでしまいう向きさえあるのではないかと思われる。

本追悼集は、生前の五十嵐一氏を知る様々な方面の人々の「生の証言」を活字化して残すことにより、後世の歴史家や思想家が同氏の再評価を試みる際に、氏の足跡を辿る上で一助となることを目指して編纂したものである。これが一つの機会となり、現代社会を生きる各方面の人々が、氏の業績や人物像に関心を寄せ、また私たちが氏に関する更なる資料を残していくことになれば幸いである。

二〇一八年七月

五十嵐一追悼集編集事務局を代表して

伊藤 庄一（一九九二年度筑波大学卒業生）

higarashi.memorial@gmail.com

年譜

一九四七年六月十日

農林省勤務五十嵐淳浩（来迎寺出身）と祥（佐渡の神官小島千座長女）の長男として、新潟市旭町通り2-5239にて両親母方の祖父母とともに住む。

一九五三年四月

聖心幼稚舎入園

一九五四年四月

新潟大学教育学部付属小学校入学

一九六〇年四月

新潟大学教育学部付属中学校入学

新潟大学竹内公基より以後六年間にわたり英語並びに英文学の指導を受ける。数学は中学校在学中に独学で大学教養課程程度までマスターする。数学者になろうと考える。

一九六三年四月

新潟県立新潟高校入学。藤田一己、上田久則、黒井健などの友を得る。両親は転勤先に住まうが新潟に祖父母とともにとどまる。

一九六六年四月

東京大学教養学部理科I類入学。

東京での下宿生活、週に二十数コマの授業に出る。

英語担当の非常勤講師として慶應義塾大学から出講の安東伸介のクラスとなり、以後生涯にわたって安東家に入入りする。第二外国語のロシア語のクラスに所属、様々な外国語を学びはじめる。木村達雄、米沢明憲、川本敏、石川徳衛などの知友を得る。

日高八郎のゼミで高校時代から読んでいたシェイクスピアをさらに読み深め、日本シェイクスピア協会の会員になる。碑文谷の日高家を頻繁に訪れる。

一九六七年四月

このころ両親、祖父母が練馬区大泉学園3-9-6に転居、ここから通学する。

一九六八年四月

理学部数学科に進学。すでにこのときには数学を専門とする気持を失っている。恩師今道友信

との出会いもこのころ。

日高ゼミで、教養学部文科Ⅲ類の二年生是川雅子と出会い将来を約する。

数学科の授業よりも文学部や教養学部の哲学や古典の授業に毎日出る。

東大紛争が起こり教官の自宅その他で授業が続けられる。

数学科を卒業し（基礎論 藤田宏の指導）今道友信の指導を受けるべく大学院人文科学研究科美学芸術学課程修士課程に進学、美学関係の講義のほかには相変わらずギリシア哲学、キリスト教哲学、西洋古典文学などの授業に関わる（井上忠、斉藤忍随、荒井献、久保正彰、加藤信朗、伊東俊太郎などの演習）。同期の戸沢義夫、先輩の増成隆士夫妻、倫理学の谷隆一郎、哲学の宮本久雄、山本巍との交友もこの前後から。

一九七三年三月
修士論文「アイデアと美のへかたち」プラトン美学再考」

四月
人文科学博士課程に進む。

一九七四年四月
大学院比較文化課程を終えた是川雅子と挙式。

大田区南千束の雅子の実家の二階に住む。

新婚旅行で初めて、ギリシア、イタリア、イギリス、フランス、スペイン、スイスなどを訪れ、
達者な語学力を駆使する。

夏に軽井沢の中村真一郎を訪ねるのが恒例となる。

一九七五年
中世哲学会にてプラトンのパルメニードスに関するの発表（九州）。

奥津聖、谷川渥と交友。このころより東京大学医学部付属看護学校非常勤講師としてドイツ語を教えながら学ぶ。授業では、ドイツリードをはじめ各国語の歌を披露し、人気を博する。

長女、真奈出生、命名に頭を絞る。この年、今道友信に伴われ鎌倉にイスラム学者井筒俊彦を訪れる。前後して、アラビア、ペルシア語を学びはじめ。

一九七六年九月

十月

イラン王立哲学アカデミーの招待研究員としてテヘランに向かう。井筒、H・コルバンのもとで学ぶ。アーワーニー、シャーイエガン、イエガネなどイラン人学者と交友。西川節行、長坂明、赤松順太など官庁、企業人と親しく交遊することにより現実社会への関心が強まる。帰国するまで一年のうち八ヶ月はイラン、四ヶ月は日本という生活をおくる。往復途上でインド、香港、ソビエト、タイなどを訪れる。

一九七九年二月

九月

前年春より動きのあったイラン革命勃発
ようやく入手したチケットで日本航空特別便にて井筒夫妻と帰国、NHKの朝のニュース番組に出演。「西胡の巷にて」を経済企画庁広報誌「ESP」に連載。三井物産での講演を聴いた東洋経済新報社の中島資皓のはからいで『イラン体験―落とされた果実への挽歌』を上梓する。草柳大蔵の推挙により、草柳のサンデートーク（仙台放送）に出演、以後三回この番組に登場する。中小企業金融公庫の依頼で各地で公演。

十一月

長男、中（あたる）誕生、子煩悩がつる。長女の幼稚園、学校などよく顔を出す。のち長男に關しても同じように世話をする。

一九八〇年四月

再び東京大学医学部付属看護学校のドイツ語教師となる。看護学校でドイツ語の授業が廃止になるまで非常勤講師を務める。校長を兼任していた小林登を知る。

九月

イラン・イラク戦争起きる（〜89）。時事的な仕事が増える。
イブン・スィーナー『医学典範』を翻訳、佐藤達雄より解剖学を学ぶ。

医学史学会で公演、大塚泰男、酒井シズを通じて東洋医学への関心を強める。

一九八二年四月

利光功より玉川大学文学部芸術学科非常勤講師となる。この大学での講義が後『音楽の風土』となる。「マラー・ベ・ブース」上演のきっかけともなる。

六月

長岡技術科学大学工学部で科学技術史の集中講義をする。以後年に二度この講義を続ける。河

井継之助への関心を深め、のち『摩擦に立つ文明—ナウマンの牙の射程』を書く。伊東俊太郎、芳賀徹の紹介で日本文化会議のほとんど最年少の会員になるのもこのころか。例会では必ず刺戟的な意見を述べる。森本良平、貞子負債、小堀杏奴、小田晋を知る。

杉野女子大非常勤講師として美学を高ずる。学長岩澤英一を学長室に訪ね、雑談するのを楽しみとした。のちオペラや芝居の衣装製作などのかかわりを持つ。

I B M 伊豆会議に参加、岩男寿美子、木村孟など多方面の知友をえる。

一 九八四年四月
東海大学に移った日高八郎の縁で東海大学大学院で英文学を教える。中世および古英語のテキストをもちいる。

一 九八五年四月
専修大学文学部で大教室の美学の講義を担当。筑波大学に職を得るまでつつける。

一 九八五年五月
聖心女子大学キリスト教文化研究所員となる。月一度の研究会には以後まめに出席する。ここで森村信子、野上素一、森安達也、吉澤五郎などの知友をえる。

庭野平和研究会のメンバーとなり、坂本堯、峰島旭雄、清水良衛などと席を共にすることで様々な宗教、特に仏教への関心を強める。のち峰島の推挙にて、比較思想学会で講演、大正大学でギリシア語の講義を持つことになる。湯浅泰雄、竹本忠雄を知るのもこのころか。早稲田大学、慶應義塾大学にてそれぞれ一年間、ペルシャ語を教える。木村尚三郎の縁で富士通経営研修所の歴史の講座を担当、以後毎年数回行うこととなる。防衛庁の研修所の講師もこの頃同様に務めはじめ。

一 九八七年四月
筑波大学現代語現代文化学系助教授となる。竹本、増成の尽力であった。それまでの非常勤講師をほとんど続行する。多方面の執筆を進める。

一 九八八年
第二回「イラン会」と称するパーティーを東京ガーデンパレスにて開催。オペラ「マラー・ベ・ブース」製作、上演。

一九八九年

渡部正彦の放送教育研究所のラジオ教育放送を監修、担当する。
学園祭でのバンド演奏でヴォーカルとして登場、以後毎年続ける。
イタリア人ジャンニ・パルマの依頼でサルマン・ラシュディ著『悪魔の詩』翻訳。
小川泰を知り、自然科学と人文科学を「かたち」を通して繋ごうというアイディアに意欲を燃やす。

一九九〇年

筑波大学大学院哲学思想科の講義を担当。
聖喜劇「エマーム」製作、上演（於シアターVアカサカ）のため東京ガーデンパレスでパーティー開催。自ら司会をしバンドをバックにヴォーカルをきかせる。

一九九一年

湾岸戦争起こる。海部首相にレポート提出。アドバイザー役を担う。
五木寛之によって日刊ゲンダイの連載「流されゆく日々」で五回にわたり紹介される。「かぶいた思想家」と評され得心する。
人事院公務員研修の講師を務める。

七月十一日

小田晋とともにイラン人殺人犯の精神鑑定に従事。
筑波大学構内、現・現系七階の研究室から出、エレベーターホールに至ったところで何者かにより殺害される。死因は刃物による失血死。

「Symphonia Hitoshirus」（一九九二年七月）より抜粋

五十嵐一の言葉

『イラン体験―落とされた果実への挽歌』 (東洋経済新

報社、一九七九年)

「メソポタミア地方からオリエント一帯に栄えた文明は、次にその成果をギリシア文明に譲った。ギリシアはそれに磨きをかけ、イスラーム文明に遺産として伝えた。そしてイスラームは再びその遺産を殖やし、ヨーロッパへと引き渡したのである。技術から技術連関の新しい文明を完成させたヨーロッパが、今度はその果実をイスラーム世界に逆輸出するとしても何の不思議があるうか。諸民族、諸地域が互いに影響し合い、伝統と革新とに努力することこそ歴史の実態ではなかったか。」(208頁)

『中東共育のすすめ―イランの知恵と日本の無知』(東洋経済新報社、一九八三年)

「事実を表すラテン語 *factum* が「為す」という動詞 *facio* の過去分詞からできているように、事実とはすべてひとりで成るものではなく、必ずその背後に行為者の手がある。事実によりまわされないためには、その背後の行為者たる人間の本性にまで深く考察の懸垂を下す必要がある。戦争や抗争を惹き起こさざるにはいられない、いわば善と悪とがどうしようもなく混ざり合った人間の本性の理解なくしては、火に油を注ぐだけに等しいからである。」(118頁)

「西洋文明の起源がギリシアである、との通年はかくして二重の誤解を招来しかねない。一つは、ギリシアが固有独自の文化文明的源泉である、との誤解であるが、それ以前に存在していた圧倒的ともいえるオリエントの文明を忘れてはならない。第二は、西洋が直接にギリシアから学んだとする誤解であり、実際にはイスラームを経由しているのである。古代オリエント、そして地域的にはそれと重なり合う中世イスラームの影響を、長い間認めたらなかったのが近代西洋社会である。ヒトラーの反セム主義と同じ心情に根差した、理由なき反抗に近い。」(153頁)

『知の連鎖―イスラームとギリシアの饗宴』(勁草書房、一九八三年)

「根本(ねもと)を意味するラテン語ラーディクス *Radix* から出来たラディカル *radical* の語が、「根本的」、「根源的」という意味ではなく、むしろ「過激的」と用いられるようになったのはいつ頃からであろうか。日本や西欧社会からは一見して「過激」と映る動きしか示さないに近いイスラームもその「根本」を求めての憧憬の表現であるとしたら、彼らの立つ風景もよほど違ったものに見えてくるはずである。なぜならばそれは一つの知的風景に他ならないからである。」(1頁)

「危機を察知して警告を発することが知識人の重要な任務であったことは預言者や先哲たちの時代からの歴史が示している。危機の知とは知の本来的性格のようである。しかしまた多くの歴史はそのような知識人

たちが知ゆえに自らの存在を危うくした例をも示している。危機の知は知の危機をも招来する。」(4頁)

「危機と知とが本来的につながるものであることは、例えば危機を意味するギリシア語のクリシスが元はといえは『分ける』、『選ぶ』とを意味する動詞 *krino* に由来し、これが同時に批評(クリティーク)という言葉の語源となつてゐる事実からも察せされる。批評という知的行為の源泉は、敵陣に攻め入るオデッセウスが自らはもちろん精銳の部下二十名を選びすぐつたように、『自らの生命をも賭けて、最良と思われるものを自己の責任において選び採る』行為に他ならない。」(4頁)

「顧みれば、身体の医者に対して哲学者を魂の医者であるとみなしたのは、プラトンであつた。そして『バイドーン』のソクラテスの語るところ、哲学とは『死の演習 *meletēn tou thanatou* に他ならなかつた。生と死との交錯するところ、それはまた医学と哲学と、そして宗教やモラルの交錯するところでもあつた。生と死との織りなす健康と病氣との葛藤こそ、人間にとって解明し、味わい、受け入れていかなければならない普遍的事実そのものだからである。『哲学はつねに同じ一つの主題にかかわる』、とみぬいたのはプラトンであるが、生と死の主題は哲学およびその一特殊分野としての医学にとつて、相不変のテーマなのである。」(137頁)

「哲学は常に一つの主題にかかわる、と喝破したのはプラトンであつた。そのひそみに倣うならば、イスラーム哲学などと言挙げし、ギリシア哲学との比較を云々することなど慎むべきことかも知れない。哲学はひ

たすら哲学であるか否かを問われているのであつて、その相の下に立てば地域時代の偏差は二次的なものに過ぎず、ましてや影響関係などに本来的意味はないからである。」(144頁)

「ギリシアにおいてもイスラームにおいても哲学に総称される知的営為は、いわゆる『哲学』の被つた近代以降の矮小化に比べてはるかに広く深いものであつた。われわれはそこに知の連鎖をみる思いがする。」(145頁)

「およそものごとを真剣に考えぬいていけば自ずから哲学の方途は拓けて来るともいえようが、しかし哲学の途とは思索のみに止まるものではない。思索の結果ある一つの判断に到達すればそこが実践への入口となるからである。逆に実践の裡に集積沈殿してくる知識も少なくないからである。」(212頁)

『音楽の風土―革命は単調で訪れる』

(中公新書、一一九八四年)

「企業人が業を企てる人間であるのなら、授業をする私どもは業を授ける人間なのであつて、その自覚と反省に立てば通じ合う所も多いのである。」(v頁)

「宗教というものは、社会の様々な変化変動、軋みに対する潤滑油の役割を果たすことがある。底流の変化や表面波の激動にさざ波を立てられ

た人間の心を救うのは、やはり宗教の重要な役割である。見方を変えれば、戒律を慣習的に護持しているだけでは飽き足らない、心の悩みや不安や疑念を救う形式が必要とされる。かくして不安の時代には、宗教それも特に神秘主義が普及する。(110・111頁)

「特に芸術や文化の領域において、普遍的なるものがすべてではない。」(137頁)

「批評 (criticism) の原型とは、『自らの責任において、裁量最善といえるものを選びとる決断的行為』ではなかったか。古代ギリシアの将軍オデッセウス敵陣に攻め入るに際して、自らと運命を共にする武者たち二十名を選びすぐった。決死の覚悟で一つの舟に乗り込む、運命共同体ともいべき同朋を選びとる行為をホメーロスは *khos* と表現したが、この動詞から *criticism* の語が派生した。批評とはそもそも危機 *crisis* に立つ、危険を覚悟した *critical* 行為なのであった。」(176頁)

『イスラーム・ルネサンス』

(勁草書房 一九八六年)

「・・・本書が一石を投じる価値があるとすれば、それはコーランを始めとする典拠やイスラームの伝統への沈潜に基づく研究と、同時代的に発生しているアクチュアルな事件、出来事の分析および対処への指針とを融合させていく試みにある。」(ii頁)

「本書の方法、あるいは筆者の態度決定は、およそ知的なるものへの注目、そしてその実体分析にある。イスラーム・パワーの本質をその知的エネルギーの持続にあるとみて、すべての現象に潜む知恵のありかを検討する。いわばラディカル(＝過激的)とみえる事件の背後に、知的ラディカリズム(＝根元主義)を読み取っていく試みである。」(iii頁)

「西欧的知が、知の普遍妥当性を強調し、さらに合理的知識を深く追求してきたことはよく知られている。しかし前者の検証のために、まさしく実験という名の拷問をしばしば自然や人間相手に課し、後者の実現のために、省力化や快適性という経済的合理性の旗印の下、マーケットを開拓してきたのであった。実験を支えている思想には、世界とはくり返しが可能であり、こちらの仕掛けには充分応答してくれるはず、との樂觀的発想があるし、合理性追求の精神には、世界を因果律の連鎖と必要條件の網の目でカヴァーし、あとは欲望調節機構を完備しさえすれば、すべてを押しさえ込めるといふ自信が潜む。

これに対してイスラームの知は、合理主義の網の目では掬えない存在にむしろ注目する。一方の極にはあまりにも大きな神がいるし、他方の極にはあまりにも小さな個人、すなわち固有名詞を冠されたひとりびとの人間がいるからである。そしてアッラーの神はただ単に世界を創造しただけではなく、今のこの瞬間にも創造を新たにされ、被造物がお気に召さなければ創造のやり直しをされると信じていることから、世界に対する根本的な怖れと同時に感謝の念を抱いている。イスラームには実存主義などという言葉はないけれども、人間の実存を神との関係において深く知識してきたのである。イスラームの知は合理性を超越した、あ

るいは包越した特殊で特異で、くり返しのきかない一回限りの実存に向
けられているのである。」(17・18頁)

「顧みれば、知の方途を追求し、知の道に生きたソクラテスの最期は、
その知的態度ゆえに刑死したのであった。敢えて危機的状況にも臨み、
自らが惹起した新たな危機をも引き受ける。さらには、悪をなす(カコ・
ポイエイン)よりは悪をなされる(カコ・パティン) 方途を選んだソク
ラテスには、ひとりの知識人の原型がある。ギリシアの知的伝統を受け
継いだイスラームがソクラテスを意識したか否かはともかくも、今日で
もその知的エリートたちが危機的状況の中で、知的営為を刻みゆく姿に
は、時代や国境を超えた大きな知の連鎖を感じさせられる。」(21頁)

「いつの時代でも真の科学者は謙虚さと敬虔さにおいて宗教人に少し
も劣らなかつたし、真の宗教者はその知性と構想力において科学者にひ
けを取らなかつた。それゆえに『宗教 VS 科学』という月並みの対比は、
実体のない影の如き部分が多いが、残念なことについてこの時代にも亜流は
多く存在するために、悪口の応酬がなかなか収まらない。」(46頁)

「宗教といひ自然科学といひ、両者は一見して相隔り対立し合うように
映るものの、実は深められれば深められるほど互いに一枚の紙の表裏の
ように、密接に連関し共鳴し合うものと思われる。とかく一方の長所と
他方の短所とを引き合いに出し、相手を断じ去る議論が多いのは残念な
がら事実である。これもひとつの決定論的思考の誤謬に違いない。」(55

～56頁)

「創造と藝術の問題を、人間の創造力が働いた結果われわれの身の廻り
に藝術作品が結実する、との位相ばかりで把えるのではなく、超越者の
想像力が人間をして藝術作品へと完成させる、との位相で反省してみる
必要があるはしないか。」(62頁)

「知恵というものの本質は共時性、そして時代と地域を超えて復活蘇生
し得るところに存する・・・」(179頁)

「顧みればルネサンスとは、知の本質的契機であつたはずである。知は
いつも人の死と再生とをくり返している。無知や偏見、誤解や曲解の段
階から知へと展開してゆく過程は、いわば小さな死と再生の持続である。
そのことは個人の裡にも学習や思索の過程においても生起するし、共同
社会の間でも、さらには時代と地理を超えて伝統を継承する場合にも生
じ得る。」(206頁)

「真の知識人ならば、事実は根拠でない、と言表すると同時に、事実と
して為された事柄(『factum』)の背後に働く意志や力の作為性(『facere』)
を見抜いているはずである。知識人への第二の誤解は、後者の条件を欠
く似非非知識人が多いことにも起因する。」(210頁)

『摩擦に立つ文明—ナウマンの牙の射程』

(中公新書、一九八九年)

「およそいかなる厳密科学なるものも、自己の規定もしくは希求する厳

密さゆえに、常に裏切られる運命にあることを知るとよい。」(21頁)

「思わぬ偶然が人と人とを結びつけ、ゆくりなくも時と所を同じくして袖触れ合った者どうしが必然的關係へと発展することは、歴史上時として見出せる妙味である。そこでは人為的努力だけでは済まされない別の種類の力が働いて、時代の趨勢が形成されるし、ちよつとしたポタンの掛け違いが大きな破綻に繋がることもある。歴史のアイロニーとはそのような事態を指す評言であろう。」(38頁)

「文化を英語で言えばカルチュア culture、ドイツ語でもクルトウア Kulturであるが原義は『耕す』ことである。したがって土地 (gan) を耕す (culture) のが農業 (agiculture) であれば、心 (cor) を耕す、いわば cordiculture こそ精神文化といえよう。その限りでは文化があつて摩擦が生じるのではなしに、摩擦の裡に文化がある。それはちよつと、穀物の収穫高が大きいからといってその土地に安住し、耕作を忘れていたのでは地味がやせると同様に、易きところに安心立命したり、自分の立っている、あるいは立たされている地平の掘り起こしの反省なしに心を働かせるだけでは文化はない。」(50～51頁)

「鵬外の偉大さは、文化摩擦を自己の裡に直接体现し、その痛みに耐えて、かつ自己変革を遂げてきた真の文化人としての資質にある。鵬外の魅力は、ドイツ語の作文ができたとか、軍事医学にも業績を挙げたという多才なタレント性にあるのではなく、文化というものの破壊力を真に自己の一身に受けとめて、さなぎから蝶へと変身、否、精確に言えば変心していった点に潜む。」(51頁)

「・・・摩擦は一方的にのみ存在するのではなくて、力の作用・反作用の法則の示すように、双方に同じ力が働く。」(76頁)

「顧みれば、動摩擦力は最大静止摩擦力よりも小さい、とは物理学の法則であつた。つまりジツと我慢に我慢を重ねて動かないでいると摩擦はどんどん大きくなり、ついにこらえきれなくなつて動き出す直前の摩擦力(最大静止摩擦力)は、一定速度で動いているときの摩擦力(動摩擦力)よりも大きいのである。摩擦を感じたときは手をこまねいて、あるいは希望的観測でじつと止まっていたのではかえつて負荷が嵩む。さらに言えば、最大静止摩擦力まで目いっぱい我慢した後に動き出したとき、かえつて楽になつたと感じる場合もあれば、反対に急な動きに驚いて転倒してしまう場合もあろう。」(89頁)

「心を耕す(カルチュア)行為という文化(カルチュア)の原義に照らして考えれば、文化があつてその後には摩擦が生じて来るのではなしに、摩擦と感じ取る心の働きがすなわち文化の根源である・・・同様に文明を指す英語の civilization にせよアラビア語の ma'manun にせよ、語源は都市化であり、横浜村を開港場にするように荒野を開いて道を造成し、橋を架ける作業は大地の耕作(カルチュア)行為に他ならない。そしてそこで必要とされる科学技術やデザインの美的感覚も、心の耕作としての文化に支えられている以上、文化文明のいずれもが深く摩擦に根ざし、摩擦に立つものなのである。」(89～90頁)

「摩擦三原則」

一、「摩擦の作用、反作用」 摩擦力はそれを惹き起こす側にも、受け止める側にも双方とも同じ力で働く。摩擦を与えた側も同じ量の摩擦を反作用として受け取るわけで、比喩的に表現すれば、「こちらが苦しいときは、相手も苦しい」のである。

二、「摩擦の転移則」 摩擦は二つの方式で転移する。その第一は時空的なもので、一箇所で発生した摩擦はそれほどの時を移さずして別の地域に転移する。第二の方式は質的転移で、社会経済摩擦が文化摩擦に転移したり、経済や軍事の外圧が強くなると、ウツブン晴らしに四周に当たり散らすし、「あのレモンは甘い」とばかりに文化摩擦にすり替えるようなものである。

三、「動と静の摩擦則」 動摩擦力は最大静止摩擦力より小さい。すなわち静止して動かないままで摩擦をこらえていると、摩擦力は次第に増加していく。動き出す直前の摩擦力を最大静止摩擦力と呼ぶが、この力の大きさは動きはじめたとき、もしくは動いているときの摩擦力よりも小さい。比喩的に表現すれば、「ジツと我慢して動かないでいるよりは、とりあえず少し動いてみると良い」といえる。(95、96頁)

「摩擦とは相手があつてはじめて生じるものである。こちらの事情や思い込みだけで相手との交渉がうまくいき、摩擦が解消もしくは軽減されるとは限らない。そして対処の手をこまねいていれば静止摩擦力は増加の一途を辿り、慌てて動けばそれこそ動転しかねない。しかしながら反対に、お互いの力のやりとりのなから相手側の事情や力量などが読み取れることもあり、意外な突破口が開けてくる。」(175頁)

『神秘主義のエクリチュール』

(法蔵館、一九八九年)

「・・・本当に良いアイデアとか知恵とか悟りとは、求めている方向にはなくて、思わぬあたりから垂直に切り込んでくるようである。回転の円運動にしたところで、グルグル回る物体の進行方向とは垂直に求心力が働いて、運動を続行させているわけで、影響力とその効果とは同一方向に現れるとは限らない。」(21頁)

「・・・私は、文化とか教育とか宗教とかいうものは、『一事が万事』であると考えている。」(29頁)

「身に着ける知識ではなくて、心に染みる知識こそがほんとうの知識である。」(103頁)

『東方の医と知―イブン・スィーナー研究』(講談社、一九八九年)

九八九年)

「普遍主義とか合理主義とはいえず、それはひとつの価値観であり、ある一方向の選択肢を採用したにすぎず、絶対的評価基準ではないはずである。」(4、5頁)

「・・・哲学思想の正当な歴史的理解を望むならば、医と知の内的連関

は深く未読されねばならない。生物学者や自然科学者としてのアリストテレスの知的側面が彼の哲学体系の全体的理解に不可欠であるのと同様に、医学者イブン・スィナーととしての知的道徳が彼の哲学を知的総体として把握する上でも必要だからである。」(9頁)

「文明は橋を架けるが、文化は大地を掘り起こす。

文化が耕す土壌が精神という裡なる大地である場合、そこからは精神文化の花が開き実が結ばれる。文明が架ける橋が外の世界に向かって伸びてゆく場合、人が通り、物質が往来し物質文明という名の都会が出現する。

アラビア語でも文化を意味するアダブ (adab) の語源は「躰けること」であったし、文明を意味するマディーナ (madīna) とは、そのまま都会をも指していた。その限りで文化とは格別に内面を躰け、精神の内なる畑を耕すことであり、文面とは外面に向かって発展し、街を造ることに外ならない。

しかし文化文明の持つ収縮拡散運動のベクトルは、より複雑微妙な動きをする。裡なる畑に収縮するかに見える文化の掘り起こしの運動が、突如反転現象にも似た動きを示して、外に向かって拡散する。反対に外へ外へと拡散していく最中に、内実が変容して意外な衝撃波を惹き起こすこともある。魂の奥底を破られるような内面的パトスなくしては、架らない橋もあろうし、連続的な物資の往来が蓄積した果てに忽然として拓ける精神の位相もあろう。」(20頁)

「文化的には断続しているように映るうとも、文明的には架橋されていく様々な文物や異国の人間たちが往来する場合がある。反対に文明と

しては滅亡して途絶えた街並みも、別の時代に別の所で文化的に復興し、新たに同様の街並みを見せることもある。文化と文明とは収縮拡散を繰り返し、お互いに刺激し合い、ときには時間空間をワープして新生の第一歩を踏み出すことがある。古典的ギリシアからの架け橋が中世イスラームに及び、更にそこから近代ヨーロッパへと伸長してきた歴史を味わうべきである。」(24頁)

「プラクティカルを実際的で訳出し、プラクティカルな学問を実学つまりは実用に役立つ学問、と理解して済まされるか否かはよく反省してみなければならぬ。少なくともプラクティカル practical という英語の語源にはギリシア語のプラクシス *praxis* があり、これはおよそ意味のある行為を指す言葉であったからである。そのように反省してみるならば人間の為す行為を吟味検討し、最も推奨されるべき行為を探求するはずの哲学こそ、最もプラクティカルな学問ということになる。」(24頁)

「あたかも電場と磁場の相互誘導作用にも似て、文化と文明とは互いに誘導作用を繰り返しながら複雑微妙に絡んだ展開をする。時には物資文化や精神文明といえる相貌を見せることすらある。古典的ギリシアから中世イスラームへ、そして中世イスラームから近世ヨーロッパへと、人間の知的営為は多彩な文化文明の様相を呈しながら受け継がれていった。」(29頁)

「理論と実践などという不毛にして不正確な区別、もしくは対立が取沙汰されるようになったのは、いつからであろうか。そして時として知性を働かし理論を扱う哲学の徒は、実践を知らぬ半端者として蔑まれもす

る。しかし考えてみれば理論なき実践などまずあり得ないことは明らかで、あるとすれば完全に泥酔状態にある人間の行動くらいのものである。なんらかの目的、すなわち一つの善を目指して目論みられる行為の場合には、必ずや知性の働きの基づいた一つの行為理論がインプットされているからである。反対になんらかの実践的行為と相渉ことのない理論も、医学の場合はむろんのこと、純粹数学の場合ですら成立し得ない。」(241頁)

「・・・学問的知識の特徴として、ちょうど多くの専門的技術者を統べる棟梁の場合のように、単に経験の集積に止まらず、そこから抽象する能力に依存し、またその結果抽象された形相として立つのが学問的知識に外ならないと言えよう。」(247頁)

『イスラーム・ラディカリズム―私はなぜ「悪魔の詩」を訳したか』

(法蔵館、一九九〇年)

「・・・私の信奉するラディカリズムとは、暴力的な事柄を愛好したり実践する、単に過激な言動や思想的傾向を指して言うのではない。この言葉の語源であるラテン語のラディクス *radix* が、根本とか根元を意味するのに即して、およそものごとの根本にまで遡及し、根元的に考えた反省しつつ実践する態度を指す。考えてみれば学問、文化、芸術とは、常識や偏見を掘り起こし、打ち破り、真に深いゆえに新しい位相を切り拓く行為であったはずである。したがって、ラディカルな学問

とかラディカルな芸術という呼び方は、一種の同語反復かもしくは本質形容詞なのであり、すべて学問、文化、芸術は本来的にラディカルでなければならぬ。その限りでは、小なりといえども生涯一学徒、一芸術家を目指す私にとって、ラディカルであることは身の証しに他ならない。」(i-ii頁)

「もともとは英国の詩人ジョン・キーツの言葉であるが、気に入って多少とも自分流に改変して用いているネガティブ・ケイバビリティ *negative capability* という概念がある。私はこれをネガティブな事態を引き受けて、その負担を担う能力ないしは覚悟と理解している。」(iv頁)

「・・・『悪魔の詩』の全体を通読すれば、この小説が決してイスラームに対する冒瀆でもなければ、そもそも世間で受けとめられているように、イスラーム的話題を中心とした小説であるかも疑わしいのである。」

「・・・『悪魔の詩』は、知的に書かれた興味深い小説として翻訳に値する。そしてそれは、巷間言われているようにイスラーム批判が中心主題なのではなくて、むしろインド生まれの作者の魂の記録であり、イギリスという異国で経験したエグザイルの文学に他ならない。」

「読者として興味を覚え、かつイスラーム研究者としても、同宗教に対する冒瀆の書ではないと判断したからこそ、翻訳を引き受けたのであって、何も言論出版の自由、表現の自由のためにひと肌脱いだわけではないのである。」(6頁)

「国際化ということが喧伝されて久しい。」

それに対して国際化を意味する英語の *internationalization* とは、日本人

の多くが想像しているように、英語などの外国語が操れて、外国人と広く交際することを意味するのではない、という議論がある。例えば internationalize the Suez Canal と言えば、スエズ運河の国際化、つまりはフランスだけが持っていた利権にイギリスが割り込む際の口実であり、生臭い利害対立の中での分け前の自己主張に他ならないというわけである。

語学として、それはそれで気の利いた注釈である。しかし問題は、それこそ国際間で紛糾した、例えば今回の『悪魔の詩』事件のような場合に、日本がいかなる関わり方をするか、敢えて言えば、欧米と一部のイスラーム圏で暗礁に乗り上げた観のある問題に、日本が文化的に介入して internationalize すべきである、というところまで踏み込むことの必要性である。私が敢えて翻訳を引き受けた背景には、そのように真の意味での国際化を図りたかったという気持ちがある。」(19～20頁)

「内面の畑を耕すことが文化ならば、その涵養を手助けし、裡なる可能性を導き出すのが教育である。教える側も学ぶ側もともに共鳴しつつ、自己の裡に豊かな稔りを結実させていくのが教育効果であり、文化の伝統に他ならない。」(144頁)

「あらゆる個人、家系、集団、政府、国家なるものは滅亡し得る存在であるし、現実にもこれまでも栄枯盛衰の歴史を辿ってきた。それらの浮沈に拘らず、踏み行すべき人間の類の本質の涵養に勉めることが、教育に他ならない。」(145頁)

『中東ハンパが日本を滅ぼすーアラブは要るが、アブラは要らぬ』

(徳間書店 一九九一年)

『悪魔の詩』の十倍疲れた！というのが湾岸危機発生以来このかた、戦争終結後の今に至るまでの筆者の正直な感懐である。」(5頁)

「イランの故ホメイニ師が『悪魔の詩』の作者はもちろん、出版発行者や外国語翻訳者にまで死刑宣告のファトゥワ(法律に等しい命令)を出したために、日本語訳を上梓した筆者は、記念記者会見の席での襲撃事件をはじめ、さまざまな嫌がらせを受けてきた。しかし、終始一貫言い続けてきたように、同小説は知的に書かれた興味深い小説にして、巷間噂されているようなイスラーム批判の書ではない。

それどころかイスラームは同書の主題ですらなく、新しいタイプの放浪者(エグザイル)文学である以上、役者としての筆者のスタンスはむしろ単純明快であった。あらゆる意味で所詮小説は小説なのである。」(5頁)

「・・・最近の日本では、『国際化』と訳され、しばしばその実態が英語で喋れて、とくに欧米人とよく付き合うことと誤解されている internationalization という言葉がある。

しかしその原義とは、第三国が何らかの権益に割り込んでくる口実としての『国際管理下に置く』という意味であった。 internationalize the Suez Canal と言えば、フランスのスエズ運河の権益に、イギリスが分け前を求めて介入してくる口実に過ぎなかつたのである。」(116・117頁)

「・・・井筒俊彦氏こそイスラーム学における筆者の直接の師として親しくさせて頂いているが、氏は御自分の専門を東洋哲学と規定されている。そして好きな言葉が「筆者も何度か直接に承った「まさしく岡倉天心の『騎馬の儒教』」なのであった。「士は士を知る」と言えようか。」
(154・155頁)

「権力の中核にいる人物には、所詮民間の活力、なかでも草の根的な生活の知恵は理解できない。権力をカサに着た、大きなものでカッコウばかりつける人士は、カッコウの悪い言葉に潜む真実に鈍感になる。」
(182頁)

「学者として当然のことなのであるが、あまりにも曲学阿世のキツチュ文化人が増加している昨今、筆者の態度をその表面のみで『過激的(ラディカル)』と解釈する向きも存在する。しかしそれこそ学者の「正名」に即して考えれば、すでに指摘したように、ものごとをその根源(ラテン語でラーディクスでラディカルの語源)にまで沈潜し、引っくり返し考え反省するのがその本分ではなかったか」(193頁)

「・・・およそ法律とか捷の類の多くは国敗れた所産として、あるいは制定した国や文明が亡びても一つの知恵の結晶として沈澱し来たる、さらには後代に復活再生したものなのである。」(194頁)

人物像

青木 香葉

(玉川大学卒業生)

五十嵐先生と初めてお会いしたのは、私が通っていた大学の西洋文化史の授業でした。

授業中に先生は突然、こうおっしゃいました。「今度私が演出するイラン革命を題材にした舞台をやりますが、ペルシアの踊りに出演してくれる方を募集します」。

ペルシアの踊り：当時大学の芸術学部演劇専攻科に通っていた私は、その何ともエキゾチックで神秘的な響きに心惹かれ、すぐに立候補しました。

そしてそのペルシアの踊りの振り付けを担当してくださったのが、私の最初のベリーダンスの先生である海老原美代子先生でした。不思議な魅力を持つイラン音楽の旋律と、見たこともないようなダンスの動きと衣装に私はすっかり夢中になり、海老原先生のステージを観に行きました。

生演奏の熱い音にのせて、太陽神の如くエネルギーに踊る海老原先生の世界に私は雷に打たれたように衝撃を受け、即入門、それが私の一生をかける職業となりました。

あれから三〇年が経ちますが、今でもこの職業に就けたことに感謝していますし、充実した日々を送ることが出来ています。

思えば海老原先生に引き合わせてくださったのは五十嵐先生、決

して大袈裟ではなく、私の人生の方向を決定した方なのです。

五十嵐先生の舞台にはその後も何度か出演させて頂き、ダンスのシーンだけでなく台詞のある役もやらせて頂きました。若かった私はその内容の奥深さが当時はよく解っていませんでしたが、今思えば、自主公演であったとはいえ非常に社会的に意味のある舞台だったので、と考えさせられます。

先生の著書・舞台は残酷な悲しい結末を迎えることになってしまいました。そのような危機にさらされながらも、勇気を持って問題を提議し続けた先生の姿勢に敬服せざるを得ません。

三〇年経った今でもイスラムと世界との問題はまだまだ課題が山積みですが、恐らくは先生のテーマのひとつであっただろうと思われる正しいイスラムへの理解と和解：それが叶う日が訪れることを願いつつ、私もこの職業を通してその想いに少しでも貢献していくことができれば、そしてそれが先生へのご供養になったらと考えています。

私の人生に輝きを与えてくださった五十嵐先生に心からの感謝の想いを込めて。

青島 顕

(毎日新聞社会部)

大学の建物内で起きた、予告された殺人。「悪魔の詩」事件は現在四〇代以上の日本人なら誰でも知っている事件だと言えるだろう。

平成を代表する事件の一つだが、未解決のまま放置されている。

私はこの事件を取材する機会がなかったが、二五年を迎えた二〇一六年夏、教え子の伊藤庄一さんの案内で初めて現場を訪れた。あまりの風化ぶりにショックを受けた。事件現場は当時のまま大学施設として使われているにもかかわらず、まるで事件がなかったかのように日常が続いていた。

学内を歩いても、事件の記憶を残すものは全くと言っていいほど見当たらなかった。大学からすればショックであり、忌まわしい事件なのだろうが、だからといって、ここまで何もなくてよいのだろうか。伊藤さんはほぼ毎年、命日の前後に現場に花を供えに通ってきたそうだが、数年前に大学当局から「今年で最後にしてほしい」と言われたという。

ようやく見つけたのは「筑波大学新聞で読む筑波大学の四〇年」という冊子に残された「開学以来の凶行」という見出しの当時の記事と、天野勝文・元教授が寄せた「冥福を改めて祈るのみである」という一文だった。

大学当局に、事件対応に関する事務文書を情報公開制度を使って請求してみたが、「見当たらない」との答えだった。何か新事実を見つければ報道できるのではないかと思っているのだが、今のところ目ぼしい事実は見つけることができず、忸怩たる思いでいる。

警察関係の取材は担当した記者たちがしてきただろうからと、取材の角度を変えて、外務省に対して情報公開請求をしてみた。「中東二課」が「悪魔の詩」と題した行政文書ファイルを五冊保有していた。閲覧を試みたが、発生直後に現地との公電のやりとりが黒塗りにされていくつかあったものの、大半はマスコミ報道のスクラップ

だった。

別の教え子の男性のお話では、事件の直前、初来日したロックの新星、レニー・クラヴィッツが渋谷で開いたコンサートのチケットを五十嵐さんからもらって出掛けたが、なぜか会場で顔を合わせるこたがなかったという。雑誌「ロッキング・オン」の記事によると、九一年七月五日にNHKホール、九日には渋谷公会堂で公演が開かれていた。事件二日前の夜の渋谷公会堂公演は忌野清志郎がステージに登場してレニーを舞台に招き入れるという変わった趣向で始まり、一時間少して終わった。ところがアンコールが二時間も続き、レニーは時間がたつにつれ調子が上がったという。

その場に五十嵐さんはいたのだろうか。今となっては分からない。

故 安東伸介 慶応義塾大学名誉教授 御一家

安東博子（夫人）、小尾陽子（長女）、中村典子（次女）、林田

信子（三女）、富嶋桃子（四女）

「五十嵐一さんの思い出」

五十嵐一さんは、主人（安東伸介）が東京大学に非常勤で出講し英語を教えていた際に目に留まった極めて優秀な学生でした。東大での授業が縁となり、その後、毎年正月には、奥様の雅子さんを伴い、そして長女の真奈さん、長男の中（あたる）君が誕生した後はご一家で訪ねてくることになり、文字通り家族ぐるみのお付き合いとな

りました。

正月の集まりは、慶応の大学院の教え子たちや教員中心で、個性的なメンバーの中でも五十嵐さんは皆の個性に押されることなく、独特の個性を發揮していました。主人は五十嵐さんの能力を非常に高く評価していただけでなく、お互いに変気の合うところがありませんでしたし、まるで実の息子であるかのように可愛がっていました。居ごちがよかったのか、毎年必ずみえて、雅子さんが書齋で他のお客さんと話を弾ませている間、一さんの方は主人と話をしていたり、書齋で来客が話し込んでいる間に、別室で家族の一員のように子供たちと一緒にテレビをみたり、公園と一緒に散歩に行ったりしたこともありました。

『悪魔の詩』の翻訳を出版した際、五十嵐さんに、主人が「大丈夫なのか」と尋ねていましたが、あの本については大丈夫と言っていました。また、あの翻訳自体は大したものではなく、今から次なる大きな研究の集大成に取りかかる手前にあるとも、主人と話していました。

五十嵐さんを慶応義塾大学言語文化研究所のスタッフとして招聘する話がほぼ決まっていたにもかかわらず、土壇場でその話が潰れてしまい、実現しなかったことがありましたが、主人は返す返すも残念だと非常に悔やんでおりました。

陽子、典子、信子は、中学生の頃、南千束の五十嵐宅に勉強を教わりに通っていました。聞いたことは何でも即座に教えてくれる一方、いつもすぐに話題が色々な方向に広がり、飛んでいくという感じでした。例えば、サザンオールスターズの桑田佳祐の歌とある民族音

楽が似ているとかで、その点を学問的に研究している等々。ちなみに音楽と研究を結びつける点は、父親と似ていたと思います。

約束の時間に五十嵐宅にいつでも不在の時があったり、出された宿題をやってもいっても、それ以外のテーマに話が飛んでいつてしまったりすることもよくありました。でも話題が豊富で、日常的に起きている目の前のことから入りながらも、それぞれの事柄について奥深い説明をしてくれたのを覚えています。ある日、信子が中学校の運動会の後で寝てしまった時があるのですが、「なぜ人には運動会が必要か」という説明をしてくれたことがありました。一見バラバラなことを話しているようでも、日常の勉強のことから、世界の一つ一つが博識な先生の話の中で繋がっていくような感覚でした。父親からは、分からないことがあれば辞書を引きなさいとよく言われたものですが、五十嵐先生の手にかかると、辞書を一緒に引いてみせてくれたかと思いきや、そこから世界がどんどん広がっていきましました。御自分の経験談が中心であったのを覚えています。先生の家では、階段の半分や食卓が書籍で埋まっていたことや、先生が洗濯物を畳んだり、洗い物をしていたりといった情景も思い出します。

家族ぐるみの付き合いで、日常の中に五十嵐先生がいたわけですが、子供心にすごいと思っていました。父親は他人に対して嫉妬しない人で、本当に出来る人間を評価する人でした。五十嵐先生に関しては別格で、どれだけすごいのかということ色々と話していたのを覚えています。父親がそこまで本当にすごいと評価する人はそういませんでした。父親は五十嵐先生がいつも自由闊達に話す姿を、本当の息子を思いやるかのように微笑ましく見ていましたし、娘たちが何を教わったのか話を聞くのをいつも楽しみにしていました

た。五十嵐先生も私たちの父を本当の父親のように慕っていました。確かに、五十嵐先生はかなりの毒舌家でしたが、他人を批判する時でも根拠が明快で、不思議と嫌な感じがしなかったことも覚えています。

伊井 忠義

(テレビ朝日政治部)

「二七年経った今でも息づく、五十嵐助教授の『警鐘』」

イラク国境を越えてから一時間あまり。乗っていた車が突然、反対車線に移動した。幹線道路の片側が大きく陥没していたからだ。初めて目の当たりにした戦争の爪痕だ。さらに車を進めると、立体交差の道路も破壊されていた。

「イラクにおける主要な戦闘作戦は終了した。太平洋上に浮かぶ米空母エイブラハム・リンカーンの艦上で、ブッシュ大統領が『終戦宣言』をしてから一〇日後の二〇〇三年五月一日。当時の茂木外務副大臣の同行取材でイラク入りした。

ヨルダンの首都アンマンから陸路でおよそ一〇時間。ようやくバグダッド市内に入ると、空爆で倒壊した建物が次々に現れ、戦争の爪痕の色はさらに濃くなる。ただ、照りつける太陽のもとで酒やたばこを売る露天商たちの表情を見ると、いわゆる『終戦』を迎えたことに加え、フセイン政権による圧政から解放されたことへの安堵

感も垣間見えた。

こうした解放感は、バグダッド市内の北東側で顕著だった。旧サダムシテイのサウラ地区はイスラム教シーア派が居住する貧困地区で、スンニ派中心のフセイン政権に虐げられてきた地域だ。

舗装されていない道路には、下水の逆流による水たまりがたくさんできていて、訪れた小学校の門の前も水浸し。悪臭も漂っていた。

ところが、この小学校に通う子供たちの目は、こうした劣悪な環境を跳ね返すかのようにキラキラと輝いていた。

当時、イラクの戦後復興を手掛けていたのは、米・英など有志国によるORHAⅡ復興人道支援局だ。ORHAには日本政府から在英日本大使館の奥克彦参事官(のちに大使)とアラビア語専門の井ノ上書記官が出向していた。

その時の奥参事官の言葉は、一五年経った今でも鮮明に覚えていゑる。バグダッドに到着してすぐに、在イラク日本大使館でブリーフィングを受けたときのことだ。

「このバグダッドに来て一番見てほしいのは、子供たちの目だ! みんな生き生きとしているし、好奇心いっぱい目をしている。あの目を見ていると、このイラクという国の将来はきつとうまくいくと信じていることができるし、彼らの未来をしっかりとサポートしていきたい」と力を込めていた奥参事官の姿は印象深い。

ところが、バグダッドが比較的安全だったのは、この年の五月から二〜三か月間で、その後は長期にわたってイラク情勢が泥沼化していったのは周知の通りだ。八月中旬には国連の現地本部を狙った爆弾テロが発生。ブラジル出身のデ・メロ特別代表が殉死した。茂木副大臣とともに訪れた施設だっただけに、このニュースを聞いた

ときはショックだった。

そして、その三か月後。さらにショックなニュースが届いた。奥参事官と井ノ上書記官ら復興支援にあたっていた日本政府のチーム三人が武装勢力の襲撃を受け、全員が殉職するというテロ事件が発生したのだ。

事件が発生したのは、二〇〇三年一月下旬のことだ。復興会議に出席するために、奥参事官ら三人を乗せた車はバグダッドからテイクリートに向かっていた。その途中の幹線道路で、突然、並走してきた車から自動小銃が乱射されたという。当時のイラク暫定内閣のジバリ外相は、旧フセイン政権下の情報機関の犯行と断定した。

イラク戦争が始まる前に取材した当時の外務省幹部の言葉は、いまだに印象に残っている。

「イラクというのは、数十ある民族の集合体。その数十ある『ビーム』を、ひとつの袋にひとまとめにして、サダムフセインという『ヒモ』で縛っていたのがイラクという国だ。その袋を縛っていた『ヒモ』の下を、ブッシュ大統領がはさみでバサツと切ろうとしている。それが、ブッシュ大統領のやろうとしているイラク戦争だ。バサツと切ったあとはいろんなところにビームが転がって、にっちもさっちもいなくなるのではないか。パンドラの箱を開けるようなものだ」。

ブッシュ大統領が『パンドラの箱』を開けた結果、奥参事官や井ノ上書記官もさることながら、イラクの多くの無辜の民もテロ事件の犠牲になった。

件の外務省幹部は、こんなことも言っていた。「ブッシュ大統領は『イラクの戦後復興と民主化は、太平洋戦争に敗戦した日本がお手

本になる』と言っているが、そう簡単ではないと思う。確かにイラク人全体としてはまじめで優秀であることは間違いないが、各民族でさまざまな事情や思惑があるから、日本と同じレベルでは語れない」。

アメリカのイラク復興政策の失敗を予言した外務省幹部の言葉は、実は、湾岸戦争について語った五十嵐助教授の言葉と重なる。

その言葉は「一九九一年を語る」と題されたVTRの中で、インタビューを受ける形で語られていた。いわゆる『悪魔の詩』殺人事件が起きる数か月前の収録とみられ、場所は筑波大学の五十嵐助教授の研究室だ。

当時のフセイン政権がクウェートに侵攻した背景について、五十嵐助教授はこんな解説をしている。

「中東というのは、意外に面積は広いんですけど、人口は非常に少ない。現在問題となっているアラビア半島全域、そしてイランを加えしても人口はたかだか一億二千万ちよつとですね。日本とほぼ同じ人口が、日本のほぼ二〇数倍の地域に住んでいるわけだ。従いまして、この地域の紛争というのは基本的に派閥争い、メンツの立てあい、利権争いといった様相が非常に強いのでありまして、これにいわゆる宗教とか民族紛争とか絡むのです」。

そのうえで、「中東地域の紛争は基本的にひとつの大きな国の中での派閥争いのようなものであって、あまり他所からちよつかいを出さないほうがよろしい」と、湾岸戦争後のブッシュ(父)政権はじめ各国の対応に警鐘を鳴らしていた。

このVTRは五十嵐助教授が殺害された事件が発生した当時、社会部記者としてこの事件を取材する中で雅子夫人から借り受けてダ

ビングしたもので、テレビ朝日でアーカイブされていた。二七年ぶりに改めてこのVTRを観たときに、「中東」に絡む取材の要諦はここにあったことに気がついた。

『悪魔の詩』殺人事件に遭遇したのは、筑波大学を卒業後、テレビ朝日に入社して二年目、警察担当の社会部記者のときだった。

時が過ぎて、アメリカの同時多発テロ事件、その後のブッシュ（子）政権が仕掛けたアフガン、イラク戦争は、政治部記者として小泉政権を取材していたときだった。

ワシントン支局長のときは、イラクの民主化を目指し「パンドラの箱」を開けたことで泥沼化に苦しんでいたブッシュ（子）政権、そして、イラクからの米軍撤退を主導したオバマ政権を取材した。

その後、力の空白が生まれたイラクやその隣のシリアには「イスラム国」が跋扈した。そのあたりで、日本人ジャーナリストらが犠牲になる事件も相次ぎ、中東政策に苦慮する日本政府も取材した。

奥参事官と井ノ上書記官の非業の死も含め、「中東」に絡む悲劇の通底には、二七年前に五十嵐助教授が当時のブッシュ（父）政権に対して強調していた「あまり他所からちよっかいを出さないほうがよろしい」という「警鐘」が生かされていなかったことがあるように思う。

その結果、湾岸戦争のときは、ある意味「ちよっかい」で済んだのかもしれないが、民主化を目指したイラク戦争のときは、「ちよっかい」だけでは済まなくなってしまったのは間違いない。

これまでの記者人生を振り返ってみると、学生時代に五十嵐助教授の存在を知り、少しでも薫陶を受けていれば、「中東」を巡る取材の幅やアプローチの仕方、そして考え方や見立てなどに大きな違い

が出たのではないか。二七年経った今でも息づいている五十嵐助教授の「警鐘」を改めて聞くにつけ、そんな気持ちで胸がいっぱいになる。

池 一

（新潟高校の同窓生）

「五十嵐一のこと」

五十嵐君とは、そんなにつきあいが無い。しかし、気になる「存在」だった。私の母も、（今思えば）言うところの「教育ママ」で（それに新潟は小さな町である）、いろいろな人の情報は詳しく、彼の「うわさ」はいつも聞いていた。

それはともかく、東京大学を出て、筑波大学の教員になっていることだけは知っていた。

あるとき、仕事で出かける途中、中央線の御茶ノ水駅スタンドの『夕刊フジ』か『日刊ゲンダイ』の見出しに「筑波大学助教授殺さる」とかなんとか、朱書きで出ていた。まさかと思っただが、「胸騒ぎ」がして買ってみると、彼のことだった。ショックであった。

その後、職場に警察から電話がかかってきて、情報の提供などを要請されたりしたが、私には何もなかった。

彼と直接話したのは、同期で毎日新聞運動部記者だった大野晃氏の結婚式の二次会で、新宿西口公園付近のバーのことだけであ

る。その時、名刺をもらった。たしかイラン王室アカデミーのものであった。筑波大学の教員のものではなかった。それだけペルシアに対する思いは深かったのだろう。

しかし、(その後テレビで見た) ドラムをたたいている姿、は想像外だった。

私も高校時代は、勉強などそっちのけでジャズクラブにはまっていたが、もうすぐ君の傍に行ったら一緒にセッションをやりましようか。

石川 克彦

「五十嵐一氏が高校生活で私に残した思い出、殉職後四分の一世紀を経て生きる遺訓」

『市井の聖、即俗に有り』

新潟高校の二年間

小原雅之氏との共鳴関係

英語研究会の立ち上げ

大学進学後三年目の夏、帰省した新潟古町で一氏との出会い

大学卒業後、米国留学時に新潟日報の『私のイラン体験』連載コラム

ム

アンカラ訪問時の一氏の私に対する加嶋屋土産

新潟高校の二年間

女子の比率一〇%、一学年が一〇クラス、各組五〇人の団塊世代が通う、旧制中学時の名物教師も残る新潟高校に入学した昭和三八年四月、そこで僕は五十嵐一氏を知る。一年生の頃は別々のクラスだったのだが、お坊ちやま連が行く新潟大学付属小・中学校から来た天才が同学年に居るといふ噂は即、耳に入った。父を五歳で亡くし継父と母の共稼ぎ家庭で育ち、中三秋の県大会決勝で初黒星を喫した以外、卓球では常勝を報告し続け両親を嬉しがらせていた私には、天才と噂される人に出くわしたのは人生でその時初めてだったが、文武両道を善しとする自分には彼は特別、興味を持つ存在でもなかった。

二年になり彼と同級になったがそのクラス、担任は東京理科大出身の学年主任の奈良先生。学年全一〇クラスで唯一、女子生徒無しで男子だけからなるクラスだった。一氏の学業での持続的断トツぶりはその頃までには新潟大付属小・中出身者でなくとも誰もが仰天するところとなっていた。校内で一番だというだけでなく能研という全国能力検定試験——今世代では数学・物理オリンピックといった各科目ごとの全日本代表競技会に移り変わっているのではないかと——それに旺文社の大学入試模試で全教科押し並べて五十嵐が全国一位を獲得していたからだ。成績抜群以外に私が彼に惹きつけられて行ったのは席が隣りになった時からで、次第に僕が付いて行けなくなり始めた物理や数Ⅱで色々と囁きの茶々を入れ、これは難しくて分からなくともあれは絶対覚えるべきとか、此処が分からないなら教科書の前々ページの一章をもう一回読んでから戻ってきて読み

進めば分かるようになる、だとかお節介を焼いて来る。学年後半、すっかり付いて行けなくなつてからも解らせようと囁くので、余りの気まり悪さに、「俺は文系行くから授業で俺の事、もう構うなよ」とまで言った事もあつたと思う。

数学ではこうしてドロップアウトに追い込まれ、他科目で起死回生を計つた僕は、現代文で亀井勝一郎の評論を読む授業で国語担当岩野先生に、この単元を私に授業させて下さいと頼んだところ試しにやってみなさい、と許された。批評文の読み方、文節構成、指示詞が何を指しているか等、岩野先生の講義進行をそのまま真似て、教壇から生徒に本文を読むよう指示し、前夜までに準備した質問を生徒に掛け、正解を引き出す迄次々に生徒を指名した。当然、一氏にも当てたと思う。この俄か教師まがいに対し、クラス全体が真剣に応じた。初日はどよめきの中、何とか無知厚顔を通し、岩野先生が次もやつて貰うかと教室で訊き、やれつ！やれつ！という野次の中、翌日もう一度同じようにやつたと記憶している。席に戻つた私に一氏は、「良かったね」と言つてくれた。男子だけのクラスだったからこそできた事ではなかったか？

授業音楽の鑑賞でも、変調の機微を捉えろとか、指揮者によるオーケストラ演奏の斯くなる迄の相違に気付かされたのも一氏のせいである。僕が卓球で県内では常勝無敵の部員を率いたり、青陵という我が新潟高校が旧制中学以来応援歌でも使用して来た愛称名を、新設された近隣の女子高が使用するのに反対しようとか校長に直談判に行く等、ある程度の級友達の信頼を勝ち得ていたからであろうか、一氏自身も天才と呼ばれる事を毛嫌い、十六歳としての自分の素顔を私にも訴えたがったのだと思う。授業体育では実技の逆立ちを拒

んだ一氏だが、「自分は五〇メートル短距離走では負けた事が無い」と俊足の才もある事を主張した。女子生徒の中にも公認の五十嵐ファンが生まれていたが、連れションから出て脇の女子トイレの通りすがりで、「モミの木、もみの金たま！」と聞えよがしに叫んだりもするひょうきんさも心得ていた一氏だった。今日日の在京女子学生ならセクハラ呼びわりするやも知れぬ。

遠足に出たバス車中で氏の、古典落語一つ二つを聴かされた事もある。どうやって五分超の記憶力を持てるのか？ 後日、我が息子の百数十のポケモン名連呼や弦孤連打のバイオリン演奏に驚かされつつ、一氏が白紙の脳裏に臓器鼓動と共に銘刻・吐露しては忘却する中間記憶回路を別に持っていたのだろうかと当時を回顧した。

小原雅之氏との共鳴関係

このクラスには我が親友で後日、第四銀行頭取を務める小原雅之君が居た。彼氏もひょうきんさが男子社会を生き抜く道であることと心得ていた少年剣道士であった。僕はビートルズへの開眼は彼から教わつた。綺麗な字で世界史のサブノートを自分で作っていたのでそれを貸して貰つて書き写したのがキツカケで親しくなつた。彼も直ぐ一氏ファンになるが、国家公務員の一職種という両人の出自の一致性からか、一氏に対して無意識のうちに「彼に有つて自分無しものは何？」を探る「天才偶像破壊者」役を背負う事になつたように思える。

小原氏の部屋でビートルズの楽曲に合せて踊るBeatを学んだ。ベタ足で腰腕を左右に振るだけしか能がなかった僕だったのが、くの字に曲げた片脚を空に軽く浮かせて捻るだけで洒脱な動きになると

掴んだ挙句、このコツさえ覚えてクラス全員腰を振り、来日中のピートルズ旋風に乗乗すべきと小原氏と盛り上がり、高校近くの会館を借りてコンパを開き、そこへプレーヤーとDJ盤を持ち込み、羞恥心を消す為に照明を暗くして、畳の上の男子対面 *Twist* 大会をやった。一氏が後日、筑波大でバックコーラスを待たせマイクを掴む姿をビデオ鑑賞した時は、昔日のツイスト・コンパが脳裏に蘇った。

また、小原氏の発案で僕ともう一人の級友も居たか？ ともかく土曜の午後、旭町の高台に在るといふ一氏の自宅を捜して押し掛け、一体奴はどんな日常を送るのか発見しに出掛けた。氏の愛聴番組の藤田まこと・藤純子・白木みのる主演のNHK「てなもんや三度笠」を観終わった氏は、近くの通りで近所の子供相手にサッカーをしているというのでお母様と一緒にそこまで行き、帰途ジュースを御馳走になって来た思い出がある。突然見回った吾々にお母様は小柄な体軀を丸めて、「二は教室では生意気でしょ？」と何度も吾々に尋ねられ、学校での子息の受容度を心配されてるのだと感じた。

英語研究会の立ち上げ

高三夏には英語研究会を立ち上げ、ご自分で青焼き膳写して配布する英文小説やリア王の二〜三ページ分を、土曜の午後遅い時間まで、読解・解説して貰った記憶がある。文中 *back seat driver* なる言い回しが出てきて僕が私塾で習った蘊蓄を披歴し「先生がそうかと唸った事もあった。後年、「摩擦に立つ文明」を上梓する一氏だが、英語研究会の講義では *Toynbee* の俯瞰世界史や *Bertrand Russell* 卿の批判哲学に言及するのが氏の真骨頂で、私も東京の大学に進むとそこで待つ、読んで解るとは別格の異次元世界を予感したものだ。

英文読解に励みつつも、しかし外国文著者の考えを心底分かち合えるのは無理だと念を押していた。解る、解って貰える、なんて筈がない。西洋人が百パーセント解ったとか言うのはそれは嘘だ、とさえ。民族が味わう経験は体験したものでない限り、解りつこないのだから、字面で読んで感じる了解と共に、違和感も感じなければおかしいし、それを大事に温めよと、言われた気がする。一方、西洋文学の問うてる事は姦淫の罪意識。吾々が今理詰めで考え抜いて埒があくものでない。でも今後様々なラテン文字言語に晒されて行くだろうが、西洋諸言語は全部、英語をしつかり勉強した後は、日本語にも方言有りだと思いきせば良い。スーズー弁だったり関西弁なのを、フランス語と言ったりイタリヤ語と言ってるだけだから、とも。

大学進学後三年目の夏、帰省した新潟古町で一氏との出会い

東京外語大英米科に進んだ私を待ち受けていたのは劣等感に苛まれる日々であった。会話や演劇の授業では、級友の大半がスララ自分の思考言語として曲がりなりにも英語表現ができるし、半数近くの長期海外生活経験者と思いき者達に至っては、ネイティブの論客にもたじろがずにたてしまくるその姿を前にして萎縮し続け落第した。二年目もさして変わらぬコンプレックスまみれの教室通いだっただけがする。英語劇では小道具に回ったりしながらも必死に生き残る術を模索する中で、一氏はその年も外語祭の英語劇観賞に来ていた。高校では彼主宰の英語クラブで薫陶を受けた身でありながら劣等生で舞台でも演じない私に、一氏は上演されたシエクスピア劇について何か訊いて来たのだが、僕は益々萎縮してもうこんな世

界には自分の身の置き場はないとまで思ってた。悩んでいた。

その夏新潟に帰省した時、古町の本屋萬松堂から出て来た私に一氏が声掛けして来て、二人で近傍の喫茶店白十字に入って小一時間話をした。私は学業の苦しさからの一時の慰みを後輩の女学生と懇ろになる事に見出していた一方、学園紛争が激しくなる中、学業のみならず卓球部のキャプテンとしても処世の術も身に付ける事無く、宗教の路に突き走らんとしていた。その時私は彼に訴えたことで覚えていた事①…数字のゼロ乗 0^0 、となることを持出して、天才一氏の前に当時の自分を精一杯背伸びした。彼の返事は、それは単なる数学の決めごとであり大それた物でない事、そこに哲学的・倫理的な意味を探ろうとするのは邪道、神秘主義に陥る危険あり、ということだった。②…また学園紛争に触れ、吾々地方出身の田舎者には到底、中学時代から日々デモに遭遇したりして育って来た東京人学生とは一緒に行動に駆り立てられなくても仕方ない。一氏はその夏、確か友人と東北の旅に出ると言っていた。

大学卒業後、米国留学時に新潟日報の『私のイラン体験』連載コラム

英語劣等生の身上持ちのまま、学園紛争に対する揺れ戻しで押し出されるようにして五年で卒業した私も世間に出ると、言語の達人東外大卒業生と見られた。教員免許を取得していた事、第二外国語仏語で“良”で四単位、五年目でフランス科学生の中に入り修めた“可”で二〇単位ほど功があったか、雑誌や年鑑の翻訳をやらせて貰ったりしているうちに、英米科の三年先輩で AFS 米国高校留学経験者、当時花形同時通訳者であった種田輝豊氏が主宰する The

English Journal でアシスタントの仕事を得た。自分の才能を切り売りして実社会で生き抜いたその後の五年間で、種田氏の耳から入る語学習得法を身に付け、TOEFL 当時の最高点六一二点でフルブライト奨学生となり初めての渡米を果たした。アイオワ大で政治学修士号を取得後、シアトルのワシントン大学に進んだが、博士課程全単位修得後、論文プロポーザルで『新興国モザンビークの対日伊勢エビ輸出に見る旧社会主義国の政治発展』を提出、審査面接に臨んだがテーマ不適切と見做され、そこで奨学生としての命運は尽きた。

アイオワに居た頃、一九七七年年初頃からだったと思うが読売新聞がニューヨークで印刷・発刊されるようになり私は、その夏アイオワを離れる迄の半年間、購読した。今のようなネットで何処の情報も手に入る時代に突入する直前の端境期だったと今は回顧できるが、Eira Vogel 氏が『Japan as No. 1』を著していた時代、外目で自国をどう見るべきか、今後の自分のキャリアに付いても羅針盤を得る為に購読を続けた。五十嵐氏が『私のイラン体験』という連載コラムを地元新潟日報に投稿開始し、私の弟が紙面切抜きを送ってくれていたのも確かその時期だった。私が修士号取得のための必須科目としてモザンビークについて書いた小論文を首都マプトのマシエル大統領に送り滞在ビザ発給をお願いし出したのもそれに重なる七八年末〜七九年春の季節。建国二百年の米国をこの目で見てやろうと七六年七月にやって来た米国だったが、政治発展論の著作を読み進むうちにアフリカ・中東諸国一國の近代化に収斂させて政治発展の本質とはこれを云う、と言えるケース・スタディーを、旧宗主国ポルトガルから独立するやカストロ政権による養殖技術 ODA を受け、モノカルチャア産品として日本に輸出し唯一の外貨獲得源

としている事実を、博士論文に仕上げる形で次の目標が見え始めていた。シアトルに移って後、七九年末あたりからはW大キャンパスで遭遇したパールビ打倒の火炎瓶・イラン王国旗炎上騒擾や、教室でアジア・アフリカ新興国学生の英語プレゼン能力に圧倒され、試験でもどうにかK点超えを重ねた挙句、どこか委縮せずに考えを廻らせ得る方法として一旦帰日して、変革目まぐるしいイスラム国家に身を置くことで出直そう、という気になった。一氏のシリーズ『イラン体験』談は、昭和四三年夏に古町白十字店で互いの近況を語り合った以降は、一氏が大学院では美学を専攻し、毎夏郷里新潟で同窓の藤田一巳君が始めた進学塾信濃学園で講師をしているとしか聞き及んでいなかった私にとつて、高校生時代に『Toynbee』の英文抄を読んでは得意の手話さながらのジェスチャーを交えて語った、「世界を俯瞰する・歴史を生きる」、とはこうした事だったのかと驚愕・驚嘆した。一旦帰国後、短期間パンアラブ通信社に勤務したのち、ナイロビで投獄中の作家ングギを慰問するAA作家会議が主催する学習グループに加わりケニア・ウガンダ・タンザニア歴訪の後、陸路でのモザンビーク入国を試みたが、失敗に終わった私は、ホメイニ革命の自国への拡散を恐れて一九八〇年九月一二日軍事クーデターに打って出たトルコ共和国に一〇月一日に初入国し、その後七年間続く、アンカラ大学政治・行政学部での新たな大学院生活を始めた。一氏の日報紙上の連載記事に出くわしてなかったら、アフリカに向けて旅立ちモザンビーク入国が果たせなければその脚でトルコへ向かい言語習得の後トルコ現地で博論を書くという計画は生まれ ていなかっただろうと思う。

アンカラ訪問時の一氏の私に対する加嶋屋土産

日航機ジャンボ機事故の起きた一九八五年八月、私はキプロス島からシリア・ヨルダン・レバノンを経てアンカラに戻って来た時、一氏はイラン再訪の道すがらトルコに来たと書状で記し、三井物産アンカラ支店長赤松氏にご自分の演説稿と共に私への手土産を託して既にトルコを離れていた。一氏にとつて高校時代の級友の私アンカラで院生生活を送っている事に驚かれた一方で、私に心付けとして二人の郷里新潟の加嶋屋の佃煮珍味を御笑納くださいとのメモ書きと共にお受けした事は、私にとつても連載記事で中東行きを決断させた一氏が、私を心に掛けてくれた事を嬉しく思うだけでなく、学問も人知の義を尽くして行かう一氏の、知識人としての成熟ぶりに仰天させられた。

興味の赴くままに語学であつたり政治学であつたり、好きな生き方をとことん追い詰めて壁に突き当たっては、さあどう隘路を打開するかと知覚を研ぎ澄ます時その都度、彼との高校時代の出会いを思い起して来た。それは生まれたばかりのまつさらの自分に立ち返り残りの半生をどう生きるかと自問する事でもあつた。一氏のような才能に恵まれた訳でもなく立礼奮起もなかった私だが、キャリアで迷った時、彼との交際でその時は気づかなかった、しかし今自分が窮地に追いやられると、ああ、あの時の彼の姿は僕にこれを伝えようとしていたのだという様々なシーンが浮かび上がってくる。

自由主義者として七〇の齢を迎える今でも、思うがままに探求心を満たそうとする私である。行き詰まるとは一氏が路を示してくれた。彼との更に深い因縁を結んだこの偲ぶ会皆さん方のエピソードを今後も耳にし、まだまだ彼との交際で見落としていた珠玉の遺

訓に気づかされる事を願って毎年七月の「五十嵐一氏を偲ぶ会」に足を運んでいる。

伊藤 庄一

(日本エネルギー経済研究所研究主幹／

筑波大学卒業生)

「ラディカルな五十嵐一先生との出会い」

私は一九八八年四月に筑波大学国際関係学類に入学したが、後にも先にもその直後の一学期間だけ同学類対象の英語の授業の担当が五十嵐一先生(比較文化学類)であった。初めて先生の授業に出た際の衝撃は、今も鮮明に記憶している。大学生生活を開始したばかりの一八歳の学生に最初の授業で配布されたプリントは、チャーサー(Geoffrey Chaucer)の『カンタベリー物語』書き出し部分の原典からの抜粋であった。

『When that Aprille with his shoures soke

The droghte of Marche hath perced to the rote,...

私も同級生も目を丸くして、半ば「言葉を失ったまま」、先生を見上げた。普通の英語の授業であったはずが、一瞬、何が起きているのか理解できなかつた。哑然としている学生に対し、先生が言った。「二〇回の授業のうち、順番の当てられた一回だけ出席し、担当部分(一頁だったか、一段落であったか忘れたが)を現代英語に

した上で翻訳し、期末テストでは同部分の感想を日本語以外の言語で書いてくれれば単位を出します。因みに、英語でなくても何語でもいいですよ」と。私の所属した国際関係学類は、大学の中でも比較的英語の出来る学生が多い方であったが、さすがに高校を出たばかりで中世英語の知識まで備えた学生がいるはずもなかつた。

大きな衝撃はそれだけに止まらなかつた。先生がぐるりと背中を学生の方に向け板書し始めた。くねくねした文字を綴ったかと思えば、英語以外の言語も書かれた。これがアラビア語で、こつちがペルシア語で・・・と言われても、何が何だか皆目見当もつかない。さらに、「英語とフランスとドイツ語なんて、標準語と茨城弁と栃木弁くらいの違いしかないし、面倒くさいから、まとめて一緒に覚えなさい」と言う。私を含む学生にしてみれば、まさか英語の授業でこんな知的体験をするとは思っていない。ちなみに後日、先生に何か国語マスターされたのか尋ねてみたところ、辞書を使えば読める言語も含めれば三五カ国語と言っていたと記憶している。

後にふり返ってみるに、五十嵐先生はもちろん学生の反応は初めから織り込み済みで、知的世界の広がりとは、大学という学問をする空間の意義とは、と若き学生の問題意識を育むために、敢えて最初から「カルチュア・ショック」を与えてくれたのである。

宿題(つまり授業発表の担当部分の翻訳)をこなすために、大学の図書館、しかも書庫という通常入学したての図書館の使い方も未知の学生にとりおよそ縁のない空間に足を運び、中世英語テキスト上で当てられた該当箇所と合致する現代英語部分を見つけ、授業に臨んだ。「よく現代英語にできましたね」と先生が褒めて下さったので、図書館の地下書庫で、苦勞して対訳の掲載された本を見つけ

て写しただけである旨、正直に伝えたところ、先生は嬉しそうな顔を
をして、テキストを忠実に写すのも、一つの立派な学問的作業であ
るような趣旨の言葉を頂いたように記憶している。授業の単位取得
条件としては、その担当回さえ授業に出席すれば、あとは学期末の
テスト時間内にその部分の感想を書くだけで済んだのだが、履修科
目上は「単なる」英語の授業のはずが、古今東西の叢知がひらひら
と舞うような空間に吸い込まれた私は、すっかり「ザ・イガラシ・
ワールド」の虜になってしまい、気が付くと一〇回全ての授業に出
席していた。

その英語の授業では、毎回授業中に奇問・難問が先生から出され
た。見事正解が答えられた場合、先生から夕食にご招待とのことだ
った。私も出来る限り、挙手し、当てるやろうと頑張ってみたもの
の、一度も当たらなかったのだが、無欠席であった御褒美として、
学期の最後の授業終了後、他の学生と共に筑波の西武デパート（二
〇一七年に閉店）の六階にあったドイツ料理レストラン「エルベ」
に招待して頂いた。その店には別の機会にも、複数の学生たちと共
に先生に連れて行ってもらったが、名物のアイスバインを含め、高
価なワイン等、かなり御馳走して頂いた。中華料理に招待された時
でも同じであったが、いつも先生自らが学生たちに食事を取り分
け、美酒をふるまい、最後にあまった分だけ召し上がられていた光
景を思い出す。

翌年度以降、五十嵐先生の授業は、他学類開講のものであった
とは言え、可能な限り受講した。本追悼集にも、筑波大学での開講
科目（各年履修便覧からの抜粋）内容や授業で使用したテキストの
例を掲載しているが、文学、哲学、音楽、歴史、宗教論等を含め、

実に余人の追随を許さない学際性のみならず、多種多様な言語が縦
横無尽に使われる授業であった。他の「一般的な科目」とは異な
り、予習も復習もしようもない（！）ほど高度なレベルの授業、と
感じていた学生は私だけではないだろう。しかし、どんな内容（私
など、初めて耳にすることばかり！）であっても、日常の出来事や
同時代の国内外情勢に結びつけて、初学者にとつても実に分かり易
い説明であった。また、五十嵐先生は学問という世界それ自体にも
の凄く謙虚な方であったのみならず、普段の毒舌家ぶりからは一見
想像し難い人もいたかもしれないが、実際には、一対一の人間同士
として教え子に対しても非常に謙虚に接して下さった。

授業では、先生特有の駄洒落、まさにプロ級の有名人の声帯模写
を含め、ユーモア溢れる授業で、笑いが絶えることはなかった。そ
れでも、授業を通じて、学問とは何か、学者の本分とは何か、そし
て学生の本分とは何か、という先生からのメッセージがひしひしと
伝わってくる授業であった。いみじくも、先生がお亡くなりになら
れた一九九一年に開講された、「文化哲学」の授業概要には、「学問
に殉ずる覚悟のある者のみ受講可」と記されている。無論、受講生
の殆どが学者になるとは想定されていないのは当然だが、大学とい
う教育の場を通じて、学問の素晴らしさを実感させたい、それこそ
が大学で教鞭を執るものの使命、との先生なりの覚悟が込められて
いたのだと思う。

私自身、実は高校時代から国際政治の学者になりたいと決めてい
た。しかしながら、五十嵐先生との出会いがなければ、「学問」と
いう世界の素晴らしさ・奥深さに対する見方は大きく異なっていた
に違いない。「真理」を追究する為には、如何なる条件下に置かれ

ようとも全身全霊を投入し、我信ずる所あくまでも貫徹し、その全
てにおいて自ら責任をとること——それが私なりに理解している、
先生から御教示頂いた学問のあり方である（無論、教えて頂いたと
おりに実践できるか否かは別問題！）。先生が著作物の中で好んで
使われた言葉の一つに「生涯一学徒」というフレーズがある。今に
して思えば、先生は純粹にその言葉通りに生き抜き、頑なまでにそ
の言葉に忠実なまま最期を遂げられたといっても過言でなからう。

サルマン・ルシュディ著『悪魔の詩』の翻訳者として世間の注目
を浴びる文字通り直前の一九九〇年二月、先生自らの脚本・演出に
よる二つ目の演劇「聖喜劇エマーム」が東京赤坂の「シアター・赤
坂」と筑波のノバホールで上演された。同演劇を制作するにあた
り、先生は筑波大学内外の先生の教え子その他のメンバーを集め、
「グループTz」と名付けられた。私は「グループTz」の誕生
直後から関わっていたわけではなかったものの、ある日何か手伝え
ることがあればと志願し、当日のビデオ撮影や大道具係を与えても
らった。

公演の最終日、舞台終了後出演者たちが着替えをしている間、先
生がご自分の控室に私を呼び入れて下さった時のことである。先生
は一つの大きな仕事を終え、白のタートルネック姿でリラククスさ
れていた。先生との話の流れの中で、私が初めて先生に自分が学者
になりたいとの意志を伝えた際、先生がポツリと言われた一言は
「恐いよ」であった。「学者として覚悟を決めて、真理を追究する
のであれば、その結果がどうなるか、ということまで心配するあま
り真理追究という学者の自分が揺らいではならない」という意味
の、非常に深淵なメッセージであったと理解している。改めて時系

列的に整理してみると、『悪魔の詩』の翻訳書が出版される、わず
か数日前の出来事であった。

前述の「文化哲学」講義の中で、ある日、すでに『悪魔の詩』の
翻訳者として世間の、学生の注目を集めていた先生が、『神秘主義
のエクリチュール』（一九八九年九月刊行）の序論部分で、もし自
分の身に何か起きた時に備えて、自叙伝的なことを書いておいたと
いうような話をしていた記憶が残っている。いつもの明るい調子で
語られていたのだが、まさかそれから間もなくあの事件が発生する
とは・・・。授業では、ユダヤ教の『トーラー』とイスラーム教の
「クルアーン」の一部を五十嵐先生が原語のまま暗唱し、事前に内
容その他一切の予備知識も与えられていない学生たちが、どのよう
な内容のメッセージであるのか想像して書き留める、という実験が
行われた時がある。学生が想像を膨らませて書いた内容をまとめて
みると、ほぼ似たり寄つたりの回答結果になったらしい。そのよう
な実験が行われた背景には、先生が「本質直観 (Wesensschauung)」
ではなく、「本質直聴 (Wesensanhörung)」という新たな概念・視角
から次なる大著『預言の構造』（仮題）を準備されていたことがあ
った。私が理解できた限りでは、人は何かを見て直観的に何かを感
得する場合があるだけでなく、言語の別を超越して目ではなく耳か
ら入る音を通じ感得できる、という仮説を打ち出すものであった。

一九九一年に入り、五十嵐先生が御自分の研究室で正規科目外の
ポランティアで有志の学生を対象に始めた古典ギリシア語の授業に
誘って下さった（参加者は私を含む三名）。私は同年九月からその

頃、ロータリー財団国際奨学生として英国留学が決まっていたのだが、ちょうど先生が「伊藤君の送別会を盛大にやっつてあげよう」と仰って下さっていた矢先に、あの悪夢の日が訪れた。

夏休み中の一九九一年七月二日午前、私は筑波大学平砂学生宿舍の食堂で、同じ学類の後輩と早めの昼食を取り始めた矢先でのことであった。突然テレビのニュースに、筑波大学が映り、何かと違った次の瞬間、五十嵐先生の顔が写しだされ事件の発生を知った。気が動転するまま、キャンパス内に走っていくと、報道陣その他で騒めいていた。その前日の一日昼、私は先生の研究室で古典ギリシア語の授業を受けていたのだ。翌週一八日の宿題箇所を指定された（本追悼集にその部分を掲載）、「先生ではまた来週」と交わしたのが先生との最後の会話になるうとは。たまたまその日、私が最初に先生の研究室に到着したのだが、直前に出版された『中東ハンパが日本を滅ぼす』を念頭に、「先生またあんな本を出しちゃって、大丈夫なんですか。誰か何か言ってこないんですか？」と尋ねていた。先生は半ば笑いながら、「来ない。こっちは手ぐすね引いて待っているんだけどねー」との答えであった。無論、『悪魔の詩』の翻訳を含め、著作物と事件との何らかの関連があるのか、全く知る由もないのだが、先生との会話の記録として残しておきたい。

ある日、先生とキャンパス上を歩いていた時だったと思うが、「この先一〇年間の仕事はすでに詰まっている」と仰っていた。あの悪夢の事件がなければ、その夏、先生は『西洋精神の履歴書』という大著を一気に書き上げる予定と伺っていた。前述の『預言の構造』についても、ほぼ構想は固まっつていて完成間近であった。河合

継之助と吉田松陰を題材とした、五十嵐一制作による第三弾の演劇も作成過程であった。もし五十嵐先生が生きていたのであれば、常々ご自身が強調されていた、ラディカリズム (radicalism) 「過激」という意味ではなく、ラテン語ラーディクス (radix) の原義通り、物事の根本にまで掘り下げて捉えること」に基づく新たな学問上の地平が切り拓かれていたに違いない。我々が失ってしまったものの大きさは、本追悼集に収録された様々な人々の証言や、五十嵐先生自身が著作物の中で残された言葉の数々からも察することが出来る。

あの悪夢の日から二七年目を迎えた。今日に至るまで、残念なこと、生前の五十嵐先生を知らない人々の間では、『悪魔の詩』の翻訳者という看板だけが独り歩きしている感が否めない。さらに残念なことは、『悪魔の詩』を翻訳した先生自身の本当の意図についても、十分に理解されてきたとは言いがたい。その点については、誠に僭越ながら、事件発生後一五年・二五年の節目に執筆した拙稿を本追悼集に再掲させて頂いた。

五十嵐一先生へ

先生は厳しく教えて下さいました。「学者であれば、自分の専門分野であるか否かを明確にし、自ら知らないことに首を突っ込むことは無責任だ」と。そのように薫陶を受け、しかも先生の「生の言葉」を鮮明に覚えていた私自身が、先生のことを、先生の業績を、断片的にしか知らぬまま、見切り発車する形で、今回の追悼集編纂をしてしまいました。その意味では、「教え子失格」の誹りを各方向から受けても、全く弁解を致しません。ただ、全く微力ながら、

将来的に、先生の業績や人物像を改めて振り返る人々に対し、たとえ断片的であつても、一つの手がかりが残せるのであれば、学恩に報いるほんの僅かな形かなと考えています。大洋のように心が広く、どこまでも心優しかつた先生、いつか天国で再会した時、教子の出来ない仕事ぶりをラディカルに評価して下さい。

瓜生田 和考

(元NHK法務部長)

「天才であり過ぎた男 五十嵐一」

この三〇四年、I Sの(と称する)テロが世界各地で発生したり、中東周辺諸国におけるイスラームを中心とする各宗派入り乱れての戦闘などが繰り広げられるたびに、テレビのニュースやワイドショーには解説者やコメントーターとして何人かの「専門家」が出演している。しかし、五十嵐一氏の最後の著書『中東ハンパが日本を滅ぼす』ではないが、いずれも「中東ハンパ」にしかイスラームやアラブの社会を知っていない人物ばかりで、彼らのコメントには専門的なことは殆ど含まれておらず、本当に正しいのかと思いたくなるものもあり、私はそれらのコメントを聴くたびに、五十嵐先生が生きておられたら先生一人で各テレビ局を回り、正しく深く日本人にとって為になるコメントをしてもらえただろうという思いに駆られる。今とは違い、五十嵐氏が四四歳で殺害された一九九一年当時は、

日本人の間でイスラームに関心を持つている人たちは極めて少数であり、ホメイニー師がサルマン・ラシユデイ氏の『悪魔の詩』刊行に關係した人物たちに対して発した死刑宣告が世界的に報道されることにより、その側面から関心を持つ人たちが出てきたという程度であつた。その本の日本語訳が上梓されたということまでは報道されていたが、訳者が五十嵐一という人物であるというところまで知っている者は東大や筑波大で彼のユニークな講義を聴いたことのあるあるいは放送大学の講義をテレビで視聴したことのある人たちに限られていたと言つても過言ではないだろう。彼の名が世間に広く知られたのは、『悪魔の詩』の日本語訳者が筑波大学構内で暗殺されたという衝撃的な報道によつてであろう。イラン王立哲学アカデミー研究員も務め、一般のイスラーム教徒よりも格段にイスラームに通じている五十嵐一なる人物の研究や思想を正しく知り、正しく理解していた日本人は極めて少数であつたと言える。

彼が正しく知られていなかった一つの例として彼の氏名の呼び方がある。一般の人が読めば「イガラシハジメ」であろうが、「正しくは「イカラシヒトシ」である。彼は新潟県出身である。私も『天のテレビ番組「日本人のおなまえっ!」を視聴して初めて知ったことなのであるが、「五十嵐」という名字は新潟県が発祥の地であり、第十一代垂仁天皇の皇子の五十足彦命(イカタラシヒコ)の子孫が新潟県蒲原郡の郡司を務めたことに由来するものであり、「イカタラシ」から「イカラシ」になり、漢字は「五十嵐」になつたことである。この名字を使用する人がだんだん東北に向かって広がっていくうちに訛つて「イガラシ」になり、秋田県以北では殆ど「イガラシ」と発音するが、新潟県の人は殆ど「イカラシ」と発音するとのこと

である。東京では五十嵐さんという名字の人を呼ぶときは殆どの人が「イガラシ」と発音するので、雅子夫人も一氏と知り合ってから結婚されるまで、そして今も「イガラシ」と発音されているのだと推測する。(なお、戸籍にはルビは振られていないので、本人が呼び方にこだわる人でなければ通称が一般的になることも多い。)

一氏は新潟高校から東大理Ⅱに入り、理学部数学科を卒業した。彼は高校時代から理数系の学問にも人文系の学問にも関心を持ち、すべて理解していたが、東洋思想や音楽、美術などの芸術分野にも関心を持ち、その後、東大大学院美学芸術学博士課程も修了した。音楽では学術面だけでなく実演も大好きであった。筑波大助教授時代には教え子たちを率いて幅広いジャンルのコンサートを開き、英語で歌も歌っていたほどである。彼の関心はイスラームに及び、博士課程終了直後の一九七六年から三年間イランに留学した。彼は語学にも天才といえるほどの天分を持ち、フランス語など西洋の言語のほか、アラビア語をはじめとする中東地域の言語はすべて使いこなせた。これだけ何でもできる人物を私は知らない。学問は何でもできるといふ人物や発想力・行動力が群を抜いている人物、リーダーシップでは他の追随を許さない人物、本業に加え趣味の分野でも一流であるという人物はそれぞれ少数だが存在する。しかし、そのすべてを備えている人物を私は知らない。といっても、正確に言えば、五十嵐氏の上記の能力や実力について私は実際に知っているわけではない。すべて、氏の友人たちの話、フィルムやVTR、著書、論文から見聞したものによって判断しているのである。そして、ラシユディ氏の『悪魔の詩』が刊行された当時、彼がその内容の本質を理解し翻訳する能力が無かったら、というか、日本語に翻訳して日

本人に「本当のイスラーム」を知らせる必要があると思わなかったら・・・、彼が暗殺されることもなく、現在さらに大きな存在、イスラーム研究の世界的権威として活躍していただろうと思う。天才であり過ぎた男ゆえの悲劇であるし、世界的にも取り換えしのつかない損失であった。

彼の能力は次第に花開いていったのであるが、東大の学生時代に同じキャンパスに彼の並外れた才能や行動力を見抜き、また、彼の豊かで優しい人間性と容姿(?)に惚れた女子学生がいた。それが現在の五十嵐雅子未亡人である。私は雅子さんの知人(友人)として彼女が一氏の祥月命日の前後の日に毎年開催している「五十嵐一氏の会」に殆ど出席しているので、その会によって五十嵐一氏の人となりや業績を知ることになったのである。私と五十嵐雅子さんは東京銀杏会という東京大学同窓会期成会(現在は東京大学同窓会連合会の一員)の会員同士であったが、ある時の会合の際、雅子さんから「あなたのお母様と私の母は高等女学校時代の同級生だったそうですね。」と話しかけられ、初めて雅子さんを知ったのである。実は、私もついぶん前に母から「私の高女時代の同級生の是川さんのお嬢さんの雅子さんという方が双葉から東大に入ったそうよ。」と聞いていたので、「あ、この方がその人か。是川雅子さんが結婚されて五十嵐雅子さんになったのだな。」と思い、それ以後、東京銀杏会の会合の際にはいろいろと話をするようになったのである。

東京銀杏会は、同窓会の活動としてイベントなどを行っていたが、その一環の勉強会として一九八八年四月に「文行会」なる会が設立され、同会は毎月一回ホテル等で勉強会を開催し、その時担当する幹事がテーマと講師を決め、当日の運営を行っていた。私も幹事に

なり、いろいろな講師を呼んでいたが、一九九一年七月二一日(木)午前七時一五分〜八時四五分には、外務省中近東アフリカ局参事官の野上義二氏(後の外務事務次官)を呼び、「湾岸戦争後の国際情勢の推移」日本のとるべき道」のテーマで講演してもらった。この会には五十嵐雅子夫人も出席していた。野上氏は話の中で『悪魔の詩』にも触れられた。講演終了後、私は「この方が訳者の五十嵐一氏の夫人で、下訳は英語の専門家である夫人が行い、夫の一氏がイスラームの専門用語や思想などについてチェックし、修正等を行って完成させたのだそうですよ。」と野上氏に話した記憶がある。その日の夜、筑波大学構内で惨劇が起きたのである。なんとという偶然か。雅子さんの心持ちを思うと未だにお気の毒でならない。

「悪魔の詩訳者殺人事件」は犯人が現在も判明しておらず、事件発生後一五年が経過した二〇〇六年七月一日に殺人罪の公訴時効が完成したとされ、警察が保管していた五十嵐一氏の遺品も遺族の雅子さんに返還されたが、犯人は当時筑波大学に短期留学しており遺体発見当日の昼過ぎに成田からバングラデシユに帰国したバングラデシユ人の学生であるとの説もある。ところで、刑事訴訟法二五五条一項には犯人が国外にいる場合はその期間時効の進行は停止すると規定されている。そして、二〇一〇年四月二七日に施行された刑事訴訟法二五〇条一項の改正で、人を死亡させた罪であつて禁錮以上の刑に当たるものの公訴時効は無くなった。同法附則三条二項には、人を死亡させた罪であつて禁錮以上の刑に当たるもので施行日までに公訴時効が完成していない罪については新法(改正法)が適用されることが規定されている。以上により、犯人が上記のバングラデシユ人である場合はもちろん、異なる人物(シリア派イスラ

ーム教徒のイラン人という説もある)の場合であつても、犯人がずっと国外に逃亡している場合は、現時点において公訴時効はなくなっていることになる。したがって、警察および検察にはぜひ今後も執拗にこの事件の捜査を続けていってほしいと考える。また、バングラデシユもイランも国際刑事警察機構(ICPO)加盟国であるのだから、ICPOを通じてそれらの国に捜査協力を依頼することも行ってほしい。

大野 昶

(元三井物産)

私と先生との間柄は先生とその弟子ということは共通なのですが、どこか違っています。

先生と私の出会いは草柳大蔵先生のご紹介によるものです。当時五十嵐先生と草柳先生は東北テレビで対談をされました。五十嵐先生の類まれな才能に感心されていた草柳先生が、私の中東赴任の話が出たのを聞かれ、中東を知るならこの人と五十嵐先生をご紹介下さったのでした。

五十嵐先生と私が周囲の状況から親しくお話をする機会を持ったのは草柳先生の留園で行われた還暦記念会の時でした。この会に五十嵐先生の知人は居られず、私の方もどうしたことか「花草会」という先生を囲む勉強会のメンバーが私意外には一人しかいませんでした。

もう一人の方はマスコミ関係なのでその知人の間で話し合っていました。

この会が五十嵐先生と親しくさせて頂く契機となりました。

その後は多分半年に一回程度のペースでお会いしていました。勿論海外勤務の時期を除いてのことです。

学校の先生の話は転勤のため先輩を紹介しました。その先輩も今は故人です。

先生の構想で実現しなかった一番残念なことは多分「悪魔の唄？」の翻訳が終わった頃ではないかと推測しますが、次の先生のテーマとして「ドナウ文化圏」を取り上げたいとお聞きした時でした。結局あの不幸な事件でどこまでその構想を進められたのか、もしご存知方がいたらお教えください。

先生は日本のいわゆる中東学者と違って、素直に欧州という補助線を中東問題については引ける方でした。もし先生健在ならば日本の中東感は全く違ったものになっていたことでしょう。

先生についての思い出は尽きませんが、次はカラオケ大会で救われた話をします。

鹿島 正裕

(金沢大学名誉教授)

「五十嵐一君を偲んで」

私は、新潟高校と東京大学で彼と同学年生でした。新潟高校では一年時のみ同クラスで、二、三年時は別でした。東大では私は文Ⅰから教養学部、彼は理Ⅰから理学部でしたから授業で会うことはありませんでしたが、教養課程は駒場で一緒に過ごしたのでまれにキヤンプラスで出会うことがありましたし、一年時に新潟高校出身の先輩が開いてくれた同窓生の懇親会でも会った記憶があります。同校から東大へは一学年に一〇人かそこらしか行かなかったたので（最近は一〇人ほどの年もあるようですが）、しかもその年（一九六六年）現役入学生はわずか四人、その全員が来ていたかも覚えていませんが、先輩の出席者も数人だったように思います。彼とそのような宴席で会ったのはその時だけでした。

このように、五十嵐君と一時は同級生だったし、のちに思いがけず中東研究者としていくらか似たような仕事をするようになった私ですが、残念ながら彼と親しくはありませんでした。なぜなら彼がずば抜けた秀才で、同級生も教師も一目置き、彼自身それを当然とする態度でしたから、私は話も合わないし敬遠していたのです。私も東大文Ⅰ（法学部進学コース）に現役合格したのですから秀才とされるのでしょうか、彼は別次元の人物でした。私は両親とも高卒で、港町新潟の下町で地元中学校に行き、中卒で就職する同級生がかなりいる環境ながら、親から大学を目指すように言われて受験勉強し、新潟高校に受かったのですが、教科書と参考書以外あまり本を読んでいませんでした。ところが五十嵐君は、新潟市の教育熱心な親たちが子供を行かせる新潟大学付属小・中学校を出てきており、同中学校から新潟高校には一緒に多数入って来ているのですが、彼らは医者の子供が多かったりで皆いかに優秀そう、裕福そ

うでした。一年時の同級生に付属出身者は彼以外に何人かいたのですが、彼らも「五十嵐は特別だ」という態度でした。彼のフアンのように、よく話を聞いている（付属出身者でない）男子が一人いました。友人と言えそうでもありませんでした。なにしろ彼は入学後すぐに、英語の教師をつかまえてシェイクスピアがどうのこうの、数学の教師をつかまえてガロワがどうのこうの、といった議論を吹っかけて困らせているような人だったのです。高校への受験勉強どころか、大学生の学ぶようなことを中学校で独学していた人がいるのを知って、私は衝撃を受けました。それで私も教養書を読むよう心掛けるようになり、当時は夢にも考えませんでした。結局学者になったのは彼のおかげかもしれません。

当時新潟高校では、毎学期の中間・期末試験や実力テスト（英数国のみ）の成績優秀者の順位と点数を掲示板に張り出していました。五十嵐君はそのほぼすべてで一番を通しました（約五二〇人中。三年時は文系と理系に分かれ、彼は理系で）。一度だけ、二年時の実力テストで二番になり、その学期末のクラス担任と父兄の面接時に母親が「恥ずかしいですわ」と嘆いたといううわさを聞いたものです。三年時には、当時旺文社の全国模試というのが年間三回あり、それで志望大学・学部合格率を知るために新潟高校生は一緒に受けていました。試験は文系と理系に分かれていましたが、五十嵐君は一回目・二回目ともに理系で全国一位でした。これも成績優秀者名簿が発表されたから分かったのですが、三回目は灘高生等が初めて集団受験したらしく、彼は最上位ではありませんでした。彼より優秀な（少なくとも受験勉強では）人たちは理Ⅲ（医学部進学コース）に行ったのか、彼は東大での一年時の教養科目平均点が

理Ⅰで一番だったそうです（私は教養学科進学後、そこでの友人から「俺は理Ⅰで七番だったんだが、一番だった五十嵐ってやつはどんな男？」と聞かれたので知りました）。試験での好成績を目指してがり勉強する人が多い中で、彼がすごいのは試験勉強以外にたくさん本を読んだり音楽を聴いたりしていたことです。先述の新潟高校同窓会では、「第一外国語にロシア語を選んだのは、ドストエフスキーを原語で読みたかったから」と、まもなく理学部で数学を専攻する人らしからぬことを言っていましたし、大学院では数学ではなく美学芸術学を専攻したのですが、それを知って驚いた私に、「前からそのつもりだったのだけれど、まず数学の美しさを見極めたかったんだ」と言っていました。その後イスラム思想史を研究しにイランに留学したのを知り、またまた「何で欧米じゃないの？」と驚かされましたが、今の私は「さすがに目の付け所がよかったな」と思います。

当時の私はベトナム反戦運動や「七〇年安保闘争」に影響され、「東大闘争」に「駒場共闘」の一員として関わって、社会主義に強い関心を抱いていました。それで立身出世主義者の多い法学部に行かず、教養学科で国際関係論を主専攻、ロシア・ソ連研究を副専攻にしていたのですが、一九六八年にチェコスロバキアが「人間の顔をした社会主義」を目指したのをソ連らが軍事介入して押しつぶしたために、ソ連に絶望しチェコに代わって社会主義体制の改革を試みていたハンガリーを研究すべく大学院に行くことにして、一九七四〜一九七五年に一年半同国に留学しました。しかしそこで現実の社会主義の原理的矛盾に気づき、ハンガリー研究を一書にまとめたあと社会主義研究から離れることにしました。その後周知のごとく

一九八九〜九一年にソ連・東欧の社会主義体制が雪崩を打って崩壊し、社会主義研究者たちは途方に暮れることになったのです。潔く研究者をやめた人もいましたが、多くは比較体制論等に流れていききました。私自身は、一九八〇〜八二年に国際交流基金派遣専門家としてエジプトのカイロ大学で日本語・日本事情を教えたのを契機として、中東研究に転向しておりました。それで必然的にイスラム思想についても研究することになったのですが、五十嵐君ほどの能力のない私にはアラビア語もなかなか身に付かず、アメリカでその対中東政策を研究したり、英語と仏語で何とか研究できるマグレブ諸国、特にアラブ諸国中唯一民主化に成功したチュニジアを調べたりしています。最近では亡命イラン人モザッファリが英語で書いた

『イスラム主義——新たな全体主義』（風行社、二〇一八年）を翻訳刊行し、五十嵐君と同じような分野を研究することになったものだ感慨を覚えました（同書には彼の悲劇についても書かれています）。

自分のことを長く書いてしまいましたが、五十嵐君は私のハンガリーからの帰国と入れ替わるようにイランに留学し、そこでイスラム革命に遭遇して帰国、その体験談を出版して論壇デビューしました。大学院での研究をまとめた『知の連鎖』という学術書もすぐ刊行したのですが、『中東共育のすすめ』や『音楽の風土』といった一般向け啓蒙書も続々出版し、イスラム思想史を遙かに超えて幅広い知識を披瀝します。しかし有名大学で専任教員ポストを得るには、こうした評論家的活動はかえってマイナスだったようではなかなか就職できず、奥さんと塾を経営する時期が続きました。私もハンガリー研究をまとめたあと前述のようにエジプトに行き、一九八二

年に帰国後金沢大学で教えるようになったのですが、もう三四歳になつていました。中学校時代くらいから友達・先生・親戚らに年賀状を出す習慣を身に付けていたので、五十嵐君とも東大での懇親会以来年賀状の交換をしていましたから、就職を知らせると彼から新著を送ってもらえるようになりました。彼が一九八六年によく筑波大に職を得るともう送ってくれなくなりましたが、続々と専門書や評論書を出版するのみならずオペラも上演する等、多彩な活動を展開していることは年賀状で知らされていきました。私は一九八八〜八九年にフランス政府給費生として「アラブ・ムスリム世界研究所」で八か月研修したのですが、ちょうどその頃ラシュディが『悪魔の詩』でブッカー賞を取り、イランのホメイニが彼や各国の翻訳出版関係者に死刑宣告を下したので欧米では騒ぎとなりました。私のいたフランスでも、テロを警戒して訳者を匿名にし、出版社も一〇社ほどで連携する形をとっていました。帰国すると、なんと五十嵐君が日本語訳を刊行し、記者会見までしてその際パキスタン人に襲われそうになったと報じられたのでびっくり仰天しました。危険だなあと危惧していたら、案の定悲劇が起きてしまったのです。

彼の訳書を読みました。軽妙で饒舌な文章で彼の訳文だからというだけでなく、内容も彼が書いてもおかしくなかったように感じました。『イスラーム・ラディカリズム——私はずいぶん「悪魔の詩」を訳したか』という彼の著書を読んではいませんが、世界的な話題の書ながら他の日本人が訳出をしり込みする中、日本でのイスラム理解を高めるために我こそは危険を冒すのだという男気を見せたのだと思います。自分は古今東西の学問・芸術・音楽等何にでも（スポーツ以外は？）通じており、適切な評価ができるのだという

自信をもって著作活動を行っていて、この訳業もその一環という意識だったのでしよう。ただ彼は、小学校時代からずっと経済的・知的に恵まれた仲間たちと過こしてきて、ある種の人たちの怒りの怖さを実感していなかったのではないのでしょうか。私は中学時代にいわゆる「不良少年」に殴られたりした経験があるので、彼はそういう怖さを甘く見たのではないかと感じています。彼は井筒俊彦氏の「愛弟子」だったそうですが、井筒氏が古今東西の哲学や宗教に通じていたとはいえ、五十嵐君はそれ以外の分野でも広い知識をもっていたので、長生きすれば著名な学者・評論家となっていたでしょうに、早死にして本当に残念です。日本にとって損失だっただけでなく、イスラム世界もそのよき理解者・紹介者を失ったことでした。

片岡 啓

(九州大学大学院人文科学研究院准教授、
インド哲学史)

私が東大印哲学部四年の時、一九九一年春のことです。単位もほぼ取り終え、特に忙しくもなかったのですが、本郷から駒場まで出かけて聴講をさせてもらっていたのが五十嵐先生の授業です。先生は非常勤で東大駒場まで来られていました。次の著書の準備を兼ねてでしょう、世界の創造や預言者の系譜について、三宗教の比較的考察を中心とした授業をされていました。私が出たのは、ちょうど、先

生が亡くなられたまさにその年の学期です。

その前年に、東大印哲で一年先輩の久間泰賢きゆうまたいけんさん(現在、三重大学准教授)が五十嵐先生の授業を取られていて、「五十嵐先生、面白いよ」という話を聞いていました。また、東大の音楽サークル(F研)のバンドで吉祥寺でライブをやったところ、そのライブにも五十嵐先生が顔を出されていました。その時が初めて先生をお見かけした時です。若者しかいないライブ会場に明らかに教授然とした年長者がいたので非常に目立っていました。しかも、ライブ終了後は、ボーカルの瀬川さん(前年の授業に出ていた印哲の先輩)に親しげに声をかけていらつしやいました。ロックバンドもやるし、スーフィーの舞踊団まで結成してぐるぐる回る先生がいるんだ、と強烈な印象を持ったのを覚えています。それで、わざわざ駒場まで出かけて授業を受けたわけです。とにかく、才気煥発、語学に関しても何でもマスターするような達人で、サンスクリット語まで知っているときています。私が印哲所属と知って、授業では、「これはサンスクリット語ではこうだ」等というコメントも時に交えてくださってました。天才とは、このような人のことを言うのでしよう。私は単位不要だったので、「単位は要りません」というと、「単位も要らないのにわざわざ来てくれる人がいる」と嬉しそうに他の学生の前で、そのことに言及されていました。授業はこじんまりとして、受講者は一五名ほどでした。

学生との付き合いを大事にする先生で、毎回、授業終了後には、井の頭線の渋谷駅を降りたすぐの店に連れて行ってくださいました。駅の改札を出てすぐ右手のエレベーターを昇ったところがあり

ますから、非常に便利な店でした。席に座るなり、テーブルの上に置いてある「今日のおすすり」という六品ほどを書き出したお奨めメニューを店員に指さしながら、「じゃあ、これ、上から下まで全部」というような豪快な頼み方をされていました。授業でも喋り足らなかったことを、さらに酒を交えながら講義してくださっていました。

多芸多才の上に、面識も広く、先生のお葬式に行つたときには、思わぬ知り合いに会つたのを覚えています。私の住んでいた寮（目白台にある財団法人和敬塾）で座禅会の指導をしてくださったいた寺山且中先生（一九三七―二〇〇七・五三）です。書と禅と直心影流という三本柱の筆禅道の唱道者です。五十嵐先生と寺山先生は、東大の美学で一緒だったそうです。背広のインテリと、作務衣の武道家という、私の中では全く結びつかない両先生です。

授業当日、待てど暮らせど先生が来られないので、自然休講となりました。事件を知つたのはその日の午後のことでした。その前の週だったでしょうか、ちょうど、『中東ハンパが日本を滅ぼす』（徳間書店、一九九一年五月三二日初刷）を上梓されたばかりで、「この本を欲しい人は？」と一冊、熱烈な先生フアンの学生にあげていらつしやいました。私も欲しかったのですが言いそびれました。先生の薫陶を受けることができた期間は僅かでしたが、先生が残された著書は私の愛読書となっています。

九州大学に奉職したのが二〇〇五年四月。そこで谷隆一郎先生（一九四五年生、教父哲学）と同僚になり、谷先生が五十嵐先生と東大で同窓だったことを知ります。五十嵐先生との縁を再確認した瞬間でした。

川本 敏

「五十嵐一君を偲ぶ」

一九九一年七月一二日あの痛ましい事件によって、四四歳の短き生涯が閉じられてしまった。二七年前の葬儀は暑い日であった。霊前に弔辞を読ませていただいた。世界的な才能の喪失、雄弁で快活な大丈夫の喪失に涙が止まらなかった。貴兄を思い起こすごとに、駒場時代やその後の時の流れが思い起こされ、痛恨にたえない。

五十嵐君と初めて会つたのは東大駒場の理一二二組（第二外国語がロシアの語クラス）であった。優秀な学生が多いなか、とりわけ精彩を放つていたのが五十嵐君であった。数学や物理や語学はもとより、東西の文学・哲学、シエークスピアやプラトンまで精通し、教授と対等に議論しているのには驚くばかりだった。

多様な分野に関心があつたが将来何に進むか迷っていた私は、貴兄の途方もない学識と、才能、生き方を慕って、大泉学園にあつた彼の住居（御祖母様とご一緒の住まい）に行つたり、我が家に寄つてもらつたりした。雅子夫人と結婚後は、千東のお宅にお邪魔したこともあつた。

五十嵐君は数学科に進学、大学院は美学に進みイスラーム研究に励まれた。私は都市工学科に進学し経済企画庁に就職し、その後も時おりカフェなどで懇談した。

経済企画庁の広報経済誌「ESP」に、入庁一年上の八代尚宏編集長から若手で優れた書き手はいないかと問われ、貴兄を推挙、イラン王立哲学アカデミー留学生生活をもとに「西胡の巷にて」と題する連載が一九七八年一〇月号からはじまった。この連載などがもとに東洋経済新報社から『イラン体験 落とされた果実への挽歌』が出版され、その後の膨大な著作の嚆矢となった。

贈呈いただいた『知の連鎖 イスラームとギリシヤの饗宴』『音楽の風土 革命は短調で流れる』『イブン・スィナー』『イスラーム・ラダイカリズム 私はずいぶん「悪魔の詩」を訳したか』などの著作が今でも書棚から私を見据えている。

葬儀の時の挨拶で、故安東伸介慶大教授は、五十嵐氏を慶大助教に招聘しようとしたが、大学の閉鎖性の故にうまくことは運ばなかったエピソードを披露していたが、人にはいろいろな分かれ道があるかもしれない。しかし、貴兄が存命であったなら、今日のイラン・中東問題はじめ内外の重要事象について、他に見られない視点や貴重な考え方を世に提供してくれていることに違いない。

木村 達雄

(筑波大学名誉教授)

「五十嵐一君の思い出」

東京大学の理科I類に入学して、何がきっかけだったか忘れたが、

五十嵐君と知り合い、良く話をするようになった。彼の家は西武池袋線の大泉学園で、私の家は隣の石神井公園しゃくせいだったので、よく一緒に帰ったり、彼の家に遊びに行ったりした。

理科I類は第二外国語によつて全部で二〇を超える小クラスに分かれていた。ロシヤ語クラスは三つあり、五十嵐君もロシヤ語クラスではあったが、私とは別のクラスであった。



(写真…東大入学の頃の五十嵐一君)

五十嵐君は、いかにも才能がきらきらしていて天才という感じで、とくに語学の才能がすごかった。アラビヤ語、ヘブライ語、ギリシヤ語など六つくらいの言語を自由にあやつり、ホメロスの詩も全部暗記しているとのこと、ギリシヤ語で吟じてくれたこともあった。英語に至っては、講義担当の東大教授を相手に堂々と持論を展開し、教授が「高説拝聴しました」と言うので、結構それが話題にな

り、五十嵐君のクラスでの英語の授業を廊下から覗いている学生が沢山いた。

当時、私は合気道を本部道場の山口清吾師範に習っていて、五十嵐君を道場見学に連れて行って山口先生に紹介したことがあった。あとで山口先生は「ずいぶん才能があふれている人だね」と私に言われた。

五十嵐君は私の合気道を尊重し、私も五十嵐君の類稀なる才能を評価していて、お互いに敬意をもつてのつきあいだった気がする。

東大では一、二年を駒場で過ごし、三、四年を本郷で過ごすのが普通である。理科I類では、進学希望を振り分けるために千三百人ほどの学生に二年になる頃、全体での成績順位が付けられる。各学科は定員が決まっていて、志望者が定員を超えると、成績順に上からとって締め切られてしまい、入れなかった人は第二志望、あるいは第三志望の学科へ回されるのである。

五十嵐君は私に成績表を見せてくれたが、平均点が一〇点満点で八・七であり、一三五六人中で二番と記されていた。私は七七番で、当時、物理学科の定員は三〇名、数学科は五〇名、私の順位では物理学科は行けそうもなく、数学科に入った。なぜか五十嵐君も数学科に来ていた。

数学科三年のルベীগ積分の講義を担当された伊藤清三教授（ガウス賞を受賞した伊藤清教授の弟さん）の自宅に五十嵐君、田中裕君らと一緒に招待されたこともあり、きれいなお嬢さんがいて楽しい時を過ごした。



（写真…後列左から筆者、五十嵐一君、お嬢さん、前列左から田中裕君、伊藤清三教授）

また常微分方程式論の講義を担当し、のちに日本数学会理事長を歴任した木村俊房教授の自宅に五十嵐君と数人でお伺いしたこともあった。そこで五十嵐君は何と先生を相手に女性論を展開して、私はびっくりして聞いていたが、先生には「生意気なことを言うんじゃない、まだ早い！」と半分笑いながらたしなめられていた。

本郷の数学科へ進んだ六月頃から、いわゆる東大紛争が始まり、

殆ど講義がない状態になってしまった。そういう影響で、四年で卒業する頃、留年者は出さないといい大学当局の方針で、みんな卒業であった。

五十嵐君は美学の大学院へ進んだ。私は大学院の試験に落ちたので、そのあいだアテネ・フランセでフランス語の勉強などをしたが、とても五十嵐君のようにはいかなかった。翌年、大学院に合格して、修士卒業と同時に、名古屋大学の助手に就任した。結局、名古屋大学には七年いたが、そのうち四年間はアメリカのプリンストン高等学術研究所とかドイツやフランスに行かせてもらえた。良い時代であった。フランスにいるときに、筑波大学の先生から手紙をもらい、一九八〇年に筑波大学へ移った。

その年の夏に五十嵐君から久しぶりに連絡があり、著書「イラン体験」（東洋経済新報社）のサイン入りの本をもらった。その後、彼からは全部で一一冊の著書をいただいたが、「中東ハンパが日本を滅ぼす」という本の題名を見たとき、彼らしい駄洒落を感じた。微分を塾の生徒に教えるときに、「自分のことは自分でせよ、をもしつて、微分のことは微分でせよ、と言っているんだ」と話していたことを思い出した。

驚いたことに、しばらくして、五十嵐君が筑波大学の助教授として赴任してきて、また再会した。

彼は筑波大学の学園祭で、第三学群の池の上に水上のステージを作り、色々な歌をうたい、最後に長渕剛の乾杯を心をこめて熱唱した。それを聴いた私は、心の底から感動した。すごいものだな、と思った。「・・・つくばの山は今でも君の心の中にいますか・・・つくばの愛に背を向けるな・・・」という具合に歌詞も微妙に変えて歌って

いた。

また一九九〇年には聖喜劇エマームというイスラムの演劇をやったり、大活躍をしていた。

私はその頃は合気道から離れて、大東流（たいとうりゅう）合気武術の佐川幸義先生のところでの修業に夢中になっており、五十嵐君に会うたびに、佐川先生の技のすごさや考え方の深さを話した。五十嵐君は領きながら一生懸命聞いていた。私も五十嵐君から知らない話を色々聞くことが、楽しみであった。



（写真：一九九〇年九月二五日 筑波大学学園祭で、長渕剛の乾杯を熱唱す

る五十嵐一君

そのうち「悪魔の詩」の翻訳を出し、イランのホメイニから暗殺指令が出たことを知り、非常に心配したが、彼が暗殺される一ヶ月前に突然一年ぶりに連絡があり、私に会いたいと言う。

そこで大学のすぐそばにある「ランプ」という喫茶店で久しぶりに五十嵐君にあった。

私「久しぶりだな。おい、暗殺指令が出ているのだから本当に気をつけなきゃ駄目だよ」

五十嵐「いや、いいんだ、もうやりたいことは十分やったし・・・」

私「何を言ってるんだ。警察官に守ってもらえよ」

五十嵐「いや、大丈夫だ」と言って、彼は著書や一九九〇年二月三日の聖喜劇エマームのビデオなどを私に渡した。

その後、彼が暗殺されたという知らせが入った。あとから考えると、その時間に私は自分の研究室にいたのだ。わかっていれば何とすることも助けにいったのに、と残念で仕方なかった。

警察からは三回にわたり六時間ほど五十嵐君について色々聞かれたほか、大学や警察の上層部での話しにも五十嵐君の親友として呼ばれた。

あとで雅子夫人から、まるで死期を自覚していたかのように、最後に猛烈に仕事をしていた、と聞いて、本人の魂の深いところでは、すべてを理解していたのかな、と思った。

当時五十嵐君の所属していた学系の学系長をしていた竹本忠雄教授の提案を受けて、数学系では私を中心になって遺族を支援するお金を集めて、竹本先生に渡した。

それが機縁となり、私が講談社から「透明な力―不世出の武術家・

佐川幸義」という本を初版二万部で売り出したとき、竹本教授が中心となって、筑波大学で盛大な出版記念会を開催して下さった。のちに竹本先生がフランスにお住まいの時にはお訪ねした。「この縁は五十嵐さんが作って下さった」と良く言われていた。私も本当に五十嵐君が縁を作った、と感じた。

今では五十嵐君を直接知らない人たちですら、五十嵐君を縁として、知り合いの輪を広げているが、五十嵐君が別世界から働きかけている気がする。彼は現在も活発に活躍しているに違いない。

久間 泰賢

(三重大学)

『「神秘主義のエクリチュール」の頃』

現在、他大学で宗教学の非常勤講師をしている。私の専門はインド思想・仏教思想研究であるが、講義ではイスラーム神秘主義についても説明する必要があるため、五十嵐先生の『神秘主義のエクリチュール』(法蔵館、一九八九年)を配付資料として使用させていただいている。同書では、著名なスーフィーの詩を題材として、自己と他者(あるいは神)が融通無碍に溶け合う境地が論じられている。明澄な酒とグラスが互いに溶け合うように一体化するという比喻を用いた神秘主義的な詩節はとても美しく印象的であり、それに対する五十嵐先生の解説も明快で分かりやすいことから、講義では特に

この箇所を用いている。

そもそも『神秘主義のエクリチュール』という著作そのものが、私にとつて思い入れの深いものである。この著作が刊行される頃、私は東大印哲の学部生であったが、ちょうどその時期に五十嵐先生が文学部の非常勤講師をしておられたのである。イスラーム研究室の講義であるにもかかわらず、旺盛な好奇心だけが取り柄だった当時の私は、教室に顔を出してみることにした。それが先生と私の出会いであった。講義内容は当時刊行準備中だった『神秘主義のエクリチュール』に基づいたもので、イスラーム研究のみにとどまらない縦横無尽の学識に圧倒された私は、先生の講義に続けて出席するようにになった。

今思い返してもつくづく有り難いと思うのは、先生が非常勤先の学生に対しても、大変親身に接してくれたことである。お酒もよくご一緒させていただいた。そして、先生との酒席を通じて私の世界も飛躍的に拡大した。印哲研究室以外の東大生とのつながり、先生の本務校である筑波大学や他の非常勤先の学生さんたちとの交流、そしてベリィダンスの皆さんとの出会いは、その後の私にとつて極めて貴重な財産となった。

五十嵐先生は常日頃からそうであったが、酒席でも学生に対する細やかな気配りを絶やさなかったように思う。その一方で、私などが不用意な発言をすると、本気で叱咤されることもあった。率直なところ、当時は何故叱られるのか自分でもよく分からなかったのだ

が、今になって『神秘主義のエクリチュール』を読み返すと、先生の声が直接私に響いてくるような感覚を覚える。根源を見失って細部に囚われてしまうことは、先生が最も戒めたところであった。非常勤先の若輩者の一学生に過ぎない私を、そのような深い生き様のレヴェルで、本気で叱ってくださったのであった。

酒をめぐっては、もう一つ忘れたい思い出がある。印哲研究室での私の指導教官の江島惠教（えじまやすのり）先生も酒豪であったが、酒席で私が五十嵐先生のお名前を出したところ、江島先生がご存じだったのでとても驚いた記憶がある。江島先生が長岡技術科学大学に勤めておられた頃に、五十嵐先生を非常勤講師としてお呼びしたことがある、とのことであった。その際に相当お二人で酒を飲んで語り合ったらしい様子が、江島先生の快活な口調から伝わってきた。そこで今度は五十嵐先生の前で江島先生のお名前を出したところ、やはり非常に楽しい霧囲気の反応が返ってきた。どうやら両先生は意気投合したようである。しかも、学問的な深い部分で通じ合った様子もある。当時の私には雲の上の存在であった二人の先生が、酒席を通じて理解しあっていた。五十嵐先生はギリシア思想もよくご存じであったし、江島先生もプラトンの『饗宴』に出てくる「酒の中に真実がある」という格言を好まれていた。お二人とも『饗宴』のような哲学談義を交わされたのだろうか。何だか無性に嬉しかったことを、今でもよく覚えていてる。

自身が教壇に立つ今、五十嵐先生の『神秘主義のエクリチュール』を読み返すと、本当に様々な思いが去来する。融通無碍に溶け合う

境地についてこれからも考え続けていくことで、先生の尽きせぬ學恩に対して少しでも杯を獻じることができればと思っ

後藤 喜兵衛

(東京タイムズ社、徳間書店OB)

五十嵐一さんと知遇を得たのは、一九七九年(昭和五四年)に、ホメイニのイラン革命が起こり、留学先の「イラン王立哲学アカデミー」から、五十嵐さんが帰国された直後です。

当時、迂生は、「東京タイムズ社」に勤務していて、イランなど中東問題などで、適確な解説、分析をしてくれる専門家を探していました。「既成のマスコミに登場していない、目垢のついていない識者を、どなたかご存知ありませんかね」と、ムシのいい話を、知り合いの、権威ある出版社の編集者に尋ねたところ、「そりゃあ、五十嵐一でしょう。歴史、音楽、博識でなんでもござれ、たいへんな博識、逸材ですよ」と教えてもらったのがきっかけでした。

早速、五十嵐さんに、「コラム」の連載をお願いして、快く応じて頂き、その後は、座談会など中東問題とは、およそ無関係な政治、経済のことにも紙面協力して頂きました。後日、その話を五十嵐さんにしたところ、五十嵐さんが「それほどまで、評価してくれているなら、執筆依頼が来ても可笑しくないのに、僕のところは全然、そ

の出版社から、出版、執筆依頼のお声がかかりませんでしたね」と、大笑いになったこともありました。

五十嵐さんは、東京タイムズ社に経営参画していた「徳間書店」からも、一九九一年に「アラブは要るが、アブラは要らぬ」という、ナントも、人をくったような、書名の単行本を出されましたが、こういうくだけた、アイロニーあふれる、タイトル、書名も、OKなのは、五十嵐さんの融通無碍、柔軟な性格の一端をあらわしていると思います。

学者、専門家と言うと、とかく、実体とは逆に、堅苦しく、真面目くさって、既成概念の中で、身を処する人が、過半ですが、五十嵐さんは、全くそれと対極に居た方でした。権威に媚びたり、追従はせず、なんでも、ドンドン、自分の興味のある事の核心に迫り、「これは、世の中に伝えないといけない!」、「知らせないといけない」となると、使命、正義感が燃えさかる気性、性分でした。迂生のような、へそ曲がりとも、ウマが合ったのだ、と思っています。

「悪魔の詩」の刊行にあたって、今でも覚えていますが、「後藤さん、この本を出すという事は、殺されることも、覚悟する、ということですよ」と、きっぱり言い切られたことです。こちらは、「大丈夫ですか、無理をしないで下さいよ」と、応じるしかありませんでしたが、それだけの、強固な信念、意思による翻訳化だった、と思います。

五十嵐さんが、予見されていたように、中東、イスラム世界はますます混沌として、それに、どう対応、解決していくのか、問題は大きく膨れ上がるばかりです。今さらながら、五十嵐さんには、もつと、もつと生きていてもらいたかった、と、その死を悔やむばかりです。

清水 良衛

（比較思想学会評議員、地球システム・倫理学会理事、文明論・社

会人講座 座長）

「今なお、国家的損失を思う」

既に八十三歳となり、昔をふり返ることが多くなった。五十嵐一氏との出会いには、その後、あの事件が起きる迄の勉強会を含め、幾つもの思い出がある。

五十嵐一氏の学術上の業績は、今更、紹介する迄もないが、その背景にあった十ヶ国語を超える語学力は、コプト語を含め、誰もが及ぶものではなかった。それ故に事件を知った時、私は実に、実に国家的損失を思った。

私は石油開発の仕事で若い頃、二度にわたりサウジアラビアとクウェイトでの生活を経験したが、氏のイランでの研究生活から来るイスラムの話は、サウジのそれとは異なるものとして特にスーフィズムと、同氏のイスラムへの深い共感に、私は関心を拡げていた。

医学者イブン・スィーナ（九八〇—一〇三七）の業績や人となり、アラビア語の原典から紹介した労作『東方の医と知』の第一章冒頭に、五十嵐氏は自分の言葉で「文明は橋を架けるが、文化は大地を掘り起こす」と、これをアラビア語の語源にまで遡り書いた一文がある。氏の研究は常に、語源に尋ねてのものが多かった。

イスラム世界での様々な誤解から、五十嵐氏には文学の書であるサルマン・ラシュディ著『悪魔の詩』の訳出に対し、ホメイニ師から怒りが発せられた折、ある研究会で私は同氏に、「ホメイニの誤解を解くに一文を書いてみたら」と言ったことがある。氏はこれを受け、『平和と宗教』（第八号、一九八九年）に「拝啓ホメイニ様」と題し、寄稿されたのだった。

事件から日を置かずして、捜査中の茨城県の警察から電話を受けたこともあったが、私の名刺があった、とのことであった。当時、犯人捜査に尽くしていた警察関係の方々の努力は大変だった、と思う。

五十嵐一氏の死から四半世紀が経つ。日本の国家的損失の思いは今も変わらない。時効は過ぎてしまっているが、ここに改めてご冥福を祈りつつ、氏の偉大な業績を偲びたい。

菅井 深恵

(公財) 関記念財団理事長

「あの頃の思い出」

五十嵐一さんとの交友は四十年前にさかのぼります。東京大学教授で英文学者の日高八郎先生から、突然「紹介したい学生があり、話を聞いてあげて下さい」という電話を戴き、三人でお会いしたのが五十嵐一さんとの初対面でした。

「この人は数学の学生ですが、卒業したら文学部の美学の大学院に入って、今道教授の指導を受けたいとの事、貴女は美学に縁があるから今日はその感想を彼に話してもらいたいと思ってここに来て戴きました。私はたしかに美学研究室で竹内敏雄先生から多くを学び、ドイツのハイデルベルク大学で哲学、美学を学び帰国したばかりでした。日高先生のお話にどう答えてよろしいか、第一に本人の五十嵐さんに対しても同様で私は「何故」という質問から始めなければなりません。実は後日、ドイツで知り合った数学者から「五十嵐君は非常に出来る人」と聞いた時は驚いたのです。しかしその五十嵐さんの決意は変わるはずがありません。彼はすぐに文学部美学研究室で猛勉強を始めました。その後私は五十嵐さんとお会いする機会が少なかったのですが、彼は博士課程を修了した後、イラン王立哲学アカデミーの연구원となり、帰国後、『中東共育のすずめ』という著作を発表しました。

五十嵐さんとの本格的な交友関係が始まったのはその後で、私は

何か世の中の役に立つ研究所を創りたいと考え、五十嵐さんに比較文化研究所をつくって、すでに国際摩擦を起こしている企業の人たちに、語学のみならず五十嵐さんの講義と指導で中東その他外国の習慣、異文化から生ずる多くの問題について教えて下さいという話をした途端、大賛成と彼は言って、講師の組織づくりを始めました。海外に進出する企業に喜ばれ、私共の仕事は多忙を極めました。

それからしばらくして、彼は筑波大学の助教授になり、私の方も現在の財団を設立する準備で五十嵐さんとお会いする機会がなかったのですが、ある日突然彼と赤門近くの通りでばったり会いました。「どうしたのしばらくね」とお互い驚きつつ近くの喫茶店に入りました。「今日は東大にきたのです。毎週金曜日」と話しはじめました。

「何の講義?」、「イスラーム学」と笑って少しながら東大にイスラーム学を開設したことを話してくれました。ところが彼は面白そうに「湾岸戦争」の話をしながら、実は先日海部首相に霞ヶ関に呼ばれ、問題になっている湾岸戦争について、何とか貴方の意見を伺いたいとなかばあわてた表情で話してきたので、五十嵐さんは「秋篠宮に十億円を持たせてイラクに行ってもらえばよろしい」と彼女の意見を言うと、海部首相は「それは出来ない」と困っていました。六時間も霞山会館に閉じ込めお弁当一箱で「何とかならないか教えて下さい」とあわてふためいていたと、五十嵐さんは笑って話してくれました。

その頃私が外国に居ると日本の歴史についてよく聞かれ、ウィーン大学ではクラウナー教授、そしてボン大学にはツアフルト教授が日本の古典籍を書棚に並べていらっしやるということで、日本学が盛んでした。だからというわけではありませんが、日本の歴史をも

つと勉強しようと思ひ、「江戸時代の社会情勢、幕末の動乱、そしてそこに登場する人物たちに関心を持ち勝海舟を研究している」と五十嵐さんに話をしたら、別れた後そして凶刃に倒れる直前、彼の著書『摩擦に立つ文明』を送つて下さいました。私もこの一冊は大切にしています。この素晴らしい論考は、多くの著書の中でも輝いています。明治の近代化、急ぐあまりの摩擦、特に西洋医学と日本の留学生の問題、森鷗外の事など、彼の卓越した調査、分析は素晴らしい研究で、さすが理学部と文学部に席を置いて研究した彼の学識は比類なきものです。その一週間後です。筑波大学の研究室を出た処で五十嵐さんは凶刃に倒れてしまったのです。

五十嵐さん今も天で学問を続けていらつしやるでしょうね。

田中 裕

(上智大学名誉教授)

「夢の如き眞實―五十嵐一君の思い出」

五十嵐一君と初めて会つたのは、本郷の理学部数学科への進学が決まったあとの駒場の教養課程二年生の秋学期、英語の授業の時であつたと記憶している。五〇年以上前のことという、すべてが夢のようでもあるが、反面、昨日の出来事よりも遙かに強いリアリティをもつて思い出されるような気もする。短期記憶のあやしくなつた老人の繰り言と思つて聴いて頂きたい。

あれは、グレハム・グリーンの短編小説を学生が順番に読むという演習であつただろうか、五十嵐君の番が来たときに、彼は、開口一番、担当の教師にむかつて、「先日のシェークスピア学会ではお世話になりました」と言つた。大学二年生の時にすでに日本シェークスピア協会の会員だつた五十嵐君は、同じ研究者仲間としてその英語教師に挨拶したのである。大学院生ではなく学部生、それも理科一類の教養課程の学生が、単なる趣味でシェークスピアを読むというのではなく、学術的な場でシェークスピアについての研究活動を専門家と共にしていたというのは、にわかには信じがたいことのようにも思われようが、それが若き日の五十嵐君だったので、今回想つてみるといかにも五十嵐君が言いそうな言葉であつた。

当時の駒場の教養課程は、旧制一高の面影をまだ十分に残している、およそ実用とは縁のない古典のテキストが演習で使われていた。五十嵐君と同じく理科一類から数学科へ進学した私の場合でも、一年生の時に「ハムレット」、二年生の時に「ジュリアス・シーザー」および「十二夜」を講読する英語演習をとつたのを覚えている。ジョン・ギールグッドを初めとする名優達の演ずるシェークスピア劇をテープレコーダーで聴かせながら、語学演習を指導する先生達ご自身も楽しみながら授業―というより雑談―をしていた。

五十嵐君には、当時から、どこか「専門家を超えるアマチュア」という趣があつた。大泉学園にあつた彼の家の書齋には、古今東西の文藝や哲学の古典―それは翻訳ではなくほとんどが原書―がおいてあつたにもかかわらず、彼は他人の学説を受け売りするディレッタントとはほど遠い存在だつた。自由闊達なプラトンの対話術を身につけ、常に聴くものを楽しませながら古典の世界へと我々を啓発し

てくれたものである。

本郷の理学部数学科に進学してまもなく、大学がバリケードで封鎖され、安田講堂に立てこもった「全共闘」の諸君が機動隊に排除された「学園紛争」の時代となった。数学科でも同級生のZ君が機動隊に逮捕されたので、それを氣遣って拘置所まで、仲間と一緒に衣類や日用品の差し入れに行った記憶がある。拘置所から戻ったZ君―サルトルを引用した安田講堂での彼のアジ演説は今でもよく覚えていて―を囲んで数学科の同級生が一席設けたことがあった。その席で五十嵐君は「ソクラテスはなぜ脱獄しなかったか」という話をしたのである。「中核」や「革マル」のイデオロギー的言説とはほど遠いソクラテスの話を五十嵐君がなぜしたのか、当時の私にはよくわからなかったが、いまにして思えば、要するに、「自分の持ち場を離れず、中途半端な妥協をするな」ということが言いたかったのかもかもしれない。学園紛争が終焉に向かい始めた時に現れてきた様々な妥協的・偽善的な動きに反発していた五十嵐君は、「衣の下に鎧を隠す」ような「民青」のやり方を嫌い、表裏のない「全共闘」のほうに共感していた。ノンポリであるが故に政治的な過激派以上にラジカル（根源的）たらんとするのが五十嵐君の立ち位置だったのだらう。

学園紛争の時代の五十嵐君の話は、シェークスピアよりもソクラテス、プラトン、アリストテレスのギリシャ哲学であり、ホメーロスの叙事詩の世界が中心となっていた。彼は、翻訳や近代語訳を介さずに、所々ギリシャ語原文を引用しつつ、自分自身の言葉で独特のホメーロス解釈、プラトン解釈を語ってくれたものである。

卒業が近くなつた頃、五十嵐君と私、そしてのちに筑波大学で教

学教授となられた木村達夫君の三人で、数学科の伊藤清三先生―ルベグ積分についての先生の書かれた教科書は今でも使われている―のご自宅で、ご馳走になったことがあった。そのとき、木村君が披露したベートーベンの「月光ソナタ」のピアノ演奏とともに、五十嵐君のホメーロス、とくに「イーリアス」の冒頭部分のギリシャ語による朗唱がきわだつて記憶に残っている。木村君が合気道の達人であることは知っていたが、まさかピアノが弾けるとは思っていなかったもので、その文武両道ぶりに驚いたわけだが、五十嵐君の「イーリアス」の朗唱もそれにおとらず素晴らしく、まるで平家物語を物語る琵琶法師の物語を聴いているかのような感があった。 *Kyrie Phair* の *Homeric Greek* を入手して、遅ればせながら私がギリシャ語の学習を始めるようになったのは、全く五十嵐君の影響であった。

ギリシャ語の詩の世界の音韻の美しさもさることながら、プラトンの美学についての五十嵐君の独特の解釈にも大いに惹かれた。プラトンはソクラテスを主人公とする作品を書くことによって、「善のアイデア」に向かう自己自身の人生を作品化したのだというのだ。その考え方にもとづいて、「神の友」となったプラトンについて五十嵐君は情熱を込めて語ってくれた。それはプラトン解釈という次元を超えて、各人が作者にして主人公に外ならない自己自身の人生を主題として書く文藝制作の作法（エクリチュール）の機微に触れるものだと思つたものである。

五十嵐君も私も、『国家』の有名な「洞窟の譬喩」や、詩人追放論をどう解釈すべきかという問題に関心があった。ミメーシス（創作的模倣）の達人でもあったプラトンがなぜ詩人のミメーシスを批判したのか？ 国家のアイデア論では、常識人が現実だと思つている世界

は、真実在の「影」ないし「模造」である。詩人追放論では、詩人は、そのような感性的な現実の模倣をことし、「模造」の「模造」を語るが故に、真実から二重に遠ざかるがゆえに追放されるべきだとプラトンが非難しているように見える。しかし、五十嵐君は、そういうのは皮相な解釈だと言っていたように記憶している。「影の影」であっても、下手な詩人の通俗的な仕方ではなく、イデアそのものを影現させ、読者に如実にそれを直観させる新しい語り方、あるいは書き方をプラトンが発見したと言ったのだろうか。

五十嵐君がなぜ数学科に進学されたのか、ご本人から聞いたことはなかったが、私の場合は非常に単純で、小林秀雄と岡潔の対談『人間の建設』を通じて、数学に関心を持ったからであった。リーマン全集、芭蕉の俳諧、道元禅師の正法眼蔵、そして浄土宗の改革者であった山崎弁栄の「無辺光」を座右の書としていた岡潔に、私は惹かれた。岡の「数学」は、単なる理性を超えた人間の心(情緒ないし霊性的自覚)に根ざしており、それがそのまま文藝と芸術と宗教の世界に通底していたことが一番の魅力だったからである。

理学部数学科を卒業後、五十嵐君は本郷の文学研究科の大学院で美学を専攻され、私のほうは、当時駒場に新設されたばかりの科学史・科学基礎論の大学院で、「科学哲学」を専攻したので、直接的な交流の機会はすくなくなつた。ただし、駒場の伊東俊太郎先生の「テイマイオス」演習には、五十嵐君も参加されたので、このプラトンの後期対話篇を共に読むことができた。語学に天賦の才をもつていた五十嵐君とはちがって、「テイマイオス」のギリシャ語は私には難解であったが、数学科出身の我々にとってこの対話篇は、大いに知的想像力を刺激するものであった。五十嵐君も私も、数学を独自の

記号言語を駆使して書かれた一種の詩と考える点で共通していた。当時の英米哲学で流行していた論理実証主義や分析哲学の論理は、数学科出身の我々から見ればせいぜい初等数学のレベルであり、そんなものには魅力は感じなかったのである。分析的論理ではなく想像力こそ数学の生命であり、それも事実を再生する二次的な想像力ではなく、新たな作品を制作する原初的な想像力が数学という営みを支えており、それはプラトンの「テイマイオス」のようなコスモロジーに直結するのである。

私がホワイトヘッドとプラトンの研究に没頭しはじめた頃、五十嵐君はギリシャ語やラテン語の世界だけではあきたらなくなり、日本の哲学者達が無意識のうちに前提している西欧中心的な価値観を相対化するためだったのか、次第にイスラム研究に傾倒するようになった。

大学院修了後、五十嵐君は井筒俊彦先生の推挽でイラン王立アカデミーに留学され、医学・哲学からイスラムの神秘思想に至るまで幅広い学際的研究を継続された。イランで革命が勃発し王制が倒れた後で帰国したが、イスラム革命についての一般向けの啓蒙書を書く傍ら、イブン・スィーナーの『医事典範』の翻訳書、『知の連鎖―イスラムとギリシャの饗宴―イスラーム・ルネッサンス』などを立て続けに出版し、私のもとにも贈ってくれた。それらの書物は、伊東俊太郎先生のアラビア科学史研究、井筒俊彦先生のイスラム神秘主義研究、井上忠先生のパルメニデス研究などの影響もたしかに認められたが、そういったあらゆる要素が統合されて、まさに五十嵐君でなければ書けない独創的な知的刺激にうち満ちた本となつていった。

五十嵐君から頂いた本の中で、私が最も好きな本は『神秘主義のエクリチュール』である。「桃李歌壇」という和歌と連歌の結社をWEB上に創設した私もまた、彼と同じように道元の著作と良寛の和歌や漢詩に関心を持っていたからである。

道元の『典座教訓』に収録されている阿育王山の老典座との対話、良寛と貞心尼の相聞歌についての五十嵐君の解釈は、イスラム神秘主義の文献を参照しつつ、文字とは何か、修行とは何か、についての宗教の違いを超えた本物の神秘主義の著作のエクリチュール（文体、書法のエッセンス）を論じていた。

五十嵐君は、日常性を離れた特殊な少数の人にしかな体験できない場所に神秘主義を見いだすのではなく、万人が経験しているはずの日常性のただなかにこそ本物の神秘があると信じているように思う。学術の蘊奥を極めることは神秘主義とは無関係であり、宗教的エリートにのみ許された秘密の奥義の伝授などは「徧界曾て隠さず」と喝破した老典座の境涯とは無縁であり、「文字とは何か」と問われるならば、「一三四五」のごとき幼児の初心に立ち返る学道にこそ凡てであるという簡明にして肺腑をえぐるような言葉がそこにあつた。そこで、『神秘主義のエクリチュール』で引用されている良寛の歌を五十嵐君に捧げて、この思い出の結びとしたい。

それは、

君にかくあひ見ることのうれしさもまださめやらぬ夢かと思

ふ

という貞心尼の歌に対する良寛の返歌

夢の世にかつまどろみて夢をまた語るも夢もそれがまにまにである。

五十嵐君は同書の中で、この歌を

沫雪みちあふちの中に立ちたる三千世界みちあふち またその中に沫雪ぞ降る

という良寛の歌と対比させて論じた歌人上田三四二氏の解釈を長文に亘って引用している。

上田氏の解釈については、五十嵐君はその精緻さに感嘆しつつも、それは「超高級形而上学」の解釈になっていると批判を加えている。この箇所は『神秘主義のエクリチュール』のなかでも特に興味深いところであるが、空間及び時間の中に無限包摂の「入れ籠構造」を見る上田氏に対して、五十嵐君は、主客の相互溶解、相互浸透という直接経験を重視されたようである。それは、「三千世界」を「一念三千」を説く天台宗の教学などと関係づけずに、「みちあふち」という「やわらかい」訓読を重視する読み方に関係している。五十嵐君に由れば「みち」は「道」であり「あふち」は「お家」である。要は、仏教的解釈よりも、「道」と「家」とそれを見る「私」が雪の中で相互溶解し相互浸透する直接経験の事実を重んじたのだろう。ここで「沫雪」を上田氏とは違って「牡丹雪」ではなく「粉雪」だと指摘しているところも面白かった。

「蓮の露」の相聞歌については、五十嵐君自身は、「貞心尼のひたむきな情熱を前にして）いささか良寛が照れているのが良い」という以上には言わなかったが、「夢の中で夢を語る」ことは、今、五十嵐君の思い出を語る私自身の心境に何か合致する者があることを感じている。

私も、五十嵐君と同様に、上田三四二氏の歌の釈義には多くの点で共感するけれども、良寛が「夢の中に夢を見る」という場合、「夢

の中の夢、その夢の中の夢、……」というような「入れ籠構造」は無
いと思う。

道元の『正法眼蔵』に「夢中説夢」という巻があるが、ここでは、
われわれが堅固な実在だと思っている世界が、じつは夢の如きはか
なき虚仮の世界であり、真の仏法の世界は、虚仮の世界の住人から
見ると逆に「夢」のごとく見えるという趣旨の言葉がある。

プラトンの「洞窟の譬喩」の如く、顛倒世界においては、真実在を
説くものは役に立たない夢想家と見なされるが、道元は、むしろ「夢
の中で夢を説く」ことの意義を理解しなければ、仏道はわからない
と明言している。おそらく、影の影、夢の夢を如実に語るといふ詩
人の行為のなかに、真実在の影現を見ることができるといふ読み方
をするならば、良寛の返歌も、「夢の中で夢を語る」ことの大切さを
さりげなく示した歌と言って良いであろう。

谷 隆一郎

(九州大学名誉教授)

「偉才・五十嵐一さんを偲ぶ」

畏友五十嵐一さんが不条理極まる死で早世してから、早や四半世
紀余り経った。その間、折に触れて彼の類い稀な人生の足跡を思い
起こしては、その晴朗で自信あふれる面影を偲んできた。そこで今
回、求めに応じて、学生時代からの懐かしい思い出を少しく綴って、

責めを塞ぐことにしたい。

五十嵐さんとはじめて出会ったのは、われわれが人文科学系の大
学院に入って間もない頃であった。彼は理学部数学科を出て、何と
その年に大学院の美学芸術学科に入っていた。(実は筆者も、学科は
違いが工学部の化学系からの転向組である。)

その夏、共通の友人に誘われて、信州の地で世捨人のような修道
生活を送っていた押田成人という神父さんの庵を訪ね、数日間過ご
したことがある。五十嵐さんも参加していた。宮本久雄さんと出会
ったのも、そのときのことである。ここでは、押田神父の何やら含
蓄ある話を聞いたり、座禅の模倣ごと(?!?)をしたり、はてまた小
さな田んぼの畦道作りの「お働き」をさせられたりした。五十嵐さ
んは、そんなことは余り性分に合わならしく、早めに東京に帰っ
たように思う。

それから三年も後のことだが、ふと思いが重なって、別の友人と
三人でトマス・アクイナスの『真理論』を原文でしばらく読んだこ
とがある。あるとき五十嵐さんが、「今日はぼくが話をします」と買
って出てくれた。「存在の類比」というトマス特有の論点に話題が及
んでいたのである。そのとき、思いがけずホメロスの『イリア
ース』という作品の中に類比(アナロギア)の顕著な表現が見出せ
るといふ。五十嵐さんは黒板を背にして、飛び上がらなばかりに熱
心に蘊蓄を傾けて講義してくれたわけである。以前から、彼の神童
振り(たとえば高校のとき全国模試で連続トップだったとかいう
ような)間接的に耳にしていたが、そのとき改めて彼の天稟の一端
を目の当たりにした感があった。

またあるときは、本郷の小さな居酒屋で、美空ひばりをはじめ沢山の歌謡曲を披露してくれた。これがまたばかに旨く、それぞれの歌手の見事な物真似で、店の親爺さんも呆気に取られていたようだ。しかも歌詞をちゃんと三番まで語んじていたのだから、畏れ入るひとときであった。生来の音感のよさと抜群の記憶力は、語学の天才たるゆえんでもあるう。

その後、五十嵐さんはギリシア・ラテンだけでは物足りなくなつたのであるうか、イスラームの思想・哲学の探究に乗り出し、一体幾つの言語をもにしたのか分からぬほど異才振りを発揮しはじめた。そしてほどなくして、今道友信、井筒俊彦という両先生の推薦で、当時のイラン王立アカデミーの客員として留学したが、これはよく知られているところであろう。

さぞ優雅な学生生活かと思つてみると、あるとき長い手紙をよこしてくれて、地下室のような部屋で設備も悪く、随分苦勞させられているとのこと。また、しばらくするとイラン革命なるものが勃発して、銃弾の飛び交う騒然たる状況を尻目に日々を送つたようだ。しかしそんな中にも、彼は持ち前の度量の大きさと、どんな経験もすべて己自身の飛躍と深化の糧としていったように思う。実際、およそ天才というものは、外なる状況にも身分や経歴などにも左右されず、パウロの言を借りれば、「神を愛する者にとつては、すべてのこと相働きて益（ないし善きもの）となる」のであるう。

ところで、福岡のわたしの書齋には、五十嵐一コーナーがあり、折にふれて送つてくれた彼の書物が並んでいる。学術書はもちろん、一般向けの面白く痛快なものもある。それらの中には、イランから

帰国後何年間か、ジャーナリズムにも関わりつつ筆一本で生活していた頃の著作も多い。いずれも驚くべき学識のゆたかさの上に興趣ある筆致で記されており、多方面の才能が躍如している。たとえば、『イラン体験』『音楽の風土』、そして絶筆となつてしまった『神秘主義のエクリチュール』など、珠玉の作品であろう。他方、五十嵐さんは自ら宗教劇のような演劇を創作し、あちこちで上演していたうだ。そちらの方は、わたしはあいにく出席できず、送つてくれた冊子で彼の活躍振りを想像するだけであつた。だが、何ごとにも百二〇パーセントの力を傾注するとの言は、かつて彼自身の口から聞いたような気がする。

ともあれ時を遡つて、五十嵐夫人はかつて「駒場の現代娘」と呼ばれていたようだ。たしかに、初めてお会いしたとき、インドの遊行者のような装いで現れた。それ位の女性でなければ、万能の夫を多少なりとも手なづけることはできないであろう。あるとき、大田区の御自宅に家内とともに招かれて御馳走になつたこともある。二階の相当広い部屋だが、居間も書齋も台所もすべて兼ねていて、なかなか風格のある「多様な一」という空間となつていた。食後の洗いものは「だんな」の担当のよう、いそいそと自分の分・わざをこなしており、妙に呼吸の合つた夫婦という印象であつた。

さて、五十嵐さんの多方面での華々しい歩みについては、わたしは遠方から感心して見守るという風であつた。ただ、ここでは、五十嵐さんが山口大学に集中講義で来た時の思い出を少し記しておこう。それは、わたしが九州大学に赴任して数年経つたときのことである。五十嵐さんが来るというので、私も三日ほど山口に泊まつて、

彼の講義を聞いたのだ。昼休みはたっぷり二時間くらい取って、二人で市内のフランス料理店などに出かけた。ワインも結構飲んで、あれこれ歓談したわけである。午後からの講義は、五十嵐さんはほんのりと酔い、目をつぶって語るのだが、すこぶる良質の神秘主義の話であった。それは、東西の大物のうちスフラワルディーやルーミー、荘子や果ては良寛など、最上のワインに比すべき内容で、すでに大家の風貌が漂っていた。その講義は、しばらくして『神秘主義のエクリチュール』という見事な作品となって世に出ている。

山口での談笑の際であったか、五十嵐さんは、『預言者の系譜』という大著をすでに頭の中ではできている、などと漏らしていた。そんな言い草は、ふつうなら意に介さないとところだが、彼の場合は「さもありません」と妙に信じられたのである。その書をはじめとして、可能性の域に留まった多くの書を現に見ることができなかったのは、まことに無念で哀しい。

しかし、時間とは単なる量でも長さでもなく、「精神の拡がりない志向だ」という（アウグスティヌス『告白』第十一卷）。してみれば、神童（！）五十嵐一の生涯は、恐らく神の眼差しにおいては、一つの完結した、栄えある意味を与えられているであろう。

そこで最後に、このところわたしの志している証聖者マクシモス（七世紀、東方教父の伝統の集大成者）の著作から一つ言葉を引いて、結びに代えたいと思う。

「高いロゴスは、あらゆる種類のかたち（形相）で遊ぶ。欲するままに、あれこれの世界を区別して完成しつつ。・・・われわれの生は東の間のものであり、地上の遊びである。・・・しかし神は、これら

のこを通して、われわれを真に在るもの、決して移りゆかぬものへと導くのである。」（『難問集』東方教父の伝統の精華）

中尾 太郎・桂子

（出光興産、台北、テヘラン、北京に駐在。

元出光美術館館長代理）

「五十嵐一先生を偲ぶ」

イラン王立アカデミー招待研究員でテヘランに居られた先生に、私どもの子供を含むテヘラン日本人学校の生徒たちが、学校近くの私どもの家に放課後集まり先生に補修学習のご指導をいただいたことがありました（一九七五、七八年頃）。気さくにお引き受けいただいたので特別な思いもなくお願いしてしまっていました。が、今思えば五十嵐一先生に小学生の勉強を見ていただくという子供達も親たちにも、誠に贅沢なもつたいたいな貴重なご縁を戴いていたのです。それと気がついたのは、後々で、多くの貴重な研究成果をあげられていることを門外漢の私どもも知ることになってからでした。駐在を機に中東やイスラームを少しは理解したいと井筒俊彦の文庫本を拾い読みし俄か勉強を試みたことがありますが、先生がこの高名な学者の愛弟子であることを知らぬまま家庭教師・補習授業まがいのことをお願いするという厚かましくも身の程知らずのお願いをしていたのでした。恥じ入るばかりです。

休日、ホームパーティーなどの席では先生の楽しいお人柄を拝見できました。たとえば、歌がお上手で、クラシックやポップス、歌曲、童話、演歌、民謡、歌謡曲など多彩で、持ち歌一〇〇〇曲を下らずとのことに驚いたものでした。

任期を終え私どもは先生より一足早く帰国しましたが、テヘラン日本人会合唱団の指導を先生に引き受けていただいたことも思い出します。そしてテヘランは間もなくホメイニ革命の嵐が吹き荒れることになり、先生にはこの後始末をお願いする結果になりました。

帰国後、筑波大学のほかに玉川大学にも講座を持たれていたころ、先生ご自身の創作ミュージカル劇の発表会に御案内いただいたことがありました。想像を超えたプログラムに驚きましたが、舞台には学生たちを実に楽しそうに指揮される元気なお姿があつて、これは別世界のものだと特別な思いで異次元の先生を拝見したことを思い出します。

中東・イスラーム比較文化論に限らず日本のエネルギー問題などに及ぶ広く多彩な提言は、いよいよこれからが本番だと期待されるなかでのこと、難問山積の昨今、もし先生が今尚お在りならばと思ふと惜しまれてなりません。

中嶋 廣

(前トランスビュー社長)

「あのころ、五十嵐一先生と」

五十嵐一先生と初めてお会いしたのは、一九八八年の五月頃のことだ。

そのころ私は、法蔵館という京都に本社のある出版社の、東京事務所で、『季刊仏教』という雑誌を作っていた。その第四号（七月刊）に「世界の宗教は、いま」という小特集があり、そこに寄稿をお願いしたのだ。

五十嵐先生はホメイニ師を中心とする、イランの宗教革命を論じてくださった。そのタイトルは「シルクロードに掛ける橋―イラン・イラク、革命と戦争に潜む宗教的知恵―」だった。

ネットのない時代なので、原稿は雅叙園の傍の喫茶店でいただいた。そのとき図版用に、ホメイニ師の幟旗をお借りしたが、それを持って電車に乗ったところ、満員で、幟旗の柄の部分がポキリと折れてしまった。

図版を返しに行くとき、そのことを詫びると、先生は、宗教革命の前途多難さを暗示しているなあ、と笑っておられた。

何度かお会いするうちに、私は、先生の軽やかな知性に魅了された。東大の学部時代は数学を専攻し、東大院生の時代は宗教学をやるという、その知性の大胆な転換に度胆を抜かれた。しかもそれを、さも当たり前であるかのように、なんでもないこととしてお話になる。私はこの人の本を作りたいと願った。

そうしてまず『神秘主義のエクリチュール』が出来上がった。この序章に、五十嵐先生の学問的自叙伝が、コンパクトにまとめられている。

この本は書き下ろしなので、先生とは何度も会った。昼は喫茶店だが、夜は食事、そして酒になる。あるとき、新宿御苑の近くの中

国料理の店で、マダムがメニューをもつてくると、先生は、中国は広東地方の言葉で談笑され、あたかもマダムと旧知の間柄という雰囲気だった。しかしもちろん、初めてはいる店である。結局、マダムはメニューなしで、次々と品書きのない品を出してきた。

『神秘主義のエクリチュール』は、半年ほどして重版した。

その次が、賛否を呼んだ『イスラーム・ラディカリズム』である。この本は、装丁家の高麗隆彦さんが、絶対に売れる、評判になると言って、金を地色に、例のホメイニーの幟旗をあしらった、力の入った装丁をしてくださった。

その次をどうするか、というところで、突然終幕が襲ってきた。

私はそれからおよそ一〇年、法蔵館にいて、そしてトランスビューを作った。トランスビューで仕事をしながら、もし五十嵐先生が生きておられたら、先生の時代が来ていたのに、と何度も思い返していた。

濱田 由美子

「優しかった一ちゃん」

私の母と一さんの母は従姉妹同士なので 私と一さんとはハトコという関係になります。

私は一さんとあまりお話ししたことがないのでが 母からは一さんのことはよく聞いていたので（九〇歳の母は今も記憶も定か

なく、もう聞けません） この追悼文集には場違いかもしれませんが少し書かせて頂きました。母は一さんのことを「一（ひとし）ちゃん」と呼んでいましたので以下、一ちゃんとします。

一ちゃんの祖父が私の祖父の兄です。共に新潟市（元は佐渡出身）在住でした。一ちゃんの母（以下祥ちゃん）と私の母はそれぞれ男兄弟の一人女の子で、子どもの頃は姉妹の様にとても仲良くしていたそうです。祥ちゃんはお兄さんの北大の友達五十嵐さんと結婚し、一ちゃんを産みました。しかし、五十嵐さんは農林省勤めで各地を転勤し（網走にも赴任したそうです）、祥ちゃんも病弱だったため、そのうちにいちいち転勤先に一ちゃんを連れて行くのも忍びなく、一ちゃんを新潟の祖父母に預けて転勤したと聞いています。一ちゃんは教師だった祖父に厳しく育てられ、学業優秀で祖母自慢の孫でした。一方祖母は大変に可愛がったようです。

五十嵐さんと祥ちゃんは定年後東京に家を買って、祖父が亡くなった後、祖母を引き取りました。私の祖父の十年祭の時（私の祖父母も定年後、娘一家の住む東京に上京しました）、一ちゃんが祖母に付き添って献身的にお世話していたのを覚えています。また、その後一ちゃんは 息子の中君をひよいと抱っこして、時々祖母に見せに連れてきたと聞いています。一ちゃんは祖父母や両親に温かく育てられとても優しい方でした。

一ちゃんは忙しい中、子どもの学校の父親の会にも積極的に参加し、父親同士の親睦にも努めていました。とても愛情深い方だったと思っています。

思いがけない訃報にただただ悲しく、お子様方へもどんなにか心配りだったかと思えます。

以上ささやかですが母から聞いたエピソードなどを書かせて頂きました。

松山 直樹

(会社員 九一年三月筑波大学第二学群比較文化学類卒)

「五十嵐先生との思い出」

先生との出会いは、おそらく一九八八年、大学二年の頃だったと思います。わたしは第一学群人文学類に入学したのですが、どうにも合わず、二年目から比較文化学類(通称・比文)に転学したばかりでした。

比文には、自分にとってユニークな授業がたくさんありました。どんな授業をとうるか情報収集しているなかで「五十嵐先生は面白い授業をするらしい」という噂をキャッチ。どうせ単位を重ねるなら面白い講義に限る。そんな他愛もないきっかけでとった授業でした。

履修した学生は二〇人前後でしょうか。小さな教室で、確か授業タイトルは「言語哲学」。一般教養のクラスだったと思います。話題は古代ギリシャ哲学からフランスの記号論(ソシュール)、日本の良寛、イスラム医学のイブンシーナー、ペルシャ語のアレフバー(アルファベット)まで幅広い。まさにリベラルアーツ。古今東西の世

界教養入門、といった趣でした。時折、有名人の声マネ、物まねで学生を笑わせ、難解な授業をふつとなごませることも上手でした。初めて触れる話ばかりでわからないなりに、文明全体を自在に語る不思議な魅力があり、なぜか足が遠のかずに通い続けました。

次第に授業後も居残って先生と雑談を交わす学生も増えていきます。ふたつのサークルとバイトに夢中な私にはとても無理でしたが。何人かは本格的に先生に弟子入りしたようで、古代ギリシャ哲学の原文読解に挑戦したりしていました。

先生は学生と親しく議論するのが好きだったのだと思います。時折、大学に近い、天久保三丁目あたりの居酒屋に学生らを連れ出し、議論の続きをしていました。私も何度かついて行った覚えがあります。どんなことを語り合ったのか思い出せませんが、先生は老酒(ラオチュー)が好きで、よく注文していたことだけはなぜか鮮明に覚えています。

五十嵐先生の授業は面白いという評判はさらに広まったのか、翌年の講義は、キャンパスで一番新しく一番広い大講堂で行われるようになりました。大橋巨泉だったか竹村健一だったか、得意の物まね、声帯模写が大受け。爆笑の連続で、満場の学生たちは先生の講義、いやトークに酔いしれました。当時、文系の授業は、最初は満員でも週を追うごとに履修者が減ることが多かった気がしますが、先生の授業は別格。ずっと超満員が続いた気がします。その頃は、代ゼミや駿台、河合塾といった大学予備校が全盛の時代。予備校の名物講師をほうふつとさせる人気ぶりでした。

先生の人気は教室の枠を飛び出します。秋の学園祭「双峰祭」ではキャンパス中央の池に水上ステージを組み、サークルやバンドが

音楽やダンスを披露するのですが、先生はみずからバンドを率いて出演しました。たしかサングラスに白い上下のプレスリー風の衣装（ベルボトム風のシルエット）を着て、ビートルズかサザンの曲などを熱唱。学生らの度肝をぬきました。

先生は学生をさそってイスラム文化にもとづく劇団、舞踏、パフォーマンスグループを主宰し、何度か公演をしていたと思います。学園祭での活躍はその延長のようでした。

私は当時、筑波大学新聞という学生主体の新聞部と、バリ島のケチャをはじめ国内外の民族音楽に取り組む芸能山城組を掛け持ちしていました。文字言語による表現にも興味がありました。非言語コミュニケーション、身体によるパフォーマンスにも興味があったのです。五十嵐先生も、古今東西の学問を修めておきながら、なおも身体表現にチャレンジしておられるように私には映りました。先生に及ぶべくもありませんが、同じような方向性を持っているようで、勝手に親しみを感じていました。先に山城組に入っていなければ、私も間違いなく先生の強い魅力に引き込まれ、先生の門下生の輪に入っていただろうと思います。

キャンパスの外でも大活躍しておられました。授業中だったか、「このまえ、首相官邸に呼ばれてさ」と漏らしていたことがありました。時は海部内閣。湾岸戦争にからみ、ペルシヤ湾の機雷の掃海作業に自衛隊を出すかどうかで世論が割れていたころ。中東専門家として意見を求められたのだと思います。いなかののんびり学生としては、国際的な時事問題の最前線にからむ先生の話はとても刺激的でした。

卒論の季節になりました。わが学類は、主指導一名、副指導二名

の教員をみつけねばなりませんでした。いま思えば赤面するしかありませんが、生意気盛りの当時は、分子生物学やエントロピーの法則など科学的な知見もまじえつつ、近代文明の衰退に警鐘を鳴らすようなものが書けないかと夢想しており、そんなろくでもない卒論構想を相手にしてくれる先生はなかなかいませんでした。主指導の先生は何とかなったのですが、副指導の先生がみつかりません。しかし、五十嵐先生に相談すると、「文明論か。君はなかなか面白いことを考えてるんだネ」とばかり、副指導の欄にサインをくださいました。何度か書き直しては読んでもらい、修正をいただいたと思います。

先生が、サルマン・ラシュディ著「悪魔の詩」を翻訳出版したのは一九九〇年。海外でも翻訳者が襲撃される事件があり、きつともろもろの対応でお忙しかったにもかかわらず、我々学生を熱心にご指導くださいました。都内にお住まいで、筑波まで高速バスで通勤しておられたかと思えます。あるとき、つくばセンタービルから学内までの循環バスで偶然乗り合わせたことがありました。騒動の渦中にもかかわらず、しつかり前を向いて泰然自若とされていた姿を思い出します。

おかげで卒論は満足のいくものに仕上がりました。一九九一年三月、卒業し筑波をあとにしました。社会人生活は、ずっとあこがれていた新聞記者として社会人生活を始めました（文字言語コミュニケーションを生業に選択したことになります）。

赴任先は横浜。新人はいわゆるサツまわりの事件記者ですが、ほどなくして社が主催する、夏の高校野球の季節がやってきます。

七月一二日、運命の日。わたしは神奈川県大会の開会式の取材で

横浜球場の記者室に詰めていました。球児たちが行進するなか、記者室の片隅に立っていると、記者室のテレビに速報テロップが流れました。「筑波大学の五十嵐一助教授、学内で殺害」。そんな文字だったと思います。

目を疑いましたし、たしか、力が抜けてその場にしゃがみこんだと思います。卒業から半年もたっていません。あのキャンパスで、笑顔で送り出してくれた五十嵐先生が何者かに襲われ命を絶たれた。なぜ……。球児の取材どころではありませんでした。その時の衝撃を思い出すと、いまも身が固くなります。

上司に相談し、都内でのお通夜に参列しました。沈痛な表情の雅子先生、残された小さなお子様たち。急に人生を絶たれた先生とご家族の無念を思うと、犯人に対する憤りを覚えました。まだ駆け出しの記者ながら、取材を尽くして犯人を探し出したいとひそかに誓ったものです。

いささか個人的な話に脱線します。五十嵐先生の事件当時は、まだ記者になって数カ月。すでに何件かの事件取材を体験してはいましたが、この新米記者にとって、ジャーナリズム、取材という行為に潜むむごさといったものを教えてくれるものだったと、振り返ることができません。

つまり、事件を機に、突如として「五十嵐先生の教え子のひとり」としてマスコミの取材を受ける立場を体験したのです。この逆転は、新人記者にとってなかなかキツイものでした。

例えば事件から数日後、水戸に配属になった同期の記者からいきなり電話を受けました。彼は茨城県警を担当する、私と同じ事件記者でした。電話口で、先生の人柄や、何か人に恨みを買うような言

動はあったかとか、同級生の連絡先を教えてください、などと単刀直入に聞かれました。教え子のひとりとして、かなりのショックを受け、被害者側の感情そのものでしたから、記者というのは失礼なことを平気で聞くものだなと正直不快に感じ、特に取材ネタになるようなことは伝えなかった記憶があります。

しかし、私も水戸の同期の記者も同じ事件記者です。彼にしてみれば同期なのに冷たいやつだ思ったでしょう。逆の立場なら私もきっと失礼を顧みず、同じような心ない質問をしていたかもしれせん。世の中に事実を伝えるためなら、たとえ被害者の関係者に悪態をつかれようと、記者は何にでも肉薄すべきでしょう。頭ではわかっていますが、それでも取材という行為は、時として取材を受ける側を傷つけずには済まないことを、身をもって経験してしまいました。

こうした葛藤を、秋になって県版の小さなコラムに書かせてもらいました。当時のデスクには「記者なら、心を鬼にして被害者の家族の話を聞くのは当たり前だし、同僚にヒントを教えるのはもっと当たり前だ」と説教をくれました。ボツになりかけましたが、なぜか最後はそのまま載せてくれました。

マスコミによるセカンドレイプといった言葉はない時代でした。世の中に出ると答えのない問題があると言われますが、私にとっての五十嵐事件は、社会人に出て初めて直面した、解のない問題でした。いまもそう簡単に答えの出ない問題として、心のどこかにわだかまっています。

話を元に戻します。

事件の前後の脈絡から、先生の事件は、「悪魔の詩」翻訳に絡むテ

ロリズムだとの見方が根強くあるのは周知の通りです。そのとおりであれば、これは学問の自由、言論の自由という私たちの社会基盤を揺るがす脅威です。私が勤めてきた朝日新聞社でも、先生の事件に先立つ一九八七年五月三日、阪神支局が襲撃され記者二人が殺傷されました。赤報隊を名乗るグループが犯行声明を出しますが、先生の事件と同じように、犯人は闇に消え、事件は解明されませんが、その後、時効を迎えています。報道機関を狙った言論テロであるのは明らかです。

振り返れば、まったく別の事件とはいえ、二つの事件は、たった四年しか離れていなかったわけです。そうした意味で、五十嵐先生も事件も、わたしのなかで、決して忘れられない、忘れてはいけない出来事として生き続けています。

その後、五十嵐先生の事件は、捜査が進展しないまま、長い膠着状態に入りました。記者としての私にできることは、事件を風化させないことや、先生の学問的な業績を自分なりにとらえなおすことでした。

偶然にも、先生の生まれ育った新潟市で勤務する機会に恵まれました。二〇〇四年の頃です。選んだアパートは奇しくも新潟高校のそばでしたし、先生の足跡をたどろうと高校の同窓会に問い合わせたこともありました。ですが、中越地震や拉致事件の展開などに忙殺され、芳しい成果につなげられなかったことが悔やまれます。

五十嵐先生の事件もついに時効を迎える二〇〇六年ごろ、編集部門を離れていましたが、夕刊の社会面で事件の真相や意味を振り返る連載があり、連載の取材陣に特別に加えてもらうことができました。雅子先生にも惜しみないご協力をいただきました。

残念ながら、言論へのテロは、その後もたびたび起きているのは周知のとおりです。一五年一月にはパリで風刺新聞社「シャルリーエブド」が狂信的なイスラム原理主義者らによる武装テロにより二人が死亡。直後にリュブパブリック広場を中心に、民衆による追悼の行進があり、世界に広がりました。国内でも今年六月末、著名なブロガーが刺殺されるという痛ましい事件が起きたばかりですし、アメリカでも、首都ワシントン近郊アナポリスの地方紙が襲撃され、記者ら五人が殺傷されました。言論に対する暴力はまだ続いており、私たちの住む世界は、五十嵐先生の事件の頃と本質的には何も進歩していないのではないかと、思わざるを得ません。

振り返って、私にとつて五十嵐先生とは何者だったのでしょうか。

よく先輩記者から「難しい事象をわかりやすく書いてこそ記者だぞ」と教え込まれました。それが文章のプロフェッショナルだと。おそらく学者も同じで、難解な事象を平易に語れるのが真の学者でありましょう。その意味でも先生は間違いなく超一流の真の学者でした。文理の別なく古今東西の学問を自分のものとして咀嚼していればこそ、縦横無尽、軽妙に語れたのでしょうか。

あのまま活躍を続けておられたら、多数の著作を出す一方で、メディアでもひっぱりだこの超一流の文化人・学者・評論家・コメンテーターになっていたのではないのでしょうか。

しかし残念なことに、先生はその後、この三〇年近く、人間世界の出来事を、ただただ天から見守ってくれているだけで何のコメントもくれません。ただ、その放つ輝きたるや一等星の比ではありません。筑波時代のほんの一瞬、先生の聲咳に触れただけの私の人生航路ですら、いまでも明るくはつきりと生きる方向を照らしてくれて

います。もし先生の輝きに触れなかつたら、学問への畏敬の念はもっと浅いものになっていったでしょうし、学問の自由、言論の自由に従容として殉じたとも言える先生の生きざま、事件をわたしなりの形で受け止めたことで、メディアの世界に身を置くことの意味、「言論の自由」に身を捧げる立場の何たるかを忘れずに記者生活を送ることができたと思います。

以上が、筑波大学における五十嵐先生と私の出会いと、その後の思いです。

筑波には、直接の門下生の皆様が大勢おられました。私などはその輪の外側にいた学生でしたから、思い出せることの価値などおのずと限りがあります。門下生が振り返る描写には及ぶべくもないことを、申し添えておきます。

かといって、門下生の方が当時のことを思い出して追悼文を書くことは容易ならざる辛い作業だろうとも推察します。輪の少し外側にいた私ですら、いまだに整理のついていない自分の心に向き合いながら文章にまとめるのはいささか辛い作業でした。愛弟子の皆さんであればなおのこと、心の整理などつけようがないに相違ありません。先生との思い出は、心の奥底に深く沈めたまま、何とか日々を静穏にやり過ごしておられるのではないかと想像します。

書くという行為が、どこかの誰かを必ず傷つけずにはおかないものだとしたら、どうか私の拙文が、先生に近い皆さまに受け入れてもらえるものであることを、お願いしかありません。

先生。天からみて、先生が生きておられたら成し遂げたであろう善なる世の中に、いまは少しでも近づいているでしょうか。あとに残された私や私たちが、少しでも世の中の善を増やす役に立ってい

たらよいのですが。

先生は、答えてはくれず、天からただただ、笑いかけて下さるのみです。

宮本 久雄

(東京純心大学教授、東京大学名誉教授、Magister Sacrae Theologiae)

「五十嵐一君と共に」

信州八ヶ岳山麓で初夏の頃、五十嵐君たちと一緒に押田成人神父から講義を受けた。押田師は本邦でのギリシア哲学の元祖出隆の薫陶を受け、故あってトマスやエックハルトなどを輩出したドミニコ修道会に入会し、当時山麓で農耕生活をしながら観想の共同体、高森草庵をいとなんでいた。講義は、カエターヌスの「名辞のアナログア」についてであり、ラテン語原本を皆手にしながら講義に魅了されたのである。五十嵐君もいつもと違い、熱心に聞き入っていたのを覚えている。

講義の内容はといえば、地上一本の花の開花には第一原因（神）から始めてあらゆる原因のエネルギーが集中しているというものがあった。一本の花、一人の人間、塩カラトンボの一匹、つまりあらゆる存在者は、そのように在らしめられたかけがえのない存在である。そして哲学・愛智というのは、日々出会う生きとしいけるもの、在

りとり在るものにその根拠である神の指を観想することだというのである。

われわれ学生は、田圃の草とりをしながら草の一本一本の不思議、神の指にふれようと一生懸命であった。

五十嵐君はその後本郷では美学に属して行き、なかなか同じゼミに出る機会はなかった。しかし、プラトンも言うように美 (Kalos) が呼び招く (Kalon) の意志をも体現しているのなら、彼は美の中に、神の指にふれて行ったのであろう。

その後、彼は私に声をかけた。というのは、某出版社で著名な東大医学者も含めた三人でフランス式「エンサイクロペディア」を編集する企画をもちかけてきたからである。フランス式エンサイクロペディアは、御承知の通り、一項目が一冊の小冊子になるくらいの大部の全集で、日本式の辞典や事典からとても想像できない知識の泉といえる。

この企画は出版社にとっては前代未聞の事業となろうし、五十嵐君でなければ発想・実現しえない智恵へのチャレンジであった。しかし、この企画は彼の余りに早い逝去と共に弊えたのである。

又彼の実現できなかった思想的構想の一つに、預言者論があった。イスラエル、イスラム、その他の宗教的伝統における預言者に関するメッセージ。彼はこのメッセージで世に何かを問おうとしたのであるうか。彼自身が預言者ともいえるのである以上、君は今日のわれわれと世に何を語ろうとするのか。

最後に私事で恐縮であるが、わたしが今構想している「ヘブライ的脱在論・エヒイエロギア」は、彼の辿った思想的道程と交差・共振するとこと大であると思ひ、深くその御霊に感謝をささげたい。

谷中 健治

「五十嵐一君を想う」

私達の小学校は一学年一〇〇名弱、自分の組か「隣の組」で中学校卒業まで一緒でした。五十嵐君の「他の誰とも違う」ところは六歳の児童でも感じるに時を要さなかつたと思います。

いろんな事を知っている。何でも出来てしまう等能力の話丈ではなく、**存在感**が違っていました。六〇余年前に子供の目や心に写った姿をそのまま思い出すのは難しいですが、感じ続けた畏敬の念の土台は、自然体で強圧的な処は皆無ながら、圧倒的な神秘の存在を感じさせられた事にあると思います。

大人びて居たとの言い方は余りに軽く不適切ですが、何事にも他人とは違った次元での対処を予期させる落ち着きと、精神の深さを持った佇まいが、真に *enigma* な人物である事を示していました。彼には、天才神話的逸話は必要ありません、一緒に中庭の動物や植物に世話を焼き、浜まで歩いて水泳の授業に出かけ、学芸会で劇を演じ、共に歩みながら *Super-natural* なものの存在と力を、日々自然に示してくれて居ました。

小学校の三年生か四年生の頃でした、学芸会で彼が唱った歌声と歌詞の響きが耳に蘇る気がします。オペラのアリアや難しい歌曲、

或いは小学唱歌等ではなく、美空ひばりの「港町十三番地」♪長
い旅路の 航海終えて 船が港に〜」でした。

性別、年齢や諸々のものを超越した彼でしか唱えなかった歌声でし
た。のど自慢で少年歌手が大人っぽく上手に歌うのとは、次元が全
く異質で、世相や時代を自分の中に包含した歌であったと言う表現
でお許し下さい。木造の古い講堂に響いた歌は、只々驚嘆の思いを
越え、父兄、先生方を含め、心に届く何かを感じさせたものではな
かったでしょうか。

高校はそれまでの五倍の規模で日々の触れ合いは遠くなったので
すが、二年生の時五十嵐君から声を掛けてもらい、数人でシェイク
スピアを読む機会を得ました。人間とは何かの 彼の講義を通じ
大きな命題を追う五十嵐君の精神の奥深い一端に、

「Hamlet's head in the city wall」
「What is Horatio there?」
の問いかけに対し「A piece of him」と本人が応えます。主題テー
マ、時代背景、世相等が一つ一つの台詞に凝縮して盛り込まれ、観
客に考えさせ、分らせるのが戯曲で、舞台劇の醍醐味はその読み解
きに在るのですが、五十嵐君はその楽しみに接する機会を与えてく
れたのです。さすがにシェイクスピアは難解でしたが、その後大学
で専攻外ながらキース、ワーズワース等に親しみ、亦社会人となり
海外での生活を一つの軸に過ごせたのも、言葉と生活、言語と文化
との緊密な関係の理解が如何に重要かという事に触れたからで、
五十嵐君に感謝の念で一杯です。

彼の人間への貢献を 限定した年月に留め、その後の実りの途が開
ざされてしまった事は 百万言を費やしても悔やみ切れません。

山野井 克典

(芳樹女学院情報国際専門学校元理事長)

「早過ぎるお別れ」

五十嵐先生が亡くなられてからすでに二十七年と聞き、歳月の流
れの速さに驚くばかりです。これから社会でますます活躍される
先生でしたので、いまだに痛惜に堪えません。

五十嵐先生との出会いは、昭和五十七年の春のことでした。当時
私は庭野平和財団(注)という財団で事務局長をしておりまし
た。この財団は広く宗教的見地から、平和に関する研究や活動に対し、
研究助成や活動助成等をしておりました。

その当時、社会で生命倫理の問題が話題となったこともあり、「生
命倫理と宗教」をテーマに四回シリーズの講座を開催することにな
ったのです。この時、研究員の一人から、若いけれども最適の講師
がいると推薦されたのが五十嵐先生でした。先生は、科学、文化、医
学、宗教など幅広い分野にわたって造詣が深いので是非にといい
ておりました。早速お願いしてみると快く引き受けていただいたので
す。この時の先生のテーマは「遺伝子工学と宗教」でした。生命科学の
先端の研究をしておられた中村桂子先生とお二人での講座でしたが、

参加者からは大変勉強になったと評価をいただいたのです。

このことがきっかけで庭野平和財団の研究員にも加わっていただき、研究会は一段と深みが増したのです。この研究会は特定の宗教によらず、各宗教の立場から論ずるもので、キリスト教、仏教、神道、イスラムなど広く宗教界から構成されている研究会はユニークなものでした。研究会での五十嵐先生の発表は、当然のごとく大きな示唆を与えるものでした。「イラン体験」や「イブン・スィナーの医学思想」などわくわくしながら聞かせていただいたものでした。

そのようなご多忙の先生でしたが、研究の間を縫って若い人たちと音楽活動にも積極的でした。このエネルギーな活動の源泉はどこからきているのでしょうか。

第二回の講座を先生のアドバイスをいただいて企画したいなど考えておりましたところ、先生のあの出来事でした。自失茫然、やりきれない喪失感でした。五十嵐先生よりいただいた多くの示唆は研究会にとって非常に貴重なものでした。五十嵐先生との早過ぎるお別れでした。

(注) 庭野平和財団 立正佼成会が創立四〇周年を記念し、記念事業の一つとして昭和五十四年に設立した財団法人。宗教的見地から平和活動をしている人に対する「庭野平和賞」の贈呈のほか、宗教的精神での研究や活動に対し、助成金の援助をしている財団。

山本 康一

(三省堂 辞書出版部／東京女子大学
非常勤講師)

「ことばに還る―『神秘主義のエクリチュール』からはじまる出会い」

五十嵐先生との出会いから二九年、突然の別れからは二七年。あらためて数えてみると、足掛け三年という、齢五〇の坂を越した当今からふり返れば実に短い期間に思えます。そして、それが短ければ短いほど、先生御不在の二七年間の長さ、足掛け三年間の濃密な時間とをそれぞれ意識せずにはいられません。

一九八九年は私が本郷に進学した年で、その四月に、「神秘主義のエクリチュール」と題されたイスラム学特殊講義が気になり、私自身は仏文だったので場違いかなと思いつつも出てみたのが先生との出会いのきっかけでした。五十嵐先生も、東大に非常勤で出講された最初の年であったと思います。

手元にある法蔵館刊行の同名の書籍をテキストに授業が進められたと記憶していましたが、今、奥付を見ると、一九八九年九月第一刷発行となっていますので、その日付どおりだとこの四月にはまだ出版されていなかったことになりました。もしかすると、プリントあるいは校正刷りを使ったのだったかもしれません。そして、この時はまだ、この出会いが、その後現在に至るまでどれほど私の人生に深く影響を与えるのかについては、当然のことながら思ってもみま

せんでした。

時々というか頻繁に、授業後のお声掛けで、構内にあつた学士開館分館のビアガーデンや本郷三丁目界隈の店で飲む機会をいただきましたが、そうこうするうちに私が多少バンド活動をやっていているということが知られてしまいました。相前後して、演劇(聖喜劇「エマーム」)を準備していて、そのスウィー役を募集中とのことで、久間泰賢君(現在、三重大学准教授)とともにその役を拝命することになります。この芝居の制作発表会を御茶ノ水のホテルの広間で行うとのことで、その際にぎやかにバンド演奏を行うが、ドラムをやるものがおらず、ついでには君はドラムも多少できるとのことなので、やりなさい、ということになりました。それからは芝居の稽古とバンド練習にいそむことになり、初めて筑波にも訪れ、スウィーの舞いの練習にベリダンスのスタジオに通うことになりました。筑波では、芝居の主役である松田智さんをはじめとして、伊藤庄一君ほか筑波の学生さんたちとも稽古をし、そして飲み会もしましたが、すべて先生のおごりであつたと思います。

このように先生とは授業よりはむしろ芝居と音楽という活動の方でのお付き合いがもつぱらであつたように思います。「エマーム」の後も、筑波大の学園祭、水上ステージでのバンド演奏(回想の会でよく流れるものです)にも参加を拝命し、今度はギターで出ます。つくばや土浦のスタジオ練習にも通いましたが、ある時、練習の合間にキーボードをバックに、ふと先生がドイツリートを歌われたのには、ロックのボーカルをやるより余程こちらの方が上手なのではないかと思つたことは未だに先生には秘密です。先生の方でも、ある時、私のバンドのライブが吉祥寺のライブハウスであることを

案内したところ、来ていただいたことが思い出されず。

またある時、水上ステージでのバンドの練習につくばに向かう時だつたと思います。当時はまだ、つくばエクスプレスなどなく、東京駅から高速バスでした。バスを待つっていると、ひよっこりと先生が現われ、ご一緒したことがあります。ちょうど湾岸戦争の時、政府関係の集まりに呼ばれて話をしてきた帰りだとのことでした。少々お疲れのご様子でしたが、その時にふと「僕はね、学者だけじゃ物足りないんだよ」というようなことを言われたことがあり、それが深く胸の底に残っています。

一九九一年の春は先生の講義は駒場に移つたこともあり、しばらく顔を出してなかつたのですが、七月になり、久しぶりに出たところ、レニー・クラヴィッツの来日コンサートがちょうどその日渋谷であり、授業の後に行く予定だが、チケットが余っているので行かないか、とのこと。当時人気が始めていた大物のコンサートということで喜んでチケットを頂戴しました。その際、「久しぶりだけど、君は引越した? 電話したけどつながらないんだが」とのお尋ねがあり、「変わっていませんが、変ですね」とお答えをしました。また、最近手帳を無くしたので、あらためて連絡先を教えてくださいとのことでした。「というのも、今年も水上ステージをやるから、今回はドラムでよろしくデビッド・ボウイをやるからまた連絡する」とのこと。コンサート会場では席が離れていたようで、先生には会えず、翌週、授業に出て、チケットの御礼と水上ステージの件を詳しく伺おうと駒場に向かおうとしていた矢先に、悲報を伝えるニュースに出くわしました。

その後、私は今の会社に入り、主として国語辞書の編集に携わることとなります。並行して、しばらくは音楽活動も続け、また演出や音響で小さな芝居も手掛けることになりましたが、この芝居の縁も、元をたどれば、五十嵐先生の演劇の人脈にたどりつくことに、ある時気がつきました。音楽の縁も同様です。

国語辞書編集に携わり、及ばずながら国語辞書を多少知ろうと手探りをしている時に、ある古辞書に出会います。「其文字貫道之器也（文字は道を究めるための道具である）」と始まる序文をもつこの辞書は、室町時代一四四四年に成った『下学集』。その序文の大略は以下のようなものです。

ある子供が来て、尋ねた。「私は、ことばを見聞きしても、生来愚かなために、まったく理解できません。どうすれば理解できるよくなるでしょうか」。私はこたえて言った。「どんな高い山も一簣の土を積むことから、どんな大河もわずかな流れから始まる。毎朝一画を学び、毎夕一字を習って行けば、いずれ万巻の書も読破できる。ただ努力を継続するのみである」と。そのために私はこの辞書を作って、この子供に授け、下学集と名付けた。

これを読んだ時、すぐに想起されたものこそ、かつて本郷の授業でふれた以下の一節です。

少し長くなりますが、引用します。

長老が言った。「彼らの先生とは私だ」。私が言いました。「私に

知識の一端を教えていただけませんか?」。彼は石板を前に持ち出してきましたが、そこにはアレフ、バーの文字が書かれており、私に教えてくれたのです。彼が言いました。「今日はこれまでとしよう。明日はまた違うことを教えよう。そして毎日増やしていけば、物知りになれよう」。私は家に戻ってから翌日までアレフ、バーをくり返していました。さらに二日間、彼の許に通いましたが、彼は私にまた別の授業をしてくれ、それも修得いたしました。同様にして十日間も私は通い続け、その都度何事かを修得し、長老の許から一度も欠席することがなかったために、私は多くの知識を身につけることができました。

多言は要すまい。アレフ、バーとはアラビア語のアルファベットであるが、言うなれば良寛の「ひふみよいむなやこのとを」であり、道元の「二三三四五」に他ならない。これが知識の秘密の正体なのであって、神秘主義というと何かしらおどろおどろしき知識を期待する向きは見事に肩すかしを喰らう。そして砂漠の老師にも、出雲崎の海辺に住まう老師同様に、暖かい愛情溢るる出迎えがあった。

『神秘主義のエクリチュール』p52-53)

ここに至り、私はまた再び、五十嵐先生の教えの許にあったことに気がつかれました。

そしてまた、同書 p.243 には、イランの神秘家ルーミーの引用に合わせて以下のようにあります。

本当に奇蹟と言えるのは、人が卑（ひく）い段階から高い段階へと登らせられることだ。あんなところから出発して、こんなところまで辿り着いた。それが奇蹟なのだ。もともと訳も分からなかった者が知的になり、無生物が生命体となったことだ。

(中略) これこそ奇蹟というものではなからうか。

メッカまで一瞬のうちに往復するとは、イスラームの開祖ムハンマドが、一日のうちにメッカとイェルサレムの間を往復した奇蹟として一般に信じられているところをふまえて、(中略)「それしきの奇蹟ならば砂漠に吹き荒ぶ熱風だつてやっている」と喝破したルーミーは、神秘主義の真義を理解していた。それは頑是ない赤児が一人前に知恵を身に吸収していく過程、すなわちわれわれの裡と身の回りの「ここに、今」実現されつつある出来事に他ならなかった。

知識を身につけることが奇蹟であり、ことばと文字がそれを手助けするものだとなれば、辞書に携わることができるということはなんと意義深いことだろうか。

音楽や芝居のみならず、日々の仕事においてもまた、五十嵐先生の教えにいつとはなく立ち返り、その蔭にあることを思わずにはいられません。

まことに、私にとつては運命的な師との出会いであったとしか言いようがありません。

「Symphonia Hitoshius」

(一九九二年七月) より抜粋

「鼎談・観念の王国に生きた人」

草柳大蔵(評論家)・安東伸介(慶應義塾大学教授)

五十嵐雅子

五十嵐…主人は草柳先生、安東先生に大変お世話になりました。お二人にそのときどきの主人の思い出を語っていただくことによつて、私自身主人を下ータルに把握することができればと思います。

草柳…安東さんは五十嵐君のトータルイメージをどう捉えていますか。

安東…実は今朝、たまたま家内に「君が五十嵐君を一言で語ると、どういうことになる？」と訊いたんです。すると「晝齋の内外で驚くべきエネルギーをもって活躍した人」という言葉が返ってきました。平凡な返事ながら、私もそう思います。「晝齋の内外」というところが肝心なのです。

草柳…私は五十嵐君に「不壊の天才」を感じました。壊れない天才…。普通、天才は破滅型の人間が多く、壊れやすいんです。ところが、五十嵐君は壊れるかと思つと、壊れる寸前にブレーキがかかつて、踏み止まる。私は三十五年間、人に会つて物を書く、客商売、で飯を食べてきま

したが、五十嵐君のような壊れない天才は初めてでした。文字通り敬愛しましたね。

安東…おつしやる意味が非常によくわかります。それだけに、あの極めて衝撃的な最期が残念でなりません。ただ、五十嵐君には自信があつたと思います。「悪魔の詩」の解説で、「ホメイニは必ずしもむちゃくちゃなことをしているわけではない。西欧的な枠組みで考えるから理解できないのだ」という意味のことを、非常に丹念に書いていますね。つまり、五十嵐君には、自分はイスラムの本当の理解者であるという、確信があつたと思うんです。実際、私は、『悪魔の詩』の上巻ができたとき、雅子さんに届けていただいたんですが、ふと、「大丈夫か？」と思つて反面、「五十嵐君が訳すくらいだから、大丈夫なんだろう」と思うことにしたので、イスラムに関する深い学問が、逆に悲劇の原因になつたような気がします。

五十嵐…私は事件の後、主人の現実に対する目がどうして狂つたのかを考えました。あれだけ現状の分析について冷静な人が、なぜ『悪魔の詩』の翻訳のこれほどまでの危険性を全く予知しなかつたのか。何日か考えているうちに、ハタと思ひ当たりました。主人の目が狂つたのは、あれが非常に魅力的な文学だつたからではなかつたかと。これは主人と安東先生とのつながりという部分にも関係しますが、主人の学問上の一つのコアが英文学でした。文学の魔力と申しますか、あの難解な作品に主人は魅せられたと思います。

草柳…五十嵐君にとつて、挑戦に値する文学だつた。

安東：英文学をやっている人なら、ラシユデイの小説を読んでいる人はいます。しかし、あの『悪魔の詩』は、英文学プロパーの人では、たとえラシユデイに関する文学論ができる人でも、翻訳することは至難のわざです。これは五十嵐君でないと訳せない。私は、五十嵐君に「これは俺にしか訳せない」という娑婆っ気が全くなかったわけではない、という気がします。

草柳：そういう自負と作品の持っている文学としての魅力が、五十嵐君特有の明晰なブレーキを失わせたんでしょうね。

五十嵐：あの作品は、主人にとつて、とてもおもしろかったようです。最初手にしたとき、アツという間に読んでしまいました。

安東：私はとてもアツという間には読めませんでした。あの作品は、イسلامについての相当深い知識がないと訳せません。五十嵐君の英文学に関する知識、教養はアマチュアの域を完全に超えていました。いずれにしても、『悪魔の詩』は五十嵐君だからこそ訳せた作品です。かねがね私はひそかに、チャンスがあつたら五十嵐君に、私が奉職する慶応大学の英文科の講義を何か担当してもらおうと考えていました。五十嵐君は英文学を広い展望の中で位置づけることができる人でしたから。

草柳：一般に人間には、〃振り子性〃とでもいふべき性質があります。例えば、学問とジャーナリズム、哲学と世俗、知性と感性といった相対する二つのもの間を、振り子のように動くんです。五十嵐君の場合、

その振り子の振幅が相当大きかったと思います。二人で話していても深い知識と教養に裏打ちされたイسلامの話をするかと思つと、五分後にはジャーナリストはだしの世俗的な話をする。そういう振幅の大きな振り子が『悪魔の詩』のときには振り切つて戻らなくなつてしまった、という感じですよ。

安東：振幅が大きくても、時計の振り子のように秩序ある振れ方をしていればいい。しかし、あるとき五十嵐君の内面から噴出したパトスが、その振れを狂わせたということなのかも知れません。

草柳：奥さんはそのパトスは文学だとおっしゃる。

安東：文学かも知れません。しかし、文学では収まらない感じもします。謎ですね。

草柳：奥さんの五十嵐君に対する第一印象は、どういう感じでしたか。

五十嵐：東京大学教養学部時代に、日高八郎先生の英文学のゼミで会ったのが最初です。主人は一年上でしたが、これはすぐくできる人だな、という印象でした。主人は新潟育ちでたまたま、中学一年のときから個人的に、英文学者の斎藤勇先生の俊英なるお弟子の一人である新潟大学の竹内公基先生に英語の手解きを受けました。そして高校二年生のときには、大学院レベルにまで進み、「君にはもう教えることはない」と言われるほどと聞きました。ですから東大の中でも、驚くほど英語ができました。

安東…五十嵐君が教養学部の一年のとき、私は非常勤講師として英語を教えました。非常によくできる学生でした。そして、ほとんど毎時間授業が終わった後、廊下で質問をするんです。その質問がとてもおもしろく、的確で、非常に楽しい思いをしました。それが私と五十嵐君の出会いでした。その後、五十嵐君が本郷で数学を学び、大学院で美学を学んだ頃は、付き合いは途絶えていました。付き合いが再開されたのは、五十嵐君が大学院を出て、イスラムの世界に入り込んでいってからです。この付き合いは学問的な関係とか師弟の関係というものではない、私にとっては大変珍しい貴重な関係でした。毎年正月の二日にわが家に卒業生などが集まります。五十嵐君は最後の年まで、毎年欠かさず来てくれました。大抵、雅子さんやお子さん方も一緒でした。その席は慶応関係者が多いんですが、五十嵐君にとって、何か愉快で、居心地がよかったですでしょう。

草柳…知的交流を楽しんだんでしょね。

安東…その席でただ一度だけ五十嵐君に会っていた人達がいるわけですが、みなさん五十嵐君の通夜や葬儀に参列していました。わが家の正月が寂しくなった感はありません。

草柳…五十嵐君は本当の意味の自由人だったという気がします。五十嵐君がまだマスコミに注目されていなかった頃、私がついている仙台のテレビ番組に出てもらいました。そのとき、「数学、美学、イスラムと渡り歩く学者は、最後はどうなるの」と訊いたんです。すると「どうなるの

か僕もわかりません」(笑)。そして「おもしろいから研究しているんです。おもしろくなきゃ学問じゃありません」と言う。いよいよもっておもしろい人だなと思えました。テレビ出演の後、食事をしてから、五十嵐君の希望で歌える店に行きました。彼が歌い出すと、やんややんやの喝采です。そうしたら彼が乗りました。美空ひばり特集をやったんです。顔つきから振りから発声から全部、美空ひばりなんです。驚きました。「君、イスラムの他に美空ひばりがあるじゃないか」と言ったら、「いや、もつとあるんです」(笑)。本当に自由人だったと思います。天才や自由人は得てして常識人と衝突することがありますが、五十嵐君はブレイキが利いていた。彼の気持ちの中に、日本的慣習ということではなく、守礼」という意識があったからでしょう。得難い男でした。

安東…礼を守るといふ点では、私に対してもまったく同様でした。ところが、彼がジャーナリズムの世界で物を書くときには、実に舌鋒鋭く他人を批判するんですね。それで私は何度か、「求めて敵をつくるような書き方はどうなんだろう?」と注意したことがあります。そういうとき、五十嵐君が反論してくるんじゃないかと思いつつ注意したんですが、私には一度も歯向かってきたことがないんです。特に五十嵐君が『神秘主義のエクリチュール』という著作の中で、私の先生にあたる西協順三先生をこつびどく批判したとき、それが少々見当違いだったものですが、「君のは批判ではなく罵倒ではないか」そして火野葦平の『糞尿譚』が頭にあつたんですが、「言ってみれば、君は汚穢をふちまけているようなものじゃないか。君の文筆の気品にかかわるんじゃないのか」と、かなりきつく忠告したんですが、「いやいや、ははっ」と笑うだけで何も反駁してこないんです。ですから、五十嵐君の印象は人によって随分違っ

のかも知れせん。

草柳…私も「弱つたな」と思ったことがあります。彼の出版記念会が開かれたとき、私はスピーチで「五十嵐君よ、もう少し言葉を慎め、筆を慎め、角のとれた人間になれ」と言ったんです。そうしたら、その後壇上に立った五十嵐君は「僕は一生、角をとりません」と宣言した(笑)。

私は「弱つた奴だな」と思いながら、彼を睨みつけていたんですが、彼はそれに気がついて、余計におもしろがつて、「これからも方々にぶつかっていきます」と付け加えたんですよ。

安東…今にして思えば、私や私の家族には、五十嵐君の人間として好かれるいちばんいい面が現れていたような気がします。その一方では、彼を「あん畜生め」と思っていた人もいるでしょう。とにかく、気に食わぬジャーナリズムの人気者をすべて粉砕しようという感じでしたからね。ヨーロッパの批評家の世界にも、人に怖がられるような攻撃的な鋭い批判をする人が、個人的には大変やさしい人であるということがありますが、五十嵐君はそのタイプの人間ですね。

草柳…奥さんは五十嵐君に「あなた、いい加減にしたら？」と言ったことはないんですか(笑)。

五十嵐…あまりないですね。染められたと言いますか、主人がそう思うんだしたら、やっぱ、そうなんだろうなと、素直に受け取ってしまいました。若い頃に、よく編集者と喧嘩しましたから、「喧嘩しないようにしたら・・・」と言ったことがありますか、「二」学問、芸術に関しては絶対

譲れない」と言っていました。そこで議論しても、こちらが打ち負かされてしまつて、「やはり、そうか」ということになつてしまつんです(笑)。ですから『悪魔の詩』の場合も、主人が「心配ない」と言えば、「ああ、そうですか」と言うしかなかったわけです。洗脳されきつていました(笑)。

安東…非常に知的な夫婦でありながら、夫唱婦随なんです。人生において夫婦の間の教育(共育)の関係は決定的です。似た者夫婦と言いますが、だんだんそうなるんですよ。

五十嵐…私も主人と氣質が似てきました。特に主人が亡くなってから、それを感じます。とても攻撃的になりました(笑)。それから子供を育てるとき、主人の生き方を何とか伝えなくては、と思うんです。「あの人がつたら、どうするだろう」という思考法が、自分の論理の中に入ってしまったっています。主人の生き方や論理が、私の中に染み込んでいくわけです。それが高じまして、最近、主人の恩師である谷道友信先生のところでプラトンを読む会に出させていたでいてありますが、主人が常に口にし目指していたものはこれなんだなということが改めて、非常によくわかります。おそらくもう一人の恩師井筒俊彦先生の著作を読めば、イスラムのことと同時に、主人の生き方も見えてくると思います。それから思うことは、主人があれだけ好き勝手にできたのは、私が家の中のことを全てやっていたからだという点です。私は子育てに命を懸けていました(笑)。また、主人も家庭、子供をとんでも大事にしていました。五十嵐一の「二」に象徴されるように、学問も家庭もトータルとして「二」でした。もし、私が家庭のことをやるうとしなかつたら、主人は自分で

やろうとしたと思います。

安東…家庭人という言葉は五十嵐君にそぐわぬ印象を持たれるかと思いますが、本質的にそういう部分を持っていましたね。人間は誰しも心の中に暗い部分を持っています。特に、五十嵐君のような知的な人間は根本に何か暗いものを背負っているんです。それを五十嵐君が意識していたかどうかは別にして、それが家庭を大事にするということに結びついていたような気がします。先ほど草柳先生からカラオケのお話がありました。私も詩にちなんだエピソードを二つ紹介しておきます。二三年前でしたか、五十嵐君を誘ってフィッツジャー・デイースカウのリサイタルに行きました。その帰りにお酒を飲みながら、「五十嵐君、歌いたいだろう」と言うと、彼は実に素直に「ええ、歌いたいです」と答えました。フィッツジャー・デイースカウの歌を聴いて感動すれば、彼なら歌いたくなるはずなんです。勿論彼はシューベルトの曲をドイツ語で歌えませぬからね。

草柳…それも聴いたことがありますよ(笑)。

安東…それで私も鎌をかけたんです。「僕も歌いたい、できればオーケストラをバックにマーラーを歌いたいよ」と(笑)。すると五十嵐君は顔色一つ変えないで、「先生、Yオーケストラなら五〇万円で呼べますよ。夢じゃないですよ」と言っんです。五十嵐君が言うと話が馬鹿にリアリティーを帯びてくる(笑)。

五十嵐…その話は家に帰ってから、私にもしました。私は「そうね。で

きるわね」と賛同しました。そして、わが家では「安東先生ならこれくらいチケットが売れるから、これくらいの会場を用意しなくちゃね」という話にまで発展したんですよ(笑)。

安東…いや、五十嵐君は「そのコンサートで僕も歌う」と言って、本気なんですな。

五十嵐…私も本気でした(笑)。実現可能と考えていました。

安東…素人がオーケストラをバックにマーラーを歌うなんていうことは馬鹿みたいな話なんです。五十嵐君が一枚噛むと、妙に話がリアリティーを帯びて来て、ついこちらもつられて本気になってくる(笑)。これはもう彼の人徳というべきか、そういう力を持っていましたね。

草柳…彼は自分で脚本・演出を担当して、『マラー・ベ・ブース』というオペラを上演しました。また聖喜劇『エマーム』もやりました。最初話を聞いたときは「まさか」と思いましたが、実現させている。大した才能です。

安東…確かに大した才能です。しかし、私は彼のオペラに若干批判的でした。観には行きましたが、「五十嵐君、弁当は出すのかね」なんて言うって、落語の『寝床』扱いにしています。彼は一寸イヤな顔をしていましたけれど(笑)。このオペラのために、五十嵐君、大変なお金を使ったんじゃないですか。

五十嵐…何も残りませんでした。最後は預金通帳の残高が五万円でした。

安東…見事です。ね。国文学者池田弥三郎先生が「金というものは、ちゃんと使えばまた必ず入ってくるものだ」とおっしゃったことがあります。が、五十嵐君もあんなことにならないければ、おそろくお金はいつか戻ってきたはずで。

草柳…あのオペラ、どうしてやりたかったんですか。

五十嵐…とにかく音楽好きで、学問とは違った形で自分を表現したかったようです。小説も書きたがっていました。子供の頃から、そういう傾向はあったようです。中学のとき、坂本九の真似をして、講堂の上の方からスポットライトを浴びながら登場したという話もあります。芝居もそういうエネルギーの一つだったと思います。ただ私はいつも「学者としての五十嵐一の方が好きだ。あなたの芝居はアラが目立つ。芸術的才能はいま一つネ」と言っておりました(笑)。

安東…私は五十嵐君には、井筒俊彦先生の跡を継ぐような学者になってほしいと思っていました。イスラムにあれだけ深く関わるといふのは、興味が広いからです。イスラムというのはマホメットの時代から本質的に変わらない。だから、五十嵐君はいくら興味を広げても、イスラムという帰る場所を持っていた。逆に言えば、帰るところがあったから、あり余る才能をいろんな方面で発揮できたんだと思います。彼はジャーナリズムにもアンビジョンを持っていました。しかし、彼がジャーナリズムでやったことは、ジャーナリズムでの彼の立場を狭めることばかり

だったような気がします。彼は根本的にはジャーナリズムの人ではなかったんじゃないでしょうか。

草柳…いや、本質的にはジャーナリストの資質を持っていたと思います。しかし、日本のジャーナリズムが本質を失っている。そこにフリクションが起きる原因がありました。日本のイスラムに対する理解の原点には、オイルショックがあります。すべて石油絡みでイスラムを理解し、対応してきた。ところが井筒先生とか五十嵐君は、イスラムとの間にそういう世俗の認識、対応を超えた知的アクセスを持っています。本来なら、五十嵐君は世俗的なジャーナリズムのリクエストに感じなくてもいいんですが、人が善くて心が広いから応じてしまう。それでフリクションが生じて、やめようとしなかった。

五十嵐…口幅つたい言い方ですが、主人はよく「イスラムは祭政一致である。だからイスラムを研究するには全部に関わる必要がある。自分は井筒先生のような生き方はしない。イスラム全部やってやる」と言っておりました。イスラム研究という面で、もつと野心を持っていたようです。

草柳…なるほど。しかし、五十嵐君の身の立て方、純粹さからして、日本のイスラム認識の風土に、やりきれないものを感じていたはず。す。「いやになつちやうなあ」と思いながら、世俗的なリクエストに感じていた面があるんじゃないですか。

五十嵐…いえ、そういうものに付き合っていくこと自体がイスラムの姿

勢だと思っていたようです。イスラムに関するのなら何でもやって、最後には世の中に遺才業績として、イブン・シーナーの全訳をやるつもりでした。自分が何を書くよりも、イブン・シーナーを全巻、日本語という言語に翻訳することが、学問的にも世界的にもいちばん意義があることだ、と言っておりました。

安東…それはきよう初めてうかがう話です。五十嵐君がその夢を果たせなくなったことは、返す返すも残念です。

草柳…イブン・シーナーの全訳という世界史的に意義のある夢を持ちながら、世俗と付き合ってしまう。そのところがよく理解できないんですね。奥さんは、それがイスラムの祭政一致の姿勢だ、とおっしゃるけれども。

安東…先ほど、五十嵐君の根本に暗いものがあると言ったのは、そのあたりとも関係してくるよう思います。祭政一致で世俗的なものとも付き合うというのなら、なぜあれほどまでに舌鋒鋭く人を罵倒しなければならぬのか。著しく寛容を欠くんですね。イスラムのことを啓蒙しようとするのであれば、あれほど人を罵倒する必要があるのかと、私などは思ってしまう。そのあたりは、どうもよく理解できなかった。

五十嵐…主人は抽象的なところで暮らしている人でしたから、感情的なことあまり気にしなかった面があります。ですから、痛烈に批判した相手に恨まれるという発想はとらなかつたと思います。「軽蔑して言っているのではない、言うだけ尊敬しているんだ」という感じですよ。

安東…いや、世の中はそうはとりませんから。

五十嵐…主人は「強い人とは闘う。弱い人とは闘わない」と言っていました。

安東…私は弱い人だから親しくしてくれたわけだ（笑）。

五十嵐…先生のごことは尊敬していました（笑）。それから、主人を見ていてもしろいと思つたのは、新聞を読まない、テレビのニュースを見ない人だったことです。主人のニュースソースが何だったのか、またよくわからない部分があります。新聞は『報知』と『スポニチ』の人でした。それも時々買ってくるだけでした。

草柳…そういえば野球には詳しくはなかつたですね。

五十嵐…テレビで見た番組といえば、お笑い番組、サスペンス、お色気番組です（笑）。

安東…それは彼流のダンディズムですよ。

五十嵐…主人は安東先生のダンディズムを非常に好いていました。

安東…これまた初耳です。私などダンディでも何でもないので。

五十嵐：「安東先生の英語の発音にならおう」といつておりました。「ペンギン」ではなく、「ペングイン」なんだと（笑）。

安東：それは私だつて英文学の教師なんだから、教えるときはそういう発音をするかも知れません。しかし、目の前のペンギン島に、「ペングイン」なんて言いませんよ（笑）。

五十嵐：それから、「安東先生は黒いコートに白いマフラーをなびかせて、ひょうひょうと駒場に現れる」といつておりました（笑）。

安東：それは五十嵐君が私を理想化してくれたんですよ。黒いコートは着ていたかも知れませんが、白いマフラーをしたことはありません（笑）。でも、五十嵐君にそんなイメージを持たれた私は幸せだったと言わなければいけません。

五十嵐：主人は人の真似をするのが、とても上手でした。

安東：それは語学的才能として必須の条件です。特に声帯模写の才能は、語学の才能とイコールです。五十嵐君は非常に綺麗な英語を達者に話しましたが、その背後には、彼の声帯模写の能力とダンディズムがありましたね。野暮つたい英語は話したくないと考えていたんでしょう。

草柳：アラビア語もできたんでしょう？

五十嵐：アラビア語、ギリシア語はやっていました。それからペルシャ

語。主人は外国語は大抵しゃべれました。相手の言っていることがわからなくとも、話すことだけはできました。新婚旅行のときも、スペイン語などで道を尋ねると、通じるんです。でも、相手の言っていることがわからない（笑）。

草柳：自分の意思を相手にわからせることができても、相手の言葉がわからない、というようなことは、人生においてもあったんじゃないですか。例えば、役人と話していると、役人の言っているお役所言葉が全然わからないというような（笑）。

安東：五十嵐君ももう少し歳をとったら、懐が深くなって、一回りも二回りも大きな人間になったんでしょうが、残念ながら鋭い刃物を手に突っ立っているときに亡くなってしまった。教師の悪い癖ですが、私には駒場の一年生のときや、やんちゃで知的好奇心の旺盛な坊やという五十嵐君のイメージが、最後までありました。

草柳：安東さんが先ほど、五十嵐君は人間の暗い部分を背負っていたと指摘されました。五十嵐君の場合、それはこの日本というやりきれない国に住むこととオーバーラップしませんか。

五十嵐：主人はとても観念的な人でしたから、そういうことはなかったと思います。どこに住んでも同じだと考えていたんじゃないでしょうか。ただ、生まれ育った新潟には愛着が深かったようです。「新潟起し」をやろうと、本気で考えていました。長岡の歴史や良寛のあり方にも非常に関心を持っていました。

安東…あそこは例の新潟二区ですが、選挙事情にも実に詳しくかった、玄人並みの内輪話をよくしてくれました(笑)。

五十嵐…新潟に大学をつくらうと言って、蔵書の一部を送っていました。

安東…最後に繰り返して言えば、五十嵐君が『悪魔の詩』を日本語に訳す意義はあったのでしようが、彼がその仕事に死を賭していたとは、とうてい思えない。それだけに、あのような最期になったのは残念としか言いようがありません。私は二十七年間、東京大学で教鞭をとりましたが、教え子の中で五十嵐君がいちばん大きな存在でした。そして、幸いなことにウマが合い、家族ぐるみのお付き合いまでさせてもらいました。その五十嵐君があのような最期を遂げた。私の二十七年間の東大時代の大きな部分が、一挙に消滅してしまったような虚脱感に、やりきれない思いをしています。

五十嵐…主人はお二人の先生に親しくしていただけで、本当に幸せだったと思います。どうもありがとうございました。

「イメージの発掘」

五十嵐 雅子

おもいがけぬ掘り出し物を見つけた時の心ときめきはだれしも経験するものである。それは旅先でふと降り立った田舎町の、主の姿もみえぬ古道具屋の店先であったり、高速道路の交差する都会の真ん中の古書店の棚奥であったり、場合によっては青山、六本木の間口の狭いブティックのそれでもきらびやかなウインドウの片隅かもしれない。

ところで今、すでに主のいない書物の山の間からみいだされた一遍の論考が、私にとつて、心ときめく掘り出し物となっているのである。これはなにかあるところへの *hitano* なのだろうか。

「預言の構造」原稿予定枚数六百枚、モーゼと一つの頂とするユダヤの預言者にはじまり、シャカ、キリスト、マホメット、さらにはノストラムスと、神からの言葉を預かった人々を取り上げるといふ構想のこの本は平成四年に刊行されているはずであった。原稿用紙は寒々とした白紙のまま遺された。

その幻の本の理論的なあらましが、今回の掘り出し物、「映像メディアを活用した、美学理論の開発と提示のための基礎研究(科学研究費補助金研究成果報告書 研究代表者 増成隆士 平成3年3月)の五十嵐の手になる論文に載っている。推論のよすがにしていたければ幸いである。

本質直聴 (Wesensanhörung) の垂直性、「収縮」と「弛緩」のモチーフ

による「聴覚的イメージ」の創出、「かたち」と「かた」をてがかりとするその解明などの切り口が窺い知れる。

ここでもう一つの掘り出し物をご紹介しよう。「詩と音楽のあいだ」

(新潟大学付属中学校文集「大樹」昭和27年度)。この中で十五歳の中学生五十嵐は、音楽が言葉の助けを拒否し、言葉はまた音楽を必要としないという議論を展開している。

音楽に詩を持ち込むこと、またその逆もできるはずがありません。そんなことは神への冒瀆です。なぜなら詩も音楽もランケ流にいうと、おのおの「神に直接(結果?)したものだからなのです。

論考の前半部分は音楽の音のみへの依存をワグナーなどの失敗例をひきながら論じ、後半ではロランを断じつつ言葉と知性について説いている。

二つの掘り出し物の書かれた時期にはほぼ三十年の隔たりがあるのだが、したがってむしろ後者には粗削りな論考がみえるが、その仲立ちとして、『音楽の風土』(中央公論社昭和五九年)を入れてみるといくらか事情がはつきりしてくる。この本はむしろ言葉に依った分析的思考をむねとして解析していく方途を辿っている。十五歳で音楽という聴覚に訴える表現の魅力を感じつつ、まばゆいばかりの知性に捉えられた少年の思考が、まずは振り子のひと揺れとして言葉による音楽の把握を意図したのである。この後のオペラ制作(昭和六三年)、筑波に入ってから学園祭その他のバンド演奏は、こよなく歌うことを愛する少年期の延長でもあったが、「預言の構造」の聴覚的感性へ大きく振り子を揺らす働きをしていったと思われる。音ないし音楽(かたちとして考えられている)

としての言葉の感性を、「視覚的イメージ」というモメントを介在させることにより解きあかそうとする一つの結実をそこにみることでできよう。

五十嵐一の妻であり、共同生活者として掘り出すべく期待されるのは、むしろ家庭の人としての五十嵐イメージであって、こんな話はいぶかれるむきもあろう。しかし、あえて私が限られたごく僅かの時間に拙い発掘の跡づけを試みたのは、まさに五十嵐一と生活することがこうした知的興味への誘いへの毎日であったからなのだ。部屋に積まれた本の順序や位置が五十嵐の思考の歩みの跡であることに気づいた学生の一人が「この本は、片づけられませんか」と感慨を込めて呟いたのは偶然ではない。本の山に込められた知への誘いは今も息づく。

さらにいうならば、一周忌を期して行われる「偲ぶ会」にVTRで颯爽と登場し、その変わり身の見事さを生身の人間であるとき以上に發揮して、この集まりの破格な「かた」を通じて自らを表出するのはまさに五十嵐一のエネルギーそのものといえよう。

家庭のなかで子どもにこう語り、妻にこう対したという回想はそれなりの意味を持つ。しかしながら今稿を終えるに当たって、そうした回想を許さぬ夫の優しさと厳しさとともいぬある情動を私は自分の裡に感ずる。立ち現れてくるものの、それは五十嵐の「似姿」たるイメージであり、このイメージを掘り出し呈示することで、SYMPHONIA HITOSHIUSに一つの楽章が加えられれば幸いである。

「輝かな愛のままに」

今道 友信（清泉女子大学副学長）

悼んでも悼み切れないものを悼むのは空しい。惜しんでも惜しみつくせぬものを惜しむのは意味がない。一周忌であるが、それにふさわしい追憶も愛憎も忘れて、ひとつの夢とひとつの幻想を語ることにしよう。いずれも五十嵐一君に関わる話であることは言うまでもない。

ひとつの夢から始めよう。夢に悲しい夢もあるが楽しい夢もある。ここで書くと思うのは、後者である。夢に夜見る夢もあるが、醒めてのبرانの夢もある。ここで書くと思うのは後者である。

五十嵐君が数学から美学に転じたのには私の講義が動機のひとつであったのは確かなことかも知れない。それを本人からも他の人からも聞かされたことがある。私と一緒に勉強したいという若い人たちが来ると、私はそのことを喜ぶとともに、責任を感じる。それは誰でもそうであろう。しかしその責任の取り方は人それぞれに違う。私は夢を分けもつことがそういう若人に対する大きな責任と思うから、五十嵐君とも会えば大小の夢を語った。夢は創造の前提に教えられるからである。そういう話に乗ってこない人がいると私はいら立つことがあった。その点では、五十嵐君は、私の前では多弁でなかったが、夢を語るにためらわぬ男であった。それゆえに、また、創造的であった。

私が全く読むことのできない言語はペルシア語やアラビア語である。それなのに、これらの言語で書かれた文献に底知れぬ魅力を感じていた私は、ギリシア語やラテン語を正確に読んで来る五十嵐君の才能を見

込んで、ペルシア語やアラビア語を勧め、その世界的学者である井筒先生の鎌倉のお宅に連れてゆき、入門を取りもった。日ざしの暑い日であったが、双方が満足していたようであった。

テヘランで私が講義したことがある。五十嵐君はその時いろいろ親切に世話してくれた。雪山を望むレストランで食事をとりながら、二人で輝く夢を話した。Varia Patoniaという5巻のプラトニスト思想家の研究書をオクスフォード大学出版から公刊する夢である。ニュッサのグレーゴリオス、アウグステイヌス、ペルシアのシャフラスタニー、フイッチーノ、そこまで4冊、第5巻には近代・現代からの人ほど選んでみよう、という話になった。編集者は五十嵐君と二人でよかるう、ということになった。シャフラスタニーについては、私は五十嵐君のほかにヤフヤ、ファラケリのほか名前の浮かばぬほど、彼の学力に期待していた。

すぐにも出来そうなことを言い出しかねないこの男に、私は機先を制するかのようになって言った。「この夢の実現のためには、あと15年くらい待たなくてはならない。なにしろシャフラスタニーは君の仕事ですから」。五十嵐君の反応は、すでに老教授であった私への思いやりをこめていた。「10年にしましょう、先生。それまで先生も生きていらして下さい。」私は約束を何年も越して、こうして生きています。オクスフォードでなく、プリンストンからも計画になったが、いよいよというとき、シャフラスタニーのもとに五十嵐一の名前のない叢「書」を編む気はなくなっていました。夢は夢のまま輝くとき、最も美しい。その美しい夢の中で、五十嵐君は童顔のまま笑っている。我に返ると、ばかな奴だ、頭はいいくせに、と言ってみたくなるような、やり切れない気持になることもある。

ひとつの幻想も書く、と言ったが、それはスペースがないので短く終えることにしたい。五十嵐君の美学は開花を見なかった。しかし、それが花咲く幻想を私は話すことができる。それは日本では稀なスケールの大きい哲学的美学になったであろう。恐らく、傷は残る荒けずりのままかもしれない。しかし、彼には現代芸術を独特な見方で論じてゆく強みがあった。それは機械への幻想の定着と幻想に向けての制度の革命。これら二つの接点として芸術の政治的機能を見すえていたことである。ここからは、彼なりのユートピアがあった。ウートポス―すなわち、どこにもない場所、というそこに向けて、火箭よりも早く時間を駆け抜けて行った彼の生そのものが、彼自らの抱き続けた幻想に燃えたのである。私の編集した講座『美学』(東大出版会)の第一巻に、五十嵐君のイスラーム美学の論文を収められている。せめてそれだけでも共同の仕事の中に収めることができたから、彼の生の一端が、幻想の走り去る軌跡のひとかけらのようにして、私の仕事を飾っている。ひとかけらであるがきらめいている。

私のもとで学んでくれた人たちの多くは私を去って訪ねても来ない。彼は私を捨てなかった。折々、訪ねてもくれたし、著書も送ってくれた。ただ、あの英語からの翻訳だけは私に見せなかった。それが何かに利用されるかも知れないことを本人は予知し、私の憂いを避けたのか、それとも私とは哲学的、美学的にのみ関わろうとしていたのか、何も今はわからない。最後の著書にも、律義な彼は、私の名を刻んで送ってくれた。それらは私の書齋の中、あのひとかけらのきらめきとともに私に何かを語っている。今後もそうし続けるのであろう。人には死んでも死にきれないものがあるからだ。

「思想家・五十嵐一氏」

小川 泰 (筑波大学教授)

危機を察知して警告を発することが知識人の重要な任務であったことは預言者や先哲たちの時代からの歴史が示している。危機の知とは知の本来的性格のようである。しかしまた多くの歴史はそのような知識人たちが知ゆえに自らの存在を危うくした例をも示している。危機の知は知の危機をも招来する。

『イスラーム・ラディカリズム』、まえがき―ラディカリズム讃より)

前節に述べた共同研究の有力メンバーの一人がこの文章を書いた五十嵐一(いがらし・ひとし)氏であった。わたし故人の初対面は一九八四年、筑波大学現代語現代学系への赴任が一九八七年である。その後ある出版社の企画のことでお誘いを受けて協力したり、次々と出版される著書を頂戴したりしていたが、Nagayashi氏に紹介したい一人としてすくなくに思い浮かび、到着翌日の歓迎会にお誘いしたのが、わたしの側からの最初の働きかけであった。Nagayashi―五十嵐の組合せの発想は、表面的には、ともに数学出身ということもあるが、もっと深い共通点を直観していた。古今東西森羅万象にわたる博識さ・実行力などいろいろある。五十嵐氏の東大美学での修士論文の題は、「イデアと美の(かたち)―プラトン美学再考」であった。とりわけわたしは五十嵐氏に期待したのは、「Nagayashi

科学・芸術・symmetryの分析がギリシヤに端を発する西欧文化の流れのみを前提としたものであって、日本からみればどうなるのか、あるいは東洋から、イスラムから、さらに地球規模で考えたときには、・・・このような分析が必要である。」という問題などについての発言とその分析自体であった。実際、その期待に添えてくれ、それ以後の東京での集まり（前記のARS）、筑波での共同研究の討論に積極的に参加された。じつと目を閉じて皆の発言を聞きとり、radicalな意見を添えて、要領よく前向きに整理してくれるさまが印象的であった。

雅子夫人によると、つくばの単身公務員住宅のデスクの脇のひとときわ目につく山は革表紙のプラトン全集と大乗仏典にギリシヤ語の辞書であった。この機会に、修士論文のテーマに戻り、それを発展させることを次の仕事と考えておられたことは、ほぼ確実とのことである。さらに、ほかの仕事に対してとは意気込みがちがうことが明らかに感じられたそうである。このことを伺い、大変うれしく、また天才という彼の早すぎる死がなおさら残念でならない。彼は既にわたしの中にも住み着いている。こんどの国際シンポジウムのこと、彼の力に大いに頼ろうとした私としては、常にわたしの彼の発言に耳を傾けてゆきたいと思っている。

なおNagy氏とは、時間にして5時間ほどの、20名ほど参加した歓迎会での固定席制の昼食とそれに続く会議での同席であったが、五十嵐氏は強い印象を残していた。五十嵐氏が国際シンポジウムのkey personsの一人となるとNagy氏は確信していた。E.J.で偶然、事件発覚当日の夜、第一報をラジオのニュース番組で聞き、早速わたし宛にshockの色濃い追悼の電子メールをよこした。

五十嵐氏が、『悪魔の詩』の翻訳者という肩書でのみ人々に印象づけら

れてしまうことを惜しみ、また、今度のシンポジウム、つまり対称性とその破れとの深いつながりを思ってこの稿を書いている。かれの10冊にのぼる単行本の内5冊は一九八九年以後の二年半の間に出版されている。そのほか美学講座や哲学講座の分拍執筆や、夥しい数の雑誌論文、2つの劇作とその上演。イスラム科学の古典『医学典範』（イブン・スィナー）の翻訳とその解説・論評、内閣官房アドヴァイザーとして中東問題についての提言（無為ではあつたが、それに玄人はだしのvoceと、まことに多岐にわたる才能であった。日本文化会議の例会や、防衛庁の研修所での講演では、その場の大勢とは正反対の主張を果敢に繰り返していたようである。

著書のうち、入手しやすいと思われる中公新書の二冊についてのみふれておく。いずれも彼の博識ぶりがうかがえる密度の濃い内容であり、話題は古今東西を自在にかく巡りながら、実は、未来につながる現在を見据えていることがご理解いただけよう。『音楽の風土』革命は単調で訪れる』（一九八四年）、『摩擦に立つ文明—ナウマンの牙の射程』（一九八九年）である。なお、前者を中心として、五木寛之氏が本年二〜三月の新聞連載の中で5回、さらに11月の事件直後に11回にわたって絶賛し、ただ一度の面識もなかった「かぶいた思想家」ラディカルな批評家五十嵐氏を紹介された。

わたし自身が著書を通じての五十嵐氏に何よりも共鳴するのは、「物事の根本にさかのぼって考える」という原義とおりのradicalismである。彼のイスラムへの共鳴もイスラムのもつradicalismにあると思う。

「文化(culture)の原義は『耕す』ことであり、自分の立っている地平の掘り起こしの反省なしに心を動かせるだけでは文化でない」「文化があつてその後に摩擦が生じるのではなく、摩擦の裡に文化がある。」これ

らは、彼が繰り返して書いていることである。『摩擦に立つ文明』の中の「鵝外の偉大さは、文化摩擦を自己の裡に直接体現し、その痛みに耐えて、かつ自己変革をとげてきた真の文化人としての資質にある。」という記述は、彼自身をも表現している。これがまさに彼の生きざまであった。ここにふれた心冊の中だけでも、今度のシンポジウムでとりあげるべき問題が多数見られる。

『数理科学』研究、1991. 12より抜粋

「五十嵐一現象とその心象風景」

小田 晋（筑波大学教授）

アノミー化された、中途半端に豊かで平和な管理社会¹というのが平成初年のこの国の心象風景であるから、学者・研究者の生きかたもやはりその影響くらは受けざるをえないだろう。つまり、僧院長アベラーや大史令司馬遷や、宰相文夫祥や、近年でも歴史家ホイジンガやマルク・ブロックや、わが国でも科学者戸坂潤のような生きかた死にかたはなかなかできない。あの一九七〇年代の全共闘騒ぎの中さへ、学者・研究者でその中に加わって騒ぎ立てた者はいても、生きるか死ぬかという目に遭った者はない。いまの時代、この国で「反体制」を気取ることには本人がなにを口走ろうが、生き死にかかわる事ではない。もちろん個人的に情死したり蒸発したり収賄や万引で逮捕されたりした例なら乏しくない。そんな中でも、事と次第によつては、そんなに天下泰平を謳

つてもいられない事は、すくなくとも筑波大学で、襲撃されて殺害された同僚教官一人、自宅に放火されて焼死しかかった教官一人があり、いずれも犯人は未逮捕ながら、その専攻領域にかかわる言論活動がその原因になっていると疑われる事でもわかるのである。

そして「中東ハンパが日本を滅ぼす」という著作の題名でもわかるとおり、そして、多少はジョークをも含んでではあるが学生の極楽蜻蛉な生き方、アノミー的な態度についての峻烈な批判者であり、学友でも、シンポジウムでもバラケルズ・ボンバストウス・フォン・ホーエンハイムに似た毒舌を鳴りひびかせた五十嵐一氏が、「アノミー化された中途半端に豊かで平和な管理社会」に対するもつとも鮮烈なアンチ・テーゼを、その生きかた、死にかたの中に体現したのは偶然ではないのである。五十嵐氏は、気楽に反体制を振りまわすような単純な人物ではない。湾岸戦争のあいだ、首相官邸は五十嵐氏の「声」と連絡を絶つことはなかった。言語も全く通じないのに、不安定な精神状態を抱えて来日し、北関東の飯場で長時間単調労働に従事するうち、同僚が悪魔であると誤想して殺害したイラン人労働者の司法精神鑑定に筆者とともに、死の直前まで五十嵐氏は従事していたのである。その五十嵐氏が、「哲学者たり、理学者たり、詩人、剣客、音楽家、打てば響く毒舌の名人」であったシラノ・ド・ベルジュラックのように大学構内で専断な暗殺者の手にかかつて殺害された。そして、それに対するこの国の社会の反応も、また冒頭に挙げたような今日の時代精神をよく反映していた。つまり、あれほどイスラームの文化を愛し、宗教と伝統についての理解をもつていた五十嵐一氏の思想と行動のニュアンスや陰影はかえりみられることがなく、一方では、火中の栗を拾つてというような安全地帯からのわけ知りらしい声さえ聞こえたし、他方では、学内で研究者が殺害されると

いう事態に対する研究者としての抗議や、更に故人の遺族に対する弔意の表現にさえ、何ものかに遠慮して、制肘を加えようとする力さえかからないではなかったのである。

五十嵐一氏の生きかた、死にかたは、あたかも燻りだすように、今日の日本の時代精神を浮き上がらせた。それは、一九九二年の日本でみられた映画監督伊丹十三氏へのテロリズム前後の事情にもうかがえるような、暴力に対する知性の批判は、常に少「な」くともそのはじめは孤独のたかひであり、現代的でわけ知りの情報環境の中に埋没しがちなのであるが、それだけに、そのリスクを「一人で引きうけた人」の肖像を悟も暗闇の中の稲妻のように浮き上がらせるといふことなのである。

名著「東方の医と知ーイブン・スィーナー研究」

蒲原 宏（日本医師学会理事長）

新潟県出身のイラン学者はどうしたわけだか早死にである。ペルシヤの詩集「ルバイヤート」を原典から直訳した小川亮作氏（岩船荒川町出身）は外交官としてテヘラン在任中、11世紀から12世紀のペルシヤの科学者・哲学者・詩人、オマル・ハイヤームの詩を知り、その直訳を昭和23年岩波文庫本として出版した。しかし、惜しくも胃かいようで、26年12月27日、41歳の生涯を閉じた。外務省アジア局第4課勤務が最後であった。

小川氏の「ルバイヤート」が売れ出したころ、新潟市にて天才的なペルシヤ哲学者が生まれた。7月12日筑波大学構内で非業の死をとげた、

五十嵐一・助教がその人である。中学、高校時代から抜群の秀才ぶりであったが、彗星（すいせい）のごとく現れ、44歳の若さで無残な死をとげてしまった。さぞかし無念であったに違いない。「悪魔の詩」の日本語版の翻訳者ということが殺害された原因だと思われるが、特にイスラーム世界の医学の歴史研究にはかけがいのない人であった。

日本の医学史研究者にとって、東西医学の接点であるイスラーム圏の医学がアジアとヨーロッパの医学にどのような影響を及ぼしたかを明らかにするには、医学部出身学者の力だけでは全く不十分であった。氏は理学部数学科を卒業し、大学院では美学芸術学専攻、理科系と人文学系の両方の力があり、長年イスラーム圏で研究生活を送っていただけに、日本の医学史研究者に多くのインパクトを与えてくれた、なくてはならぬ貴重な研究仲間であった。

今まで日本語訳のなかったイスラームの医学者イブン・スィーナー（980-1037年）の「医学典範」の翻訳を行っている。「東方の医と知」（平成元年講談社刊）ではそれまで疎遠で暗かったイスラーム世界の医学が、実は一二世紀末にラテン語に翻訳され、以後二〜四世紀にもわたってヨーロッパ各地の大学医学部で定本的教科書として用いられていたことを理路整然と4部15章にわたって論述しながら、一哲学者としてイスラーム医学の深さと知の沃野（よくや）の開拓の必要性を教えてくれた。

庭野平和財団から「伝統的医薬学の宗教的基盤」で助成金を受けての研究の後、昭和62年4月から筑波大学で比較文化学類の重要なスタッフとなり、竹本忠雄教授をはじめとする良き師友に囲まれ、糸の切れた凧（たこ）的な生活から、やっと落ち着いた研究者として出発し始めた矢先の不慮の死である。何としても痛ましい。

「11の幻影のあとだ・・・」

竹本忠雄（筑波大学教授）

イスラーム学の輝く星であり、イスラーム世界とその知のよき理解者が抹殺されたことは大変残念なことである。イスラーム世界にとつても悲しい出来事であり、よき友を失ったことになる。日本の医学史研究者にとつても大きな痛手であることはイスラーム学と同じほど大きい。

学問の世界では、前記の「東方の医と知」の他に「知の連鎖―イスラームとギリシャの饗宴」「中東共育のすすめ―イランの知恵と日本の無知」「イスラーム・ルネッサンス」「神秘主義のエクリチュール」「摩擦に立つ文明」などの、イスラーム世界を足で歩いた汗と砂ぼこりのにている労作があることを忘れてはならない。

小川亮作氏も現在の医学水準なら41歳で死ぬことはなかった。五十嵐氏の急逝も理不尽の早死にである。新潟生まれのペルシャ学者は立派な仕事を残してあつたという間に学問の世界から消え去つてゆく。

秀才とか天才とかいう人たちはしよせんそのような運命を背負つて生まれてくるのかもしれない。それにしても五十嵐氏の突然の死は、医学史研究の分野で多くの学恩を受けていただけに、何としても口惜しく言葉もない。「冥福を祈る暗たんたる心の底に、氏の志を継ぐペルシャ学者、イスラーム研究者が現れることを願わずにはいられない。そして、「東方の医と知」という名著のあることを医学史研究者、医師だけでなく、広く皆様にも知つてほしいのである。

いまにして思いあたる予兆にすべては先立たれていた。現象は二度にわたつて私の身に起こつた。

最初は、その年――一九九一年――の3月26日、真昼時に、ニューヨークを歩いているときだった。マンハッタンの五番街で、ふと、斜め右手前方の超高層ビルを見あげた瞬間に、思わず目を疑つた。ピラミッド型に尖つたそのてっぺんから、下方へと、堂々たるファッサード全体が溶けて、まるで溶岩のようにどろどろと落下してくるではないか。幻陰だろうか、それとも急に自分の目がどうかしたのか、周りを見まわしたが、嚇つと照りつける初夏なみの暑い陽ざしのもと、人々は何もないうちに往き来しているだけだった。明らかにこれは自分の身にだけ起こつた何事かなのだ。一瞬の厳格にすぎないことを念じて目を伏せ、恐る恐るふたたび視線を上げてみたが、巨大な砂糖菓子溶けて垂れ落ちてくるかのようにその建物は、なおも尖頭部から崩れ落ちる光景を止めないのであつた。ついに私は耐え切れず、近くのレストランへと逃げ込んだ・・・。

その夜、ホテルの夢枕に、筑波山の老宮司が立つた。「大変な凶事が迫つている。このままでは避けがたい・・・」。

二度目は、それから一カ月たらずのちの4月20日、おなじく真昼時に、今度は東京で起こつた。若ヶ溪のある会堂に向かう途中で、やはり右手前方の建物を見あげたとたん、息を呑んだ。そのビルはせいぜい5、

6階しかなく、そのあたりではいちばん高かったのだが、道路に面したフアッサードがやはりどろどろに溶けて崩れ落ちてくるのだった……。

運命の、あの7月11日まで、あと82日の時点だった。

私にとつては、大学の学系長職の三年目、そして最後の一年が始まったところだった。筑波大学の、この学系に、五十嵐一氏は所属していた。四年前の氏の採用のときから私はその成行きにかかわり、のみならず、採用時から数年前にさかのぼる最初の出会いのときからして奇妙な暗合のもとに置かれていた。東京の産経ホールで行われたある会議で二人は出会ったのだが、会議のテーマは「死後の世界」と題されていたのである。

この出会いがきっかけとなって、翌年、筑波大学で行われた国際シンポジウム「科学・技術と精神世界」にオブザーバーとして五十嵐氏を招待するのはこびととなった。当時は、誰ひとりとして、のちに氏が助教としてここに赴任してくるなどと考えた者はなかったが、しかし、おそらくは、なにかが、アカデミズムの一拠点としてのこの場をこえて、別の場のなかでわれわれを結びあわせようとしていたのではあるまいか。天折の天才という言葉をささげたいほどの、この早駆けのエスプリは、綺羅星のごとく恩師旧友に囲まれていて、私などが後からはいりこんでできたり顔のことという資格はないのだろうか、にもかかわらず、氏の骨を拾う陣頭に立つにいたった因縁は、そのように隠されたなものかであったに相違あるまい。

筑波の雰囲気は五十嵐氏の気に入っていたようだった。求めて敵をつくるようなところのある氏の振る舞いも、このキャンパスのなかにまでは持ち込まれなかった。ある種の聖域、と考えていたのではなからう

か。五十嵐氏にたいして、学生は賛嘆し、同僚は驚愕し、上司は感謝していた。まれに遺恨をもった人のハブニングもないではなかったが、そして、こちらも、陰ながら苦勞させられていたことも事実であったが、だが、つねに私は五十嵐氏を庇い、ひとこともそれを漏らしたりはしなかった。知るや知らずや、夫子も、廊下で擦れちがうことに立ちどまつて恭しく一札するのみであった。

しかし、その間に、黒雲は徐々に東上しつつあったのだ。

どうして氏がそれを知らなかったはずがある。

どうしてまた、私は、ひとこと氏に声をかけて、苦衷を聞いてやらなかったのか―あれほど兆候は出ていたのに。

ニューヨークで幻影を見てから15日目、東京で幻影を見る十日まえの4月10日に、ある講演会があつて、そのあとのパーティ席上に氏も私もいた。氏はつかつかと私のそばに来て、言った。「数字のことはお任せ下さい……」。講師は、まさに私のためにニューヨークまで出かけて三顧の礼で迎えてきたある隠秘学の大家で、その通訳をつとめた私が数学の翻訳で手こずった光景を見ての申し出であつた。謙虚な物言いに私は感激するとともに、氏が文学者であることに劣らず、数学者であり、神秘家に劣らず数学者であることを改めて思い出さずにはいられなかった。だが、そのとき、招待客に紛れて氏が、私の身近な学生の一人にそつとこう打ち明けていたことまでは知らなかったのである。「ぼくはね、狙われているんだよ……」

お互いに君子でありすぎたのだろうか。

なぜ、もつと愛語をもつて、私のほうから水を向けてやらなかったのか。何のための、そもそもあれは予兆だったのか。またなぜ、あの会を挟

んでそれらは現れたのか。

しかも、ニューヨークでも東京でも、なぜ太陽にいちばん近い建物を選んで、そのてっぺんから崩壊する現象を見せたのか。

われわれのなんびとも、やがて一大異変が自分たちをも巻きこみ、しかもそれが今世紀最大の日蝕と時を同じくして起こるであろうなどということを知る者はなかった。

いや、この同時性・・・共時性に気づいた人が、ただひとりあるにはあった。祝詞の形をかりてこの人は次のように語っていたのである。

・・・是(これ)の神代の物語を日蝕を恐(かしこ)みし、古代人(いにしへびと)の伝承(つたへこと)と説けども、平成三年七月十一日(旧五月晦日)の宵より明くれば旧六月朔日の新月を算ふる十二日未明、ハワイ・メキシコ・ブラジルにては真昼にて日蝕の道筋にあたり、特にメキシコ・ラスベガスの空にては今世紀最大の観測されし日頃にてありける・・・。

この「新月」をもって祝詞はイスラム世界のシンボルを暗示し、日本の太陽神の隠れました天の岩屋戸の神話にさらに触れることによつて、なぜこの度の禍(まが)つ日が起きたか、その秘教的請われを説き明かそうとしたのであった。

そして「此の所にて力の限りを尽くして荒き荒行(すさび)を伐ち平げて安き眠りにつき給へ幽世(かくりよ)に身退(みまかさ)りましぬる(・・・)五十嵐(いそ)大人命(うしのみこと)」を英雄として称えたのであった。

7月25日、故人の終わりの地となったエレベーター前で「故五十嵐助教授にささげる清払い祝詞が詠されたとき、並み居る哲学、神話学、

民俗学などの研究者諸氏、あつとばかりに驚いて、見えぬ天空をただ振り仰ぐほかはなかった。

祝詞の奏者は、筑波山神社の老宮司、青木芳郎氏だった。

幻影、夢告、すべては本当だったのである。

五十嵐一君と「過剰の平衡」

中村 真一郎(作家)

私の友人には様々の努力者がいるが、五十嵐君は、そのなかでも全く新しい型の人間である。

はじめ彼が旧知の雅子さんのお婿さんとして私のまえに現れた時は、古代科学史とギリシア美学だかを専攻しているという、野心的な青年だった。

それが、いつの間にかコプト語をはじめ、初期のキリスト教の分派について研究しているというようなことを聞かされている間に、雅子さんからアラビア語を大きな声で勉強しているので、うるさくてかなわないと愚痴を言われている間に、イランに出かけて行って、王立アカデミーのメンバーとなり、一方でアラビア医学の古典の翻訳を世に問うたりして、私を驚かせた。

私が彼等夫婦と会うのは、大概軽井沢に限られていたが、顔を合わすごとに、彼は何か新しいことを始めていた。ある時は、ドイツ語を物にするために、教師をやつて予習を自分に義務付けて、一年間でABCか

らはじめ、ちゃんと読めるようになった、と教えてくれて私を感心させた。これは私もラテン語を試みて、計画通りには行かなかった前歴があるので、彼の実行力には恐れ入ったわけだった。

そこまでの彼の印象は、大変な勉強家というイメージだった。

ところが彼の出版記念会に招かれて行って、多彩な客に交わっているうちに、彼の印象は更に飛躍的に拡大された。それは、彼の先生が先輩に当る、有名な西洋史の教授と、社会評論家とのふたりともが挨拶のなかで、彼のテレビ・タレント風の才能を激賞し、学者としてやって行けなくなっても、その方面で充分、食べて行けると話した時だった。

彼はこれらの言葉を実証するかのように、その席の主賓でもあるにも係らず、途中から自ら司会者となって、絶妙な喋り芸を展開し、きりなく歌を聞かせて、私を混乱させた。

そのうちに、彼がイラン革命を題材に取った台本を書いて、芝居だかオペラだかを上演したという評判を聞こえて来た。そして、今回は「聖喜劇」を書いて講演するから、そのパンフレットに何か書けと言ってきた。

こうなると、もう驚異というより、恐畏という感じになってくるが、私の友人のなかでも、彼のようにアカデミックな領域から芸術的領域までを、きりなくカヴァーする人物は、他に存在しない。

そこで、作家としての私は、必然的にこのような人物の、人格的仕掛けについて分析したいという、職業的衝動に促えられてくる。

その時、私の脳裏に閃いたのは、青年時代に読んだ、英国のオルダス・ハクスリーの、ルネサンスの人間に与えた定義である。

代々、一流の知識人を生んだハクスリー家の、遺伝の結晶である、知的怪物だったオルダスは、精神だけで肉体的ない、現代知識人の典型で

ある自分を恥じて、それに対する反対物として、精神も肉体も、そのあらゆる要素を、過激なまでに発達させ、しかし分裂することなく、その諸々の「過激さ」のあいだにバランスを取って、健康に人生を享受して生きたルネサンスの人間を「過剰の平衡」と呼んで、それを自分にはかなわない、人類の理想像として呈示してみた。

肉体の方は、私もまたまるで自信のない方なので、ハクスリーのこの評論は、大いに感銘を与えられたもので、しかし、このような人物の評論は、大いに感銘を与えられたもので、しかし、このような人物は西歐近世初期に奇蹟的に突然変異的に発生したのかと思つて、その後、半世紀の間、忘れていたが、今、思いがけなくも、目のまえに、五十嵐君という、雅俗混交の、精神と肉体との、途方もない過激さのあいだに丈夫なバランスのとれた人物に、実際に出会うという、幸運に浴したのである。

この、いつも胸を張つて、自信満々に世界をのし歩いている人物は、レオナルドやヴァザリーやアレチノの遠い親戚なのである。

(初出：五十嵐一作、聖喜劇「エマーム」プログラム一九九〇年二月)

「畏友」五十嵐一

増成 隆士 (筑波大学教授)

五十嵐さんは、私にとつてまさに「畏友」だった。

多方面にわたつて知識がきわめて豊富で、その知識の豊かさは量的に

もたいへんなものであったが、さまざま知識が相互に関連づけられている、そういう豊かさであり、それゆえ、教えられることが非常に多かった。

五十嵐さんの知的力量の基盤にあるもののひとつは、卓越した記憶力だったと私は思う。このことは、日常のいろいろな機会でも知り、驚かさされた。たとえば、私が何かの折に口にした人名や日にちなど、五十嵐さんにとってはさほど重要なものではないと思われるものでさえ、かなりの時日が経過したのちに、五十嵐さんの口から突然正確に出てくるのである。

また、*mimesis* の能力、とくに音声と言語におけるその能力もたいへんなものであった。*Mimesis* は、対象の特徴が奈辺にあるかをその本質的なところから見抜く洞察力と、こうして獲得された認識をみずから再現する技量との両能力が合体して初めて可能になる。そして、その再現に、みずからの創意による *modification* をほどこすだけの力量の余裕があれば、その *mimesis* はもはや「模倣」という蔑称を受け付けない創造的な営みとなる。五十嵐さんのまさにおそるべき多言能力も、ひとつにはそうしたものとして可能になったものであることはまちがいないが、より注目すべきは、五十嵐さんは、学術研究において高いレベルで *mimesis* ができたたくいまれなひとであったということである。五十嵐さんは、たとえば、真にプラトンの論理で、プラトン風の語り口で、しかもプラトン以上の内容を込めて、語ることもできたし、真にスワラルデーイー以上の内容を込めて、語ることもできた。

五十嵐さんは古今東西の思想・文化に通じ、多方面にわたって識見を示した、すでに「碩学」であった。

と同時に（いや、「だからこそ」と言うべきかも知れないが）、五十嵐さんは若くして碩学となつてしまった破格の人間の哀しみを深く味わざるを得なくなつてしまつていたのではないかと私は想像する。世の中でひとかどのものとして通つてゐるもの、愚かさや空しさに対して、耐え難い思いを抱いていたのではないだろうか。

五十嵐さんの言動は、芸術の様式用語を借りて言えば、「表現主義的」という語が当てはまる。それに対するひとびとの好悪ということはそれこそいわば「趣味の問題」で致し方ないことであるが、あまりに表現主義的な面が五十嵐さんの真価の社会的認知の障害となつたということ、私は惜しむずにはいられない。

五十嵐さんが良寛の世界への共感を表明し、たとえば「あわ雪の中に立ちたる三千大世界（みちあふち）／また其の中にあわ雪で降る」という歌に、「あわ雪（＝粉雪）の舞う中によく見れば道や家が立っている。しかしその風景もまた雪でかき消えてしまう。あるいはその風景を見つめる私の目の中にも雪が降り込んで見えなくなつてしまふ」（・・・私と雪との間のいわば主観と客観の相互浸透、相互溶解を詠みきっている。）という独自の解釈を示しているのを見ると、『神祕主義のエクリチュール』、五十嵐さんの能動的で醒めた謙念の深さを感じる。

五十嵐さんがいたらどういふ洞察を示してくれるだろうかと考えずにはいられない問題が多い。五十嵐さんの亡きあと、それは、私にとつて、おそるべき不在である。



五十嵐君を偲ぶ

74回 森澤 盾
(旧姓石田)

七月の雨の降る日の午後だった。ポケットベルが何度も自宅の留守番電話にメッセージが入っている事を知らせた。公衆電話から聞いてみた。それは私の老母からのメッセージだった。「五十嵐君が刺されました。」次に「五十嵐君が殺されました。」というまさしくショックなものだった。夜帰宅しニュースを見ると、五十嵐筑波大助教授の死

は、まさにセンセーショナルな扱いで、しばらくは連日報道されることになるむごたらしい殺人事件になっていた。どうにも落ち着かなくなり日曜日通夜に行ってきた。報道関係者があちらこちらでニュース種を捜していた。何とも言えずやり切れない夜だった。実は私と彼とは、幼稚園から高校まで一緒だった。知的能力においては月とスッポン

程の違いがあり、とても学友と呼べるものではないがそれでも彼と一緒に学べたのは思い出深い。昔を思い出す。幼稚園の時、彼の描く絵の中の人の顔は、輪郭に黒、バステルを使うため肌色がいつも汚れた色になっていた。小学校の時、低学年の時から一日に五〜六時間は勉強する

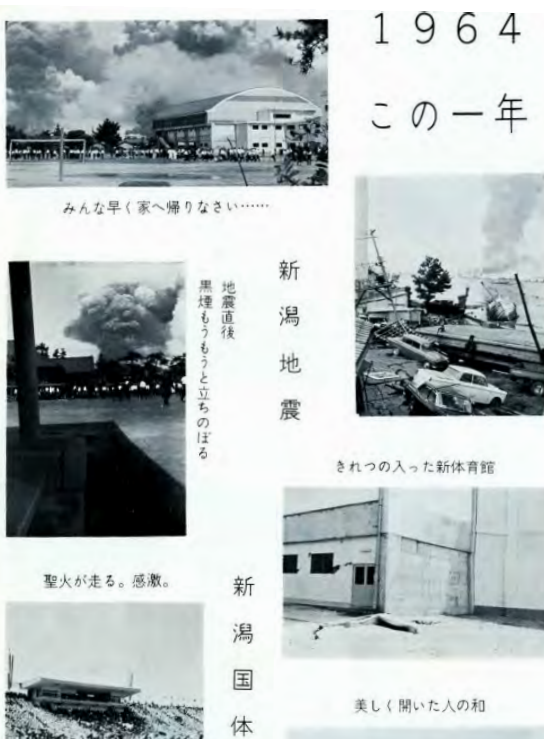


るのが好きだと言っていた。中学三年の時、受験勉強なんかせず、彼は大学数学を楽しそうに解いていた。そして卒業予餞会では当時のNHK

ヒット番組「夢で逢いましょう」のパロディを脚色、演出し、自分は坂本九になり切っていた。ちなみに私は司会の中嶋弘子役をやらせられた。新高高校に合格した時、彼は私に「石田もちゃんと勉強は、していたんだなあ」と言った。本当に懐かしい。

社会人になって久し振りに会った。クラス会等にはまめに顔を出す人だった。すごいセンスのプレゼンを着た先生みたいな人になっていた。私が仕事の事で一寸悩んだ時、彼は「世の中、どんな世界でも、見ている人は見ているっていうことしかないよ」と言っていた。これが彼と会った最後だった。全く残念でならない。

新潟県立新潟高校「青陵」10号 昭和40年2月発行「1964新潟地震・新潟国体特集」
 “五十嵐一 ～ 新潟高校2年時”



△特集▽ 第19回国民体育大会新潟大会の思い出

津波来たる………二年三組 五十嵐由之………43
 「若手県立大船渡高校からの見舞状」………42
 教頭先生の話………二年九組 五十嵐一………38
 新潟地震で感じたこと………二年五組 榎直樹………36
 新潟生ここにあり………二年四組 広橋正博………35
 病身をひきずつて………二年五組 竹内一明………31
 家族とともに………二年十組 印藤京子………29
 地震日記………二年二組 浅野浩子………26
 もし校舎が倒れたら………一年九組 佐久間京子………25
 石油タンクの傍で………一年三組 塚本修………24
 「マスコミに振りまわされ」………一年六組 茶村由美子………22
 新潟地震「回想録」………22

△特集▽ 新潟地震と新高生………13
 新高生への影響………9
 新潟地震座談会………8
 新潟地震「回想録」………5
 巻頭言………5
 学校長 丸亀金作………5
 青陵編集部………8

青陵 10 も く じ

表紙および原カブト………関口昌孝

昭和四十年二月十五日印刷
 昭和四十年二月二十一日発行
 新潟市関屋下川原二
 発行者 新潟県立新潟高等学校生徒会
 新潟市四軒通四番町
 印刷所 株式会社 文明堂印刷所
 電話(2)八七二八番

教頭先生の話

二年九組 五十嵐 一

ピシツと鳴居がきしむ。瞬間心臓がキニーツとしめつけられる。あれ以来余震は震度二ほどのものを最大として小さいものは数知れずおそつてきた。その度ごとにピクツとする。やつぱり顔は平気を装っているが、地震でうけた恐怖は、はらわたの底までしみとおっているのだなと、痛感する。

地震とは、本来「地震ふる」（地震＝大地十ふる＝自動・振れる）というのだそうだが、本当にそのとおりである。建物が振れたのではなく、大地が振れたのだ。ザツクリとザクロのような割れ口を露わしていた道路は何よりも無気味であつた。それは人間の意志に無関心なことを語る冷い自然の姿であつた。

グラグラなどではない。ユサツ、ユサツとゆつくりと、しかし大きく振れた。机がザザザと小刻みにふるえる。あまりの大きさに一瞬何が起つたのか茫然として、椅子から立ち上ることもできなかつた。一人が教室から逃げ出そうと机をガタガタさせながら素頓狂な声で叫ぶ、「ウヒヤー、地震ダー」。初めて何が起つたのかはつきりしてきた。だがまだ、どうせすぐ止むことだろうと思ひながら、窓ガラスのパターンと振子のように窓ワクにぶち当たる音に促されてか、飛び出した。なぜか、その時おかしくなつてきた。後で顧ると、おしつぶされたような笑いを浮べていたに違ひない。何で

おかしかつたのだろう。一つは、地震が終わりそうになつてからやつと飛び出していく自分の姿が滑稽であつたのかもしれない。また一つには、おそらく学校にいる最中の出来事であつたからかもしれない。学生というものは、最も悲惨な出来事をも茶化してしまう術を心得ているらしい動物なのだ。「地震コンバヤルゼー」などと言える連中なのだ。またあるいは、何か得体の知れない大きな出来事自分たちにふりかかつてきたことに対する、皮肉な笑いであつたのかもしれない。自分の身にかかわることではないことならなんでも見てやろうというあの好事家の笑いである。これは後から考えたことである。ともかく、教室を出た後、階段を五、六段とびに飛びおりた。後日友人から聞かされた話によると、教室を一番最初に飛び出したのは自分であつたそうだ。今述べてきたようなことは本当にほんの刹那のできごとであつたのかもしれない。中庭に出てみるとまだ大地はゆれている。プールの水が、のたうつていた。六月のカラリと晴れた好天気の日であつたのに、かえつて照りつける太陽はあたりの空気を炙り殺したような緊張を感じさせるものにしていった。少し目まいを感じた。突然の出来事に胸がつかまつている。段々人が多くなつてくる。ふと空を見上げたら、いつの間にか大きなキノコ雲が快晴の青空に、ドス黒い、ドブネズミ色に近い灰色の巨大な円柱が、沈黙の青空に押し出されているところであつた。先の方は白く雲になつている。まつたくの沈黙の中では、雲の描く軌跡の音が聞えてきそうであつた。急に家のことが心配になつてきた。あたりの家は殆んど無傷であつたから、建物はまず大丈夫だとは思つたが、年よりがあわてて逃げ出す途中、火鉢につまづいてケガなど

しなかつただろうかと、不安になつてきた。もし無事なら向こうもこちらのことをそういうふうに心配しているだろう。とにかく早く連絡をとりたいと思つてやや冒険ではあつたが電話のところまでいった。素焼きの陶器みたいな顔をした二人の女子が同じ目的で来ていた。通じるわけではない。表通りへでようと思う。教官室の廊下のまっ白なカベに、ハメ絵を両端からひつばつて裂いたような割れ目が生じて中から土がのそいでいた。黒かつた。やられた、と直感した。外はさすがに騒々しかつた。もう避難していく人がいる。玄関のアスファルトに筋が一本、二本……。バカツと割れて、地面が隆起していた。道路へ出てみると、下水管が切れたのだろうか、黄土色の汚水がふきあげていて田町の方へ流れていく。道行く人はもうひざまでこいでいかねばならない程だつた。電話はもろんだめ。人の流れに従つて運動場へ向う。キノコ雲の恐怖でいつばいだつた。石油か何かだろうとは見当がついたが自分の家の方向とは全く一致していたため、(昭石―旭町―県高と結ぶと殆んど一直線なのだ)しかもすぐ先に見えたので、この世の終りという気持がしてきた。グラウンドは水でビチャビチャだ。小さくかたまつて集合した。生徒先生ともことの重大さをつかみかねているような顔をしていた。「私も全くどうなるか今のところ全然わかりません。ただ、今後の予定もどうなるか今のところ全然わかりません。ただ、今の地震で学校も目に見えるだけでも相当な被害をうけております。この分だとみんなのお家の方でも、あるいは大きな被害をうけられたところも多いのではないかと思います。またお家の方々も君達の安否を気づかわれておられることでしょうし、とりあえず今日は午後の子

定を一切打ち切つてこれからすぐそれぞれの家庭にもどつてもらいたい。で、明日からのことは、新聞やラジオを通して、指示があると思ひますが、自分でよく判断をして軽卒な行動に出るようなことのないようにしてもらいたい。これからすぐ帰るわけですが、途中場所によつては交通が非常に混乱していると予想されます。どこがどういうふうになつているのか全く見当がつかないのだから、自分の身の安全ということをよく考えて、帰つてもらいたい……。」という川口教頭の声は、不安のざわめきの中でよく聞きとれはしなかつたが全員のいだいていた気持を物語つていた。二、三の指示の後すぐに解散。くつのかかをとつぶしながら外へとび出る。松波町のあたりは案外被害が少ない。やや安心した。道路には、ラジオのまわりに四人、五人とても家の中には入れないという顔つきで放送に聞き入つている。そんなに暑くもないのに油汗がタラタラと出る。顔の蒼白であることは、肌が感じていた。新商の生徒が素足で浜の方へ避難していくのに出会ふ。「津波がくるぞ」とかいう声はチラホラ耳に入つてきた。チリ地震津波の惨状を連想して、ひどい恐怖にかられる。足はひとりでに進んで家までたどりつく。何ともない。みんな外にいた。家のあたりはまつたくふだんの昼下り時と変わりない。ただ空には不気味な雲があることを除いては。新潟地方に午後一時二分、かなりの地震があつたそうだ。なお津波警報がでてきているという。おはずかしい次第であるが、実は津波は海岸から襲つてくるものだとばかり思つていた。それで、あの砂丘を越えて津波がくるようなら新潟は全滅だと心配していた。家の中に入る気はないし、なんとなく昭石の火災に惹かれてドツペリ坂まで四度ほ

どみに行つた。まつすぐ天空に炎をふきあげてはいるが大した火事ではないと思つた。もう一昔も前になるが、昭和三十年の大火のときの歯の根もあわないくらいの恐怖を感じたことに比べればずつと小粒だと思つた。夜間猛火の中を避難された山の下方面の方には申しわけない話で恐縮ですが。

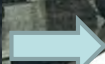
人間というのは手前勝手なもので、自分の身辺が安全だとわかると、すぐ持ち前の野次馬根性を暴露する。昭石の火災の高見の見物をするようになっては、もう避災者が気の毒だの何だ彼だ月並なことを並べてもはじまらない。ここで罹災記録は打ち切らねばならないのである。

「新潟地震の教訓を生かして」などというが、とんでもない話だ。災害にあうたびに、経験だとか得たものだなどと言うが、そんな教訓ならはじめから災害をうけずにすまされた方がよつぽどましなのである。教訓などというものは、はじめから定まつているのであつて、天から偶然に転がり落ちて来るものではない。今回の地震で一番あわてた連中というのも、それは死ぬ準備を怠つていた者たちである。生きるということは死ぬ準備を整えることだという教訓を知らないからだ。兼好がこういうことを言つてる。死は向こうからこちらへやつて来るものと皆思つているが、そうではない。実は背後からやつて来る。沖の干潟にいつ潮が満ちるかと言はながめているが実は潮は磯の方から満ちるものだ、と。

最後に、全番組を変更して地震速報一本にしほつて報道を続けられた、BSN、NHK新潟放送局、新潟日報社、等々に、深く感謝しなければならぬ。いかに非常時とはいへ、利益を度外視した、放送や新聞発行を行うことは、ハタでみる以上の勇気がいるものなのである。

新潟県立新潟高校「74期・卒業アルバム」より
“五十嵐 一 ～ 新潟高校3年時”

昭和41年3月発行



英語同好会



「酔都志会」新潟県立新潟高校74期・東京同期会 昭和55, 56年各開催時
“五十嵐一 ～ 高校卒業後14,15年時”

第三回酔都志会 昭和55年2月23日 1980=S55年(卒後14年) 外苑・吉宗(茜の向い)



第4回 酔都志会

昭和56年3月7日

1981=S56年(卒後15年)



(50/68)

新潟県立新潟高校同窓会「青山会報44号」 昭和62年1月発行
“五十嵐一 ～ 新潟高校74期・卒業20周年記念同期会 ～ 新潟市イタリア軒”

青山同窓会会報 第44号 昭和62年1月22日発行

「74回卒業20周年同期会」が、
去る8月16日(土)5時半より

20周年の74回

74回 藤田一己



発行所／青山同窓会
〒951 新潟市関屋下川原町2-635
新潟県立新潟高等学校内
TEL.025-266-2131
編集、発行人／上村光司

イタリア軒にて盛大に行なわれました。会場では、卒業以来の久しい諸先生や友人達と顔を見合わせて歓声があがるなど、20年という歳月を飛び越えて、高校時代に戻ったような楽しいひとときでした。四十路を前に各方面の第一線で活躍している年代のため、海外出張を始め仕事の都合などで、惜しくも出席できない人達からのメッセージも印刷して配布され、話題は仕事のこと、子供のこと……と尽きないようです。宴が盛り上がると、応援歌など「青山」を熱唱し、最後には、クラスごとに先生を囲んで記念写真を撮り散会いたしました。



その後も夜ふけまで、古町のあちこちで、昔話に花が咲



いた様です。

(藤田一己記)



筑波大学で教鞭を執った開講授業科目一覧

開講年度	授業名	学期	時限	対象学類	授業内容
1988	英語IIC	1-3	木3	人文・比較1年	
	英語I	1-3	月4	社会・人間1年	
	英語I	1-3	木5	社工・情報1年	
	英語IIC	1	金2	国際1年	
	英語I	1-3	木2	基礎工1年	
	言語哲学演習	1-3	木4	比較文化学類（標準履修年次1~2）	「『成唯識論』と『ルーミー語録』とを読み合わせながら、言語と意識、そして、存在の深みへと降りていきたい。仏教哲学やイスラーム神秘主義の教養を特に前提とせずに、ことごらの本質に即して考えたい。」
	記号文化論演習	1-3	月5	比較文化学類（標準履修年次3~4）	「『Illness as Metaphor』(S. Sontag), 『Naissance de la clinique』(M. Foucault), 『知の連鎖』(五十嵐一)を併せて読みながら、記号、象徴、メタフォア等の問題を考察する。」
総合科目「考える方法」(責任者:増成隆士)	4/23, 4/30	土2	比較文化学類開設:対象全学1・2年次	テーマ「人間はこう考え始めた」	
1989	英語IIC	1-3	木3	人文・比較1年	
	英語II	1-3	木4	社会・人間1年	
	英語I	1-3	木2	基礎工1年	
	異文化社会	1-3	土2	比較文化学類開設、日本語・日本文化学類指定(標準履修年次2)	「異文化社会に、珍奇なものへの好奇心や、異様な少数派への同情的まなざしを向けるのではなく、文化の深く豊かな可能性を拓く契機、もしくは母体として把握し、実感する方途を探る。」
	文化哲学演習	1-3	月5	比較文化学類開設(標準履修年次3~4)	「中世ヨーロッパの学生詩歌集Carmina Buranaを読み、かつ歌う。現代版世俗的カンタータに仕立てたCarl Orffの試みも参考に、中世文化の現代的意義を総合的に検討したい。ラテン語テキストを中心に各国語訳を用いる。」
	言語哲学	1-3	木5	比較文化学類開設(標準履修年次1~2)	「イスラーム神秘主義を軸に、言語の深層に切り込む。今年度は特に、文学言語との位相差を探る。扱う範囲は、スワフルディー、ルーミーを始め、老荘思想、良寛、宮沢賢治、オウディウス、ブレイク、マラルメ・・・等。」
記号文化論	1-3	月4	比較文化学類開設(標準履修年次1~2)	「記号論の各種イデオムとそれに関わる諸問題を概論的に紹介しつつ、実際に文化を記号論的に分析してみたい。今年度は特に、芸術作品(前半)と社会現象(後半)を例に採り上げて考察する。」	
1990	英語III	1-3	木3	日本語・日本文化1年	
	英語I	1-3	木2	基礎工1年	
	英語I	1-3	木5	社工・情報1年	
	異文化社会	1-3	土2	比較文化学類開設、日本語・日本文化学類指定(標準履修年次2)	「異文化社会に、珍奇なものへの好奇心や、異様な少数派への同情的まなざしを向けるのではなく、文化の深く豊かな可能性を拓く契機、もしくは母体として把握し、実感する方途を探る。」
	文化哲学	1-3	月5	比較文化学類開設(標準履修年次1~2)	「『悪魔の詩』(ラシュディー)、『最後の誘惑』(カザンザキス)、『バラの名前』(エーコ)等、宗教絡みの文学の持つ毒が世界を騒がせた。文学を含む文化一般と宗教との抗争は永く古い。本講では、双方の毒を毒味する。」
	現代思想特講AII	1-3	木4	比較文化学類開設(標準履修年次2~3)	「美しく青きドナウが全てではない。白きドナウ(ポテフ)は、ブルガリア独立の象徴であった。ドナウの彼方(タキトウス)とは、ゲルマン社会を意味し、有史以来ユダヤ人、トルコ人が往来したドナウ河文化論を語る。」
	記号文化論演習	1-3	月2	比較文化学類開設(標準履修年次3~4)	「Platon: Kratylosの原典講読。併せて、Wittgenstein, Frege, Quine, Strawsonらの言語観、記号論を検討する。いずれかのテーマに興味を持つ学生を歓迎する。」
1991	英語I	1-3	木2	工学システム・基礎工1年	
	文化哲学	1-3	木4	比較文化学類開設(標準履修年次3~4)	「文化現象としての『預言』を考察する。ユダヤの預言者たちはもろんのこと、クルアーンやカッパラー、さらには比較論として神道神学書(旧事本紀系統および渡会神道)に及ぶ。学問に拘る覚悟のある者のみ受講可。」
	記号文化論	1-3	月5	比較文化学類開設(標準履修年次1~2)	「『小説の記号論』を講じる。すでに文学の枠に止まらず文化的、社会的現象となった『悪魔の詩』、『善魔の名前』を記号論、記号文化論的に解説してみたい。」
1991	【大学院】	学期	時限	開設	
	(共通科目)				
	日本文化特殊研究I演習(a)	1-3	月3	哲学・思想研究科	「風姿花伝を中心に花(=華)の思想を探求する。必ずしも能楽に限定せず、広く歌道(定家や宣長)や仏教思想(唯識や華嚴)にも目を配る。テキストの精読を中心に、しかしパフォーマンスにも目を向けたい。」
	(日本文化研究学際カリキュラム)				
	哲学思想論		不定期	哲学・思想研究科	「『預言の構造』を探る。預言といえばユダヤの預言者たちを直ちに連想するが、本講ではそれに止まらず日本神道の神学的著作(旧事本紀注釈本系統から渡会神道)に帰する預言的思維との連関を探求したい。」
日本文化資料演習2(歴史)A	1-3	月2	哲学・思想研究科	「風姿花伝を中心に花(=華)の思想を探求する。必ずしも能楽に限定せず、広く歌道(定家や宣長)や仏教思想(唯識や華嚴)にも目を配る。テキストの精読を中心に、しかしパフォーマンスにも目を向けたい。」	

1991年

(著書)

『中東ハンパが日本を滅ぼす——アラブは要るがアブラは要らぬ——』、トクマ
ブックス、徳間書店、1991年、212pp。

(論文)

「Imago Dei と Imago Belli のあいだ」、『IMAGO』、1991年1月号、青土社、pp.55-
63。

「筑波シンドロームの危険度」、『正論』、1991年4月号、産経新聞社。

「スポーツ・ルール考——ひとつの様式美学をめぐる——」、『馬術』、春季第
54号、日本中央競馬会、1991年3月。

「“ラクダの儒教”としてのイスラーム」(’91・6・22第19回公開市民講座の要
旨)、『現代とトインビー』、No.78、トインビー市民の会、1991年12月。

「無差別爆撃の思想」、『仏教』、No.15、法蔵館、1991年4月。

「“胸ふくらむ想い”への誘い」、『仏教』、別冊5、法蔵館、1991年6月。

「脈動する自然と自然学——イスラームの医学的自然観——」、上智大学中世思
想研究所編『中世の自然観』、創文社、1991年。

「映像メディアを活用した、美学理論の開発と提示のための基礎研究」(増成隆
士教授との共同研究)、文部省科学研究費(一般研究C)、研究成果報告書、
1991年3月。

「なんとなくフラクタル——「正義」の味方のブラック・ボックスを空ける鍵」、
『現代思想』、1991年5月号、青土社、pp.192-203。

「イスラームの書物連鎖——イブン・スィーナの書物的人生を中心に」、『ユリイ
カ』、1991年8月号、青土社、pp.132-139。

(時評)

「崩壊を読む——保守反動の復活を憂う——」、『新潟日報』、1991年1月16日。

「死に化粧のレトリック——中東の死生観——」、『産経新聞』、1991年3月15
日。

「革命は短調で、戦争は長調で——中東の音楽的グラフィティ——」、『東京新
聞』、1991年3月29日。

(エッセイ)

「弟、由之よ・・・」、『良寛入門』(季刊『墨スペシャル』第6号)、(株)芸術新聞
社、1991年1月。

成元年 11 月号、特集『悪魔の詩』の波紋、pp.87-109。

『小説『悪魔の詩』事件——イスラームを国際化する——』、『ユリイカ』、平成元年 11 月号、特集『悪魔の詩』の波紋、pp.146-156。

「日本は『油断』の必要なし——イラクのクウェート侵攻——」、『東京タイムズ』、〈シリーズ直言〉、1990 年 8 月 15 日。

「フセインは狂人か——イラクの宗教と民族の背景——」（上）（下）、『宗教新聞』、1990 年 10 月 13 日、20 日。

「なにふり構わぬ本音の対応へ——ポスト冷戦下の米ソと中東諸国——」、『世界日報』、1990 年 5 月 26 日。

（編著・監修）

アンヌ・マリ・デルカンブル著、『マホメット——預言者たちの最後の封印——』（知の発見双書 05）、創元社、1990 年 11 月。

（訳書）

サルマン・ラシュディー著『悪魔の詩』（上）・（下）、プロモーションズ・ジャンニ、新泉社、1990 年 2 月、9 月。

（対談録）

「サダム・フセインとアメリカ裏のウラ」（草柳大蔵氏との対談）、『花も嵐も』、1990 年 10 月号、山河社。

（書評）

「コーランを読む——イスラームの逍遙④——」、『月刊アーガマ』、1990 年 2 月号、No.108、〈特集・愛〉、阿含宗総本山出版局。

「小山茂樹著『サッダーム・フセインの挑戦——湾岸危機の底流にあるものは何か——』、『東京新聞』、1990 年 12 月 23 日。

（講演録）

基調発題「イスラーム的知の相貌——科学と宗教の錬金術——」、およびパネルディスカッション、『研究フォーラム「科学と宗教の未来ヴィジョン～科学と宗教の接点を探る」』、財団法人庭野平和財団、平成 2 年 3 月 30 日。

（会議録）

IBM 第 9 回伊豆会議報告「ポスト冷戦の世界の日本“大発見”——異質論を越えて文化を創造する道——」、日本アイ・ビー・エム株式会社、1990 年 11 月 16・17・18 日。

(時評)

「“対外摩擦”体験の大先輩鴎外・松陰・継之助に学べ」、『東京タイムズ』、<シリーズ直言>、1989年5月31日。

(書評)

「秀村欣二監修『人間と文明のゆくえ——トインビー生誕100年記念論集——』、日本評論社、『産経新聞』、1989年5月12日夕刊。

1990年

(著書)

『イスラーム・ラディカリズム——私はなぜ『悪魔の詩』を訳したか——』、法蔵館、1990年、241pp.

(論文)

「“もつ”と“もたれる”話——イスラーム神秘主義の視点から——」、『現代思想』、1990年9月号、青土社、pp.94-101。

“The Sterile ‘Imperial Debate’, Echoes of Peace”, Quarterly Bulletin of the Niwano Peace Foundation, No.31, <The Emperor of Japan: Symbol and Reality>, 1990 Oct., pp.17-18.

「『悪魔の詩』 番外篇——言論の自由狂騒曲の陰で——」、『正論』、1990年4月号。

「小説『悪魔の詩』の陰影を読む」、『Φfai』、1990年5月号、pp.20-27。

「アラブはなぜ戦うのか——原理篇」、『正論』、1990年10月号、pp.53-64。

「イスラーム分派運動とフセインの行動様式」、『AERA』、緊急増刊号、1990年10月1日号、pp.35-36。

「中東の仁義なき戦いを読む」、『月刊 Asahi』、1990年10月号、pp.225-227。

「私はなぜ『悪魔の詩』を訳したか」、『中央公論』、1990年4月号。

「愛求する神と人——イスラーム的愛の一性——」、『月刊アーガマ』、1990年2月号、No.108、<特集・愛>、阿含宗総本山出版局。

「かくも長き医の道程——the lyf so short, the art so long to learn——」、『自立する科学史——伊東俊太郎教授還暦記念論文集——』、北樹出版、1990年4月。

「大地もまた水の上であり——アフリカ問題の極小化を探る——」、『アフリカ文明との対話』、春秋社、1990年7月、pp.25-48。

「『悪魔の詩』の全貌——英語文学としての解説 (=毒) ——」、『ユリイカ』、平

(共著)

「イラン・イラク戦争停戦後の中東を読む」、『人間と文化』、教養講演集 48、三愛新書 148、三愛会、平成元年 7 月 20 日。

「イスラームの科学思想——まなごしの精密化と涵養——」、岩波講座・東洋思想第 3 卷『イスラーム思想 1』、岩波書店、1989 年。

「神・知性・人間——イスラーム的知性論のトポロジー——」、岩波講座・東洋思想第 4 卷『イスラーム思想 2』、pp.245-266。

「聴け、葦笛の物語を・・・——イスラーム神秘思想管見——」、久野昭編、『神秘主義を学ぶ人のために』、世界思想社、1989 年 1 月、pp.191-209。

「数のシンボリズム——割りきれぬ宇宙へ——」、『占星術と錬金術——火と輝き——』（『週刊朝日百科世界の歴史』 20）、朝日新聞社、1989 年。

「舞の神秘・スーフィーの美学」、『アルコールとモスク——イスラームの伝統——』（『週刊朝日百科世界の歴史』 40）、朝日新聞社、1989 年。

(論文)

「神秘主義のエクリチュール (IV) ——放下の感覚——」、『言語文化論集』、第 28 号、筑波大学現代語・現代文化学系、1989 年 3 月、pp.147-162。

「西洋思想の場合——流出論もしくは全的・一体論の検証——」、『比較思想研究』、第 16 号、〈特集「東西における善と悪」1〉、比較思想学会、1989 年。

「イスラームの死生観——イブン・スィナーの医学思想に見るバランス感覚の妙——」、『東洋学術研究』、第 28 卷第 4 号、〈特集「生と死の省察」〉、財団法人東洋哲学研究所、1989 年。

「イマームと天皇——ひとつの比較指導者論——」、『仏教』、別冊 2、法蔵館、1989 年 11 月。

「ホメイニが守り通したもの」、『知識』、1989 年 8 月号。

「拝啓ホメイニ様——『悪魔の詩』の読者より——」、『平和と宗教』、第 8 号、庭野平和財団、1989 年。

「宗教人の倫理/宗教貴族に御用心！——その名誉欲ボケと野合を問う——」、『正論』、1989 年 8 月号、〈特集・浮遊する社会、霧消する倫理〉、産経新聞社。

「『悪魔の詩』の悪魔性・ホメイニ師はなぜ英国人作家ルシュディ氏に死刑をせんこくしたか」、『月刊 Asahi』、1989 年 6 月号、No.1。

1988年

(論文)

「イスラームにおける養生法——桑林の舞からスーフィー旋舞へ——」、『中国古典養生思想の総合的研究』、平河出版社、1988年2月25日。

「語呂合わせのすすめ」、『こ・と・ば・あ・ら・か・る・と』、『外国語教育論集』、第10号、筑波大学外国語センター、1988年3月、pp.280-281。

“Theory of Creation and Beauty in the Qur’an”, 『AESTHETICS』3。

「イスラームの巡礼——変身と変心の軌跡——」、『巡礼と文明』、春秋社、1988年。

「神秘主義のエクリチュール (I) ——présence 感覚の特性づけ——」、『言語文化論集』、第24号、筑波大学現代語・現代文化学系、1988年1月、pp.187-204。

「神秘主義のエクリチュール (II) ——absence 感覚の陰影——」、『言語文化論集』、第26号、筑波大学現代語・現代文化学系、1988年7月、pp.206-220。

「シルクロードに掛ける橋——イラン・イラク、革命と戦争に潜む宗教的知恵——」、『仏教』、第4号、法蔵館、1988年7月。

「死がよしや、ことわりならば... “シャー・ナーメ” に見るペルシャの悲劇的物語」、『IS』、ポーラ文化研究所、1988年12月。

「神秘主義のエクリチュール (III) ——ひとつの修行道——」、『言語文化論集』、第27号、筑波大学現代語・現代文化学系、1988年12月、pp.186-200。

(時評)

「イ・イ戦争の政治決着」、『読売新聞』、1988年12月。

(エッセイ)

「心をひらく言葉“臣の好むところのもの・料理人の心意気は道なり、技を進えたり (荘子内篇・養生主篇)”」、『神奈川新聞』、1988年5月31日。

1989年

(著書)

『摩擦に立つ文明——ナウマンの牙の射程——』、中公新書 919、中央公論社、1989年。

『神秘主義のエクリチュール』、法蔵館、1989年。

『東方の医と知——イブン・スィーナー研究——』、講談社、1989年。

(財)庭野平和財団平和研究会、1986年。

“Traditional Greco-Islamic Pathology: A Search for Causes of disease”, History of Pathology, Proceedings of the 8th International Symposium on the Comparative History of Medicine – East and West. The Taniguti Foundation, Maruzen, Co., Ltd., 1986.

(対談録)

「現代医学における倫理的新事態と宗教——ホアン・マンア氏、五十嵐一氏に聞く」、『News Letter 生命・人間・社会』、Vol.1, No.3, 三菱化成生命研究所・社会生命科学研究所、1986 Sep.

(書評)

「意味の深みへ ——東洋哲学の水位——井筒俊彦著・岩波書店 1986年刊——」、『文明』、第48号、東海大学文明研究所、1986年11月。

(エッセイ)

「なんとって IDOL!」、『現代思想』、1986年4月号、青土社、p.225。

「光と闇の交響詩——私のイラン文化紀行——」、『聖教新聞』、昭和61年7月19日号、p.7。

1987年

(論文)

「Two Cheers for Theocracy! ——神秘主義のすすめ——」、『現代思想』、1987年2月号、青土社、pp.170-177。

「The lyf so short, the craft so long to learn——医学の移転における challenge と response——」、『宗教と文化』12 聖心女子大学キリスト教文化研究所、1987年3月。

「ラディカルに問い糺すこと」、『庭野平和財団報』、No.31、1987年9月1日。

「ナウマンの牙——レトロ的カルチャ・ショックの系譜——」、『Research & Development』、No.876、冬季号、三井物産株式会社調査部、1987年。

「ジャカルタの門——もう一つのシルクロード」、『日本クウエイト協会報』、1987年12月。

(対談録)

「イスラム神秘思想と音楽」(柘植元一氏と対談、司会高畑律子)、『すばる』、1987年10月号、<特集・神と舞と詩・アジア>。

「自然の偉大な鎖」、新・岩波講座『哲学・5 自然とコスモス』、岩波書店、1985年。

(時評)

「イラン・イラク戦争を読む 上・下」、『東京タイムズ』、昭和 60 年 3 月 26、27 日。

(論文翻訳)

セイエド・モハンマド・ハッジ、「ルーミーにおける“自由意志”の概念」、『ハルブーザ』、No.155、ハルブーザ社、昭和 60 年 2 月。

セイエド・モハンマド・ハッジ、「ギリシア＝イスラーム医学における気質理論について——『ホラズム王の財宝』にペルシア医学の伝統を探る——」、『パーキスターン』、No.87、財団法人パキスタン協会、1985 年。

(対談録)

「宗教が爆発する」(井門富士夫と対談)、『東京タイムズ』、1985 年 1 月 3 日、5 日、6 日、8 日 (4 回連載)。

(エッセイ)

「地球を読む」、『東京タイムズ』、連載コラム、自 1985 年 5 月 13 日～至 1986 年 1 月 27 日 (毎週月曜日掲載)。

1986 年

(著書)

『イスラーム・ルネッサンス』、勁草書房、1986 年、223pp.

(論文)

「気を揉む話——フェア・プレイと反則八百長の美学——」、『現代思想』、1986 年 5 月号、青土社、pp.156-164。

「嘘の効用——裁判の詩学と『詩学の裁判』——」、『現代思想』、1986 年 6 月号、青土社、pp.79-87。

「エイズの如き君なりし……——直喩としての病理学——」、『現代思想』、1986 年 9 月号、青土社、pp.188-197。

「イスラーム登場——戦争と平和の背後にあるもの——」、『現代とトインビー』、No.63、トインビー市民の会、1986 年 2 月。

「変心の神秘としての真人教育——イスラーム神秘主義の味わい——」、『平和と宗教』、No.5、<21 世紀における平和と宗教・人権の根底にあるもの>、

年度科学研究費補助金（総合研究 A）、研究成果報告書（研究代表者、今道友信）、放送大学哲学研究室刊、昭和 59 年 3 月。

「病のかたち・モルフォロジーの宿命」、『講座＝思考の関数 2<かたち>の時空系——超越と偏移——』、朝日出版社、1984 年 4 月。

「アッラーから八百長の神へ」、『庭野平和財団報』、1984 年 8 月 1 日、No.20。

「アッラーの神——ひとつの神名論的反省——」、『日本クウェイト協会報』、1984 年、August, No.113。

“Imām and Walr —— Shiite’ Wisdom beneath the Harjomarj of Revolution”,
Proceedings of the 31st International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa, Tokyo, The TōhōGakkai, 1984。

（論文翻訳）

クリスチャン・ジャンベ、「創造的世界天使とモナド」（五十嵐雅子と共訳）。

M. キャヴェン、「ユークリッド『原論』およびアリストテレス『自然学』における連続の取り扱いについて」、『数学・言語・現実』（下）、日本評論社、1984 年。

（エッセイ）

「自著を語る『音楽の風土』」、『Will』、1984 年 10 月号、中央公論社。

1985 年

（論文）

「詩が真実——文学社会学序説——」、『理想』、1985 年 2 月特別号、620 号、理想社、pp242-253。

「西の音、東の音——中洋の視点から——」、『日本クウェイト協会報』、1985 年 March、No.117。

「戦争と革命の神学——イスラームの知恵に学ぶこと」、『平和と宗教』、1985 年、No.4<21 世紀における平和と宗教>、（財）庭野平和財団平和研究会。

「秤の学——イスラーム的知の相貌——」、『宗教と文化』、第 11 号、聖心女子大学キリスト教文化研究所、1985 年 4 月。

「疑惑の教壇——三浦曾根和義弘の注入狂育批判——」、『現代思想』、1985 年 11 月号、青土社、pp.266-274。

「イスラームの美学思想——知性と人格美——」、『講座・美学 第 1 巻／美学の歴史』、東京大学出版会、1985 年。

(編著)

「イスラームの生死観」、医学研究振興財団編『人間の生命について考える』、講談社、1983年、pp.146-155。

(論文)

「エンジニアリングいまはむかし」、『数理科学』、1983年1月号、No.235、〈特集・はじめ〉、サイエンス社、pp.48-51。

「決定論的思考を排す」、『日本クウェイト協会報』、1983 February、No.104、pp.7-9。

「一つの普遍論——創造空間への道——」、東京大学美学藝術学研究室編『美学史論叢』、勁草出版サービスセンター、pp.120-133。

「狼は来るか!? ——エグゾゼ・ミサイルと第三次オイル・ショック——」、『人と日本』、1983年、12、pp.11-14。

「イラン最新事情——イスラーム革命と戦争がアヤなす光と闇——」、『週刊東洋経済』、1983年10月22日号、pp.50-53。

「IJPC 問題に寄せて——ペトロポリスの夢のあと」、『月曜評論』、昭和58年6月13日号。

(発表)

“Imām and Walr —— Shite’ Wisdom beneath the Harjomarj of Revolution”, 31st International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa” 第31回国際アジア・北アフリカ人文科学会議、1983年9月2日。

“Pathology and Aitiology —— a look into Greco-Islamic view of Medicine”, 8th International Symposium on History of Medicine (Pathology in History). 1983年9月17日。

(書評)

「井筒俊彦著『意識と本質』岩波書店刊」、『東京大学新聞』、1983年4月19日。

「小山茂樹著『誰にでもわかる中東』、『日本経済新聞』、昭和58年1月16日。

1984年

(著書)

『音楽の風土』(中公新書)、中央公論社、1984年、210pp。

(論文)

「コーランにおける創造観——自己作品化の美学——」、『藝術と創造』、昭和58

1982年

(共著)

第3章 遺伝子工学と新しい生命観——生命科学とイスラム教——「II. イスラムから見た生命観」、『生命科学と宗教 II [セミナー] 生命操作と人間』、佼成出版社、1982年9月、pp.133-150。

(論文)

「命名と分類(一)～(五)——『医学典範』(イブン・スィーナ)における解剖学と生理学——」、『科学医学資料研究』、第95、96、98、99、101号、野間科学医学研究資料館——(一)第95号、pp.1-5、(二)第96号、pp.1-5、(三)第98号、pp.8-11、(四)第99号、pp.1-5、(五)第101号、pp.1-5。

「神の愛でし人——イラン・イスラーム思想の現状と意味——」、『理想』、1982年3月、第586号<現代の思想状況 I>、理想社、pp.33-45。

「知のシルシラ——イブン・スィーナ『医学典範』を繞って——」、『日本クウェイト協会報』、1982, February, No.98, pp.7-10。

「ヘラクレイトス異聞——ペルシャとの知的交流——」、『現代思想』、1982年3月、<臨時増刊・ソクラテス以前>、pp.171-177。

(リーフレット、講演録)

「技術移転の諸問題——イラン・イスラーム・IJPC」、社団法人民主主義研究会、pp.43-85。

(エッセイ)

「イスラムの理念と政治性——四民平等の“神主”主義」、『世界日報』、昭和57年11月21日号、p.9。

(書評)

「イスラーム文化/井筒俊彦著」、『日本経済新聞』、昭和57年2月21日号、p.12。

1983年

(著書)

『知の連鎖——イスラームとギリシアの饗宴——』、勁草書房、1983年1月、246p。

『中東共育のすすめ——イランの知恵と日本の無知』、東洋経済新報社、1983年9月、203pp.+。

「非同盟自主独立路線の陥穽——イラン・イラク戦争の背景——」、『月曜評論』、昭和 55 年 11 月 3 日、No.510、p.1。

「シリーズ・西胡の巷にて」、『ESP』、社団法人経済企画協会——1980 年 2 月号、
⑬「拝啓ホメイニ様」(3 月号)、⑭「テヘラン・コネクション」(4 月号)、
⑮「私のテヘラン生活白書」(5 月号)、⑯「チューナールよ、さらば」。
「イラン再訪」、『新潟日報』。

1981 年

(著書)

「クオ・ヴァディス・イーラーネ?——イラン革命の光と陰——」、中東協力センター、1981 年 2 月、68p。

(訳書)

イブン・スィーナ『医学典範』(アラビア語原典からの翻訳/訳注・解説付き)、朝日出版社、1981 年 11 月、<71>+374pp。[解説、pp.<27>-<71>・訳、pp.1-191・訳注、pp.193-210・解剖図譜、pp.211-284・テキスト、pp.285-360]。

(論文)

「混沌の神は死なず——イランの知恵と日本の無知」、『中央公論』、1981 年 2 月号、No.1131、pp.184-203。

「“危機とバランス “の中東相関図」、『人と日本』、1981 年 8 月号。

「巨人軍よ、イランへ行け——新中東交際法——」、『ESP』、1981 年 1 月号、No.184、pp.140-145。

「待ち人來たらず——イラン人情論断章——」、中東経済研究所編『中東ジャーナル』、丸ノ内出版、中央公論事業出版制作、1981 年、WINTER、No.3、<特集/アラブの心、ペルシアの心>、pp.47-48。

「イラン——世界の潮流・底流——」、『経済論壇』(1981 年 1 月から 3 回連載)——「イラン・イラク戦争の性格」(1 月、pp.74-75)、「カリスマの土壌」(2 月、pp.60-61)、「めぐり来る春は再び」(3 月、pp.58-59)。

「“魔の二オ” ことしわが家では」、『幼児開発』、1981 年 2 月号、pp.88-89。

「イランの“暑く熱い夏”」、『信濃毎日新聞』、昭和 56 年 7 月 24 日、文化欄、p.11。

「危機に臨むホメイニ政権」、『世界日報』、1981 年 10 月 7 日号、pp.8-9。

「複眼的理解の必要——パレスチナ問題に寄せて——」、『月曜評論』、昭和 56 年 11 月 2 日、p.1。

1980年

(論文)

「知恵の連鎖——イスラーム哲学への一視覚——」、『現代思想』、1980年2月号<特集・イスラームの世>、pp.82-91。

「躑かぬ神——イデオロギーとしてのイスラーム——」、『日本クウェイト協会報』、1980 April、No.87、pp.5-8。

「イラン革命診断」、『エコノミスト』(3回連載)——「イラン病症候群の病理——バザールとイスラームが育んだ特異性——」(6月24日号、pp.46-52)、「拝啓日本商社様——日本産業主義の精華を世界に——」(7月1日号、pp.42-48)、「イランはどこへ——石油なければのどけからまし——」(7月8日号、pp.54-60)。

「酔いの神秘——ペルシア・アラブ飲酒詩管見——」、『現代思想』、1980年8月号、<特集・エクスタシーの哲学>、pp.147-157。

「神の道での努力——ジハードの内的構造——」、『日本クウェイト協会報』、1980、October、No.90。

「疑うゆえにわれあり——同時代史を見る目——」、『文化会議』、1980年12月号、No.138、pp.2-9。

「水と火の共存——イラン式内部抗争の論理——」、『経済論壇』、1980年12月号、pp.44-49。

(対談)

「イラン・シンδροームの謎 (vs.井上英二氏)」、『人と日本』、1980年2月号、行政通信社、pp.18-30。

(書評)

「黒田壽郎著『イスラームの心』」、「井筒俊彦著『イスラーム哲学の原像』」、『東京大学新聞』、昭和55年6月23日号、p.1。

(エッセイ)

「対話」、『朝日新聞』、1980年5月5日、外信欄。

「月曜寸言」、『月曜評論』、昭和55年6月16日から9月15日まで隔週連載——「百聞は一見に如かず」(6・6、No.490)、「祈りの健康法」(6・30、No.492)、「No.2の論理」(7・14、No.494)、「断食と聖戦の月」(7・28、No.496)、「皇帝の死」(8・11、No.498)、「人質、金質、物資」(8・25、No.500)、「私的対応のすすめ」(9・15、No.502)。

(論文)

「知的総体としてのイスラーム」、『理想』、1979年12月号、No.559、<イスラーム哲学>、理想社、pp.120-123。

(論文翻訳)

J.モスレフ、「モッラー・サドラー哲学の基礎」、M.モハツェク、「イブヌッ・サムフ：哲学の目的について」、R. アルナデス、「イブン・アラビーにおける神秘的われ」、A. S. メリキアン、「秘境的主題と神秘的主題」、『理想』、1979年12月号、No.559<イスラーム哲学>、理想社、pp.44-123。

(書評)

「イスラーム生誕——井筒俊彦」、『文化会議』、1979年2月号、財団法人日本文化会議。

(講演録)

「イスラームとは政治・経済・軍事・文化、すべてを含めた一戸のコミュニティーである——イラン、イスラム・インダストリアリゼーション」、『MBK Life』、1979年3月号、pp.21-27。

(エッセイ)

「イラン人気質をめぐって健全な一騎打ち形式——」、『朝日新聞』、昭和54年3月16日夕刊、p.5。

「私のイラン体験」、『新潟日報』、全9回連載(1979年10月)——①「再訪」10月13日、p.8、②「ペルシアの市場」10月14日、p.9、③「イマーム・ホメイニ」10月17日、p.10、④「秤とアルジェブラ」10月18日、p.9、⑤「シャーベット考」10月19日、p.9、⑥「石油とエビ」、10月20日、p.7、⑦「忍冬の冬も去り」、10月21日、p.9、⑧「No.2の死」、10月25日、p.9、⑨「チェナールよさらば」、10月26日、p.9。

「シリーズ・西胡の巷にて」、『ESP』、社団法人経済企画協会、1979年1月号③「(タイトル不明)」、2月号④「戒厳令のよる(上)」、3月号⑤「戒厳令のよる(下)」、4月号⑥「シャーラフ・イマームアーマド」、5月号⑦「(タイトル不明)」、6月号⑧「大きいことはいいこと?——石油化学プラント訪問第2日」、9月号⑨「後朝の別れとカルペ・ディエム」、10月号⑩「験なきものを思はずは」、11月号⑪「パックス・ホメイニアーナ」、12月号⑫「日本経済にとってイラン革命って何?」。

1972年

(共著)

「ローマの文学」 pp.46-80、「イギリスの文学・中世」 pp.128-154、「イギリスの文学・ルネサンス」 pp.350-376——小場瀬卓三、北条元一、佐藤静夫編『世界の文学 1・古代ギリシャからルネサンスまで』（新日本選書 24a）、新日本出版社、1972年7月。

1976年

(共著)

「イギリスの文学」 pp.109-122——小場瀬卓三、日高八郎、佐藤静夫、北条元一編『世界の文学 3・17世紀篇 バロック・古典主義の時代』、新日本出版社、1976年2月。

「イギリスの文学」 pp.35-103——小場瀬卓三、佐藤静夫、日高八郎、北条元一編『世界の文学 4・18世紀篇 啓蒙の時代』、新日本出版社、1976年4月。

(論文)

「中世ユークリッド伝承の展開——Hermenides 証言を繞って——」、『中世思想研究』（中世哲学会誌）、1976年第XVIII号、pp.84-97。

「アナロギアの論理 ——イデア論と比例形式——」、『エピステーメー』、11月号<特集・数学の美学>、朝日出版社、1976年、pp.74-90。

1978年

(論文)

「論証科学と文献伝承——数学とその伝承における解釈の契機を繞って——」、『思想』、1978年4月号、No.646、岩波書店、pp.38-48。

(エッセイ)

「シリーズ・西胡の巷にて」、『ESP』、社団法人経済企画協会、1978年10月号から1980年5月号まで16回連載——1978年10月号 ①「ペルシャの国は端の国」、11月号 ②「我らを直しき道に導き給え」

1979年

(著書)

『イラン体験——落とされた果実への挽歌——』、東洋経済新報社、1979年、245p。

方こそ最初から氏独自の学風であった。その年、イラン王立哲学アカデミー研究員——のち会員——として招聘され、昭和54年9月まで3年間にわたって貴重な現地研鑽をつんでいる。帰国後、さまざまな大学で非常勤講師を兼任しながら果敢に執筆活動を展開して名を成し、62年4月筑波大学に助教授として奉職するにいたった。

研究範囲は、イスラム思想を初めとして、数学、医学、ギリシア哲学、美学、科学哲学、比較文化、記号論、舞踊論、ミュージコロジーと、行くとして可ならざるなき七面八臂ぶりで、加えて作詞・作曲・脚色をかねたオペラ作者として舞台でも脚光を浴びた。語学は、英・独・仏は言うに及ばず、ギリシア・ラテンの古典語をこなし、さらには本当の専門はアラビア語とペルシア語であるというふうで、周囲の同僚たる語学エキスパートたちの心胆を寒からしめるのに十分であった。しかも、これだけの幅をこなしながら、大学教育にあたっては、余裕しゃくしゃく、英語の講座だけでも4こまもこなし、しかも、つねづね「自分の学問を本当に理解してくれたのは筑波大学である」と称して感謝を忘れず、どんな役割も進んで引き受け、学生の教育にも熱血をもって当たるというふうで、その気概と誠意には教員・学生の双方ともに感銘させられぬ者はなかった。

殊にも、さながら最期を予期していたかのごとく、人生最晩年の本学での3年間は天分が一時に開花したかのような仕事ぶりで、『摩擦に立つ文明』、『神秘主義のエクリチュール』、『イスラーム・ラディカリズム』、『中東ハンパが日本を滅ぼす』など、名著、問題書を続々と刊行し、なおその間に世上騒然の論議を巻き起こした『悪魔の詩』上下2巻をも翻訳上梓しているのであるから、その獅子奮迅ぶりにはただ脱帽のほかはない。

また、言いかえれば、ここが終焉の地となった筑波大学の生活をかくも愛して、魚が水を得たがごとくかくも見事に学問の総仕上げを行いえたということで、せめても氏は本懐であったかと、われわれとしてはせめてもそれを慰めとする次第である。これを泉下への手向けとし、ご冥福の祈りとしたい。

筑波大学現代語・現代文化学系紀要図書委員会

故五十嵐一助教授著作目録

本目録は、筑波大学紀要『言語文化論集』（第37巻、1993年、251-266頁）より抜粋・一部編集したものである。

——はじめに——

平成3年7月11日夜、筑波大学現代語・現代文化学系助教授、五十嵐一氏は、その研究室を出て、エレベーター前に至ったところで何者かの凶刃にかかり、哀切きわまりない死をとげた。享年44歳、本学赴任後3年3ヶ月という短い春秋の生涯であった。

事件によってあらためて世人を瞠目せしめたごとく、五十嵐氏の業績は、専門のイスラム学を中心に学際的に多彩であるのみならず、各分野においてそれぞれ一級の賓室に輝くものであった。あまりに広すぎて裾野も見えない感さえあるその活動軌跡をまとめあげることが、したがって同学としてのわれわれのつとめであると、一周忌を期して学系構成員は斉しく誓いを新たにしていた。

(中略)

本著作目録はプレリミナリーなものであって、決定版というには程遠い。内容も学術的なものに限った。著書・論文・エッセイ・時評・対談などで発表されたものを可能なかぎり網羅しようとしたが、洩れは十分にありうる。さらに丹念に断簡零墨のたぐいをも集めれば申し分あるまい。五十嵐氏の面目は、学会のみならず、マスメディアでの活動をとおして一層躍如たるものがあったから、その人間像とともに全幅の偉業を復活せしめようとするならば、こうしたすべてを全集的に展開するのが理想であろう。いずれ、このリストが第一歩となってそうした集大成の試みが世上でなされればよいと願っている。

五十嵐氏の略歴をここで繰り返すことが礼に叶っていよう。

氏は、昭和22年6月10日、新潟市に生をうけた。県立新潟高校を卒業後、東京大学理学部数学科に進学し、45年に卒業した。ついで大学院で文系に転じ、人文科学研究科美学芸術学専修課程に進んで、美学を専攻して51年に博士課程を修了したことから分かります。文理の二分性の枠を突破した自由な生き

五十嵐一 追悼集 —— 未来への知の連鎖に向けて ——

二〇一八年七月九日 発行

五十嵐一 追悼集編集局 編

〈非売品〉

h.igarashi.memorial@gmail.com